

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 2 年 度

2 0 1 1 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡試掘調査報告

平成 2 2 年 度

2 0 1 1 年 3 月

京 都 市 文 化 市 民 局



写真1 白河南殿跡 建物1地業（東から・第Ⅲ章-2）



写真2 鳥羽離宮跡 竪穴状土坑3（北西から・第Ⅲ章-11）

ご あ い さ つ

今から1200年以上前の桓武天皇の治世に、三方をおだやかな峰々に囲まれた、ここ京都を「この国、山河襟帯にして自然に城をなす」と表現し、新たに都を遷し、「平安京」と号しました。京都では、それ以後、我が国の政治・文化・宗教などの中心舞台として様々な歴史が展開されてきました。また、市内には遷都以前の遺跡も数多くあり、時代ごとに積み重なった遺跡は、我が国の歴史や文化を正しく教えてくれる国民共有の財産と申せましょう。

このような先人が残した財産を引き継いだ私たちは、これを後世に伝え残していく責務があります。

本市では、この責務を果たすべく、「保存」と「開発」の調和を図りながら、埋蔵文化財の保存と保護、更にはその活用に取り組んでおります。

この度、平成22年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成致しました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに、各調査の実施に当たって、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様には厚く御礼を申し上げます。

平成23年3月

京都市文化市民局長 山 岸 吉 和

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成22年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成22年1月から12月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文中で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（101～104頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系VIによる。標高はTP（東京湾平均海面高度）による。
- 5 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1～13 1/8,000 図版14～20 1/10,000
- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 7 遺物整理にあたっては、岩本淳子・岡本沙千代・掛上英明・上谷美保・田淵厚司の協力を得た。
- 8 調査及び本書作成は京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、(財)京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。



図1 調査地区割図

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安京右京	3
1 三条三坊七町跡・西ノ京遺跡（中京区西ノ京徳大寺町 1）	3
2 六条一坊七町跡（下京区中堂寺北町 44）	6
III その他市内遺跡	24
1 相国寺旧境内（上京区上柳原町 117-2 他、相国寺門前町 700-6 他）	24
2 白河南殿跡（左京区聖護院蓮華蔵町 43-2 他）	28
3 尊勝寺跡・岡崎遺跡（左京区岡崎西天王町 70、70-2）	35
4 法勝寺跡・岡崎遺跡 1（左京区岡崎法勝寺町）	39
5 法勝寺跡・岡崎遺跡 2（左京区岡崎法勝寺町）	48
6 御土居跡（中京区一之船入町 386-2 他、榎木町 450-11 の一部）	58
7 伏見稲荷大社境内（伏見区深草藪之内町 68 他）	62
8 史跡醍醐寺境内 1（伏見区醍醐伽藍町 22-3）	65
9 史跡醍醐寺境内 2（伏見区醍醐醍醐山 8）	68
10 京都市指定史跡法界寺境内（伏見区日野西大道町 14-2 他）	73
11 鳥羽離宮跡 1（伏見区竹田真幡木町 65）	77
12 鳥羽離宮跡 2（伏見区竹田中内畑町 146 他）	93
13 長岡京左京二条三坊十三町跡（伏見区久我西出町 2-33 他）	97
IV 試掘調査一覧表	101
報告書抄録	105

図 版 目 次

- 図版 1 平安宮
- 図版 2 平安京 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 3 " 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 4 " 左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 5 " 左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 6 " 左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 7 " 左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 8 " 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版 9 " 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版 10 " 右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版 11 " 右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版 12 " 右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版 13 " 右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版 14 村ノ内町遺跡・広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡／龍安寺御陵ノ下町遺跡／植物園北遺跡／相国寺旧境内・上御霊遺跡・上京遺跡・寺ノ内旧域
- 図版 15 白河北殿跡・白河南殿跡・六勝寺跡・岡崎遺跡・史跡南禪寺境内／公家町遺跡・法成寺跡・法興院跡・御土居跡／法性寺跡
- 図版 16 中臣遺跡／大宅遺跡・大宅庵寺／伏見稲荷大社境内／史跡醍醐寺境内
- 図版 17 伏見城跡／史跡法界寺境内／史跡名勝嵐山／上久世遺跡／中久世遺跡・大藪遺跡・下久世構跡
- 図版 18 福西古墳群／唐橋遺跡／長岡京跡
- 図版 19 烏羽離宮跡
- 図版 20 長岡京跡

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て787件を数える。その範囲内で行われる土木工事については、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導を行っている。その業務は、当初は文化財保護課が、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきたが、平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課保護第二係が埋蔵文化財行政を担当している。

4種の行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査・試掘調査については、そのほとんどを国庫補助事業として実施している。国庫補助事業による詳細分布調査と発掘調査は（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へ委託し、その成果は、毎年、別冊の報告書により報告されている。

本報告書は、平成22年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査を取りまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保存が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上非常に重要な業務であり、現在4名の技師がこの調査に従事している。

平成22年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（同法第94条）件数は、総数で902件になる。これは前年比で85件減（8.6%減）と減

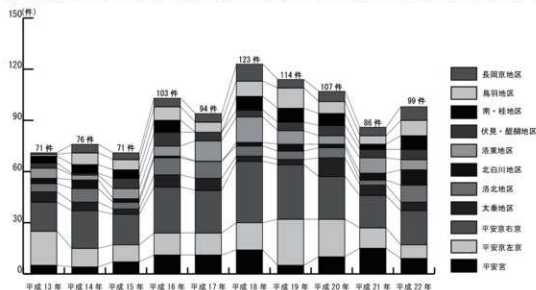


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

少しており、昨年度と同様に大型店舗ビルやマンションなどの重量建造物の建設が減少している。こうした減少傾向は、世界的不況の継続が背景にあるものと推測される。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査 453 件（前年 473 件，4.2% 減）、試掘調査 92 件（同 85 件，8.2% 増）、発掘調査 19 件（同 17 件，11.8% 増）、慎重工事 338 件（同 412 件，18.0% 減）の指導を行った。

こうした指導に基づき、文化財保護課が実施した試掘調査件数は 99 件で、前年の 86 件に比べて大きく増加している。地区別に見れば、洛北地区、北白川地区、南・桂地区に顕著な増加傾向が認められ、うち前二者の増加は、動物園や学校等の大型開発が含まれる。平成 22 年は、市内近郊から市内中心部へのキャンパス移転に伴う大学等の学校施設の新築計画が特に目立った 1 年であった。一方、平安京左京域では前年度に続き調査件数が減少しており、昨今の経済事情により都市部と重複するエリアでの大型開発の停滞を反映していると判断される。

2 平成 22 年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では、京都市域を 12 のエリアに区分している（図 1）。平成 22 年の試掘調査の地区別件数は、平安宮地区 9 件、平安京左京地区 8 件、平安京右京地区 21 件、太秦地区 5 件、洛北地区 10 件、北白川地区 9 件、洛東地区 6 件、伏見・醍醐地区 6 件、南・桂地区 8 件、鳥羽地区 9 件、長岡京地区 8 件、京北地区 0 件である。このうち 13 件（IV 章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、うち埋文研が 9 件（No.2・38・53・54・55・59・64・74・92）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が 1 件（No.34）の調査を年内に実施した。

発掘調査に持ち込まれることによって、村ノ内町遺跡内では縄文時代の遺構と遺物の存在が明らかとなり新たな知見が加えられ（No.53）、平安京左京八条三坊九町跡では平安時代前期から江戸時代まで連続と踏襲されていた七条大路路面を検出した（No.38）。また、工事の掘削深が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、又は設計や工法の変更により当面の保存が図られたため、発掘調査に至らなかった例が 7 件あり、うち No.7・16・21・60・70 については本書において報告する。

一方、保存措置は講じられなかったものを含め、報告すべき成果があった試掘調査として、弥生時代の柱穴列や竪穴住居状の方形土坑、鎌倉時代の井戸などを確認した鳥羽離宮跡（No.20）、尊勝寺阿弥陀堂に関わる遺構を検出した尊勝寺跡・岡崎遺跡（No.69）、白河南殿に伴う建物の地業を確認した白河南殿跡（No.15・67）、長岡京の条坊復元に関して新たな知見が得られた長岡京左京二条三坊十三町跡（No.98）の各調査が挙げられる。

また、本年度は史跡指定地（京都市指定含む）での現状変更に伴って実施した試掘調査のうち 3 件について、詳細を報告する（No.19・78・79）。（鈴木 久史）

II-1 平安京右京三条三坊七町跡・西ノ京遺跡 No. 7

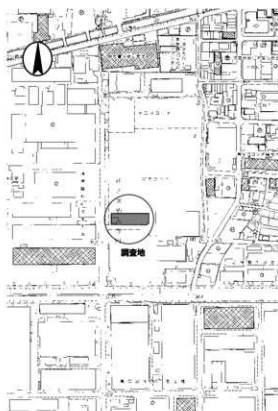


図3 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

本調査は、(株)島津製作所三条工場内において工場新棟が計画されたため実施したものである。調査地は、平安京右京三条三坊七町跡・西ノ京遺跡に該当しているが、同町に関して文献史料は明らかにしていない。七町内では、南東隅の立会調査で、旧天神川の洪水堆積を確認している¹⁾。旧天神川は、戦前まで同町南東部をかすめて南流しており、大正11年測図の都市計画図では、天井川となっていることが読み取れる。従って、調査地は湿潤な環境であったことが想定でき、今回は旧天神川の影響と七町内の宅地利用状況を探ることを目的とした。

調査は、平成22年2月4日に実施し、面積は50㎡である。

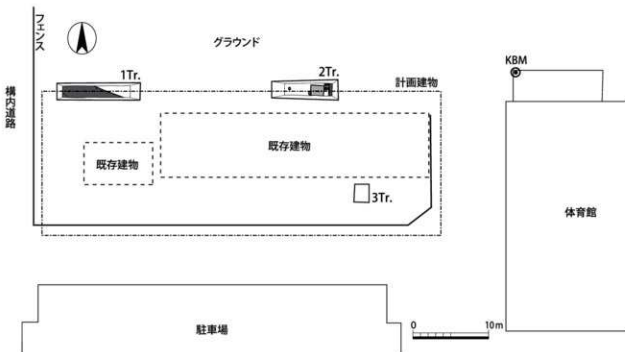


図4 調査区位置図 (1:500)

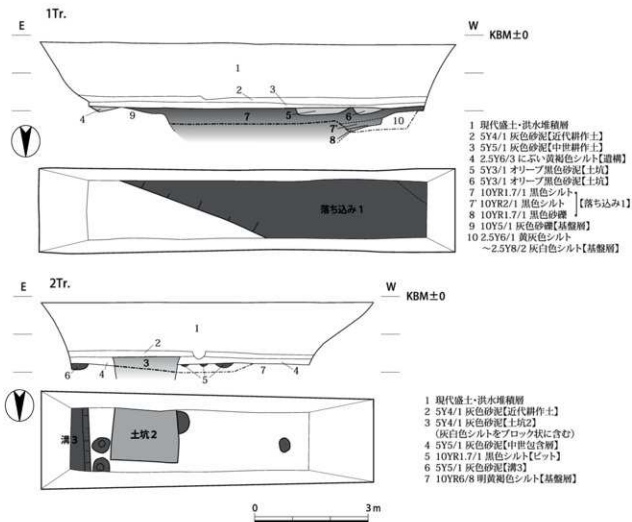


図5 1・2Tr.平面図・南壁断面図(1:100)

2 層序と遺構

計画地には、既存建物や樹木等が残っており、3箇所に分けて調査区を設定した。

層序(図5) 現況の地形は平坦であるが、これまでの調査で、西小路通り(恵止利小路)を境に東側は地山が約1m低くなっており²⁾、近代以降に盛土等の改変があったものと考えられる。

基本層序は、3箇所ともほぼ共通しており、地表面から順に現代盛土、近代洪水堆積層、近代耕作土層、中世～近世耕作土層で、GL-1.5m(KBM-1.8m)前後で基盤層であり、遺構面である。但し、3Tr.では基盤層の上に包含層である黒色砂泥層が堆積している。

遺構(図5) 1Tr.で落ち込み, 2Tr.で井戸, 柱穴, 溝, ピット, 3Tr.でピットを確認している。



写真3 2Tr.全景(北東から)

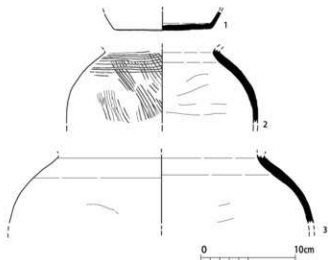


図6 遺物実測図(1:4)

落ち込み1 1Tr.で確認した北西～南東方向の流路である。幅3.3m以上、長さ0.6m以上、深さ0.65m以上で、下層に弥生～古墳時代の遺物を、上層に、平安時代前期の遺物を含む。他に流路埋土上面にて成立する土坑を断面観察にて数基確認したが、時期は不明である。

土坑2 2Tr.で確認した1.8×1.3m以上の方形土坑である。土層から中世に属するものと思われる。形状から井戸の可能性が高い。

溝3 2Tr.東端で確認した南北溝である。幅0.5m以上、長さ1.7m以上、深さ0.15m。平安時代前期の遺物が出土している。

3 遺物(図6)

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器甕、平安時代前期の須恵器杯、甕、鉢、土師器杯、瓦類などである。また、平安時代中期以降の遺物はほとんど認められない。

1は須恵器杯Aの底部である。底径9.8cm。落ち込み1上層から出土した。平安時代前期に属する。2は弥生土器甕又は壺の胴部である。内面ナデと指オサエ、外面縦ハケ後、頸部下にへら描き直線文。近江系。中期に属するものと思われる。3は弥生土器の甕胴部である。内面ナデと指オサエ、外面は摩耗が著しい。2・3ともに落ち込み1下層から出土した。

4 まとめ

今回の調査では、遺構面が良好に遺存していることが明らかになった。周辺の調査成果を含めて鑑みると、平安京遷都以前は、湿地が広範囲に広がるものの、近隣で竪穴住居跡を確認しており³⁾、微高地に居住域が存在し、湿地を耕作地として利用する様相を指摘できよう。遷都後は微高地を中心に建物が展開するが、附近の成果と同様、平安時代中期以降は生活の痕跡が希薄となる。湿潤な土地状況により、当該地は荒地化、耕作地化したことが読み取れよう。

(西森 正晃)

註

1・2) 平尾 政幸ほか『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年

3) 堀内 明博『平安京右京三条三坊九町跡』『平安京右京内5遺跡』平安京跡調査報告第23輯(財)古代学協会 2009年

II-2 平安京右京六条一坊七町跡 No. 9・47〔平成21年度〕

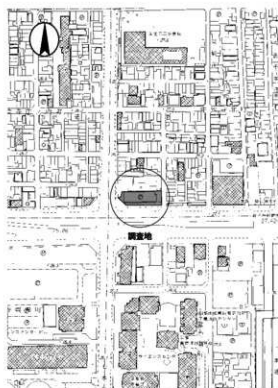


図7 調査位置図 (1:5,000)

註

- 1) 西森正晃「平安京右京六条一坊七町跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局
平成22年

1 はじめに

本件は、下京区中堂寺北町地内で集会場の建設が計画され、平成21年2月及び4月に延べ5日間にわたり調査を実施したものである。調査地周辺は平安京域の中で最も調査成果が蓄積されている場所の一つであり、土地利用の変遷が次第に明らかになりつつある。

調査の結果、自然流路を利用した平安時代初頭の泉3基をはじめ、六条坊門小路北築地等を確認した。すでに調査成果については昨年度に報告¹⁾しているが、良好な堆積状況が確認できたため、土地利用の変遷と古環境の検討を行うことを目的に、自然化学分析を実施した。なお、分析・報告については(株)パリオサーヴェイに委託した。

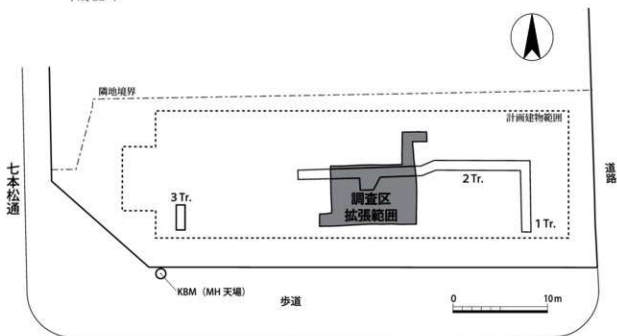


図8 調査区位置図 (1:400)

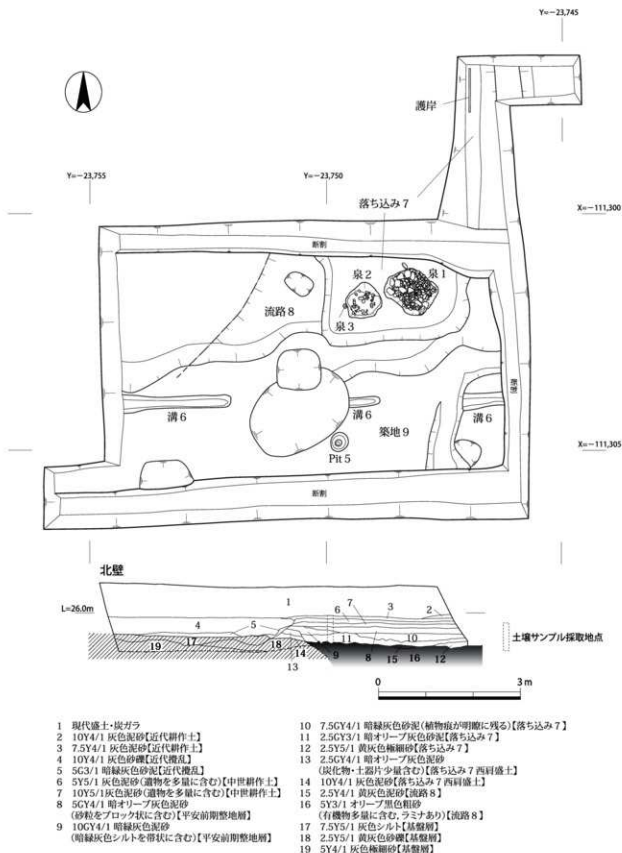


図9 調査区平面・断面図(1:80)

- | | |
|--|--|
| 1 現代盛土・埃ガラ | 10 7.5GY4/1 暗緑灰色砂泥(植物痕が明確に残る)【落ち込み7】 |
| 2 10Y4/1 灰色泥砂【近代耕作土】 | 11 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂泥【落ち込み7】 |
| 3 7.5Y4/1 灰色泥砂【近代耕作土】 | 12 2.5Y5/1 黄灰色極細砂【落ち込み7】 |
| 4 10Y4/1 灰色砂礫【近代掘削】 | 13 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色泥砂
(炭化物・土器片少量含む)【落ち込み7 西側盛土】 |
| 5 5G3/1 暗緑灰色砂泥【近代掘削】 | 14 10Y4/1 灰色泥砂【落ち込み7 西側盛土】 |
| 6 5Y5/1 灰色泥砂(遺物を多量に含む)【中世耕作土】 | 15 2.5Y4/1 黄灰色泥砂【流路8】 |
| 7 10Y5/1 灰色泥砂(遺物を多量に含む)【中世耕作土】 | 16 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂
(有機物多量に含む, ラミナあり)【流路8】 |
| 8 5GY4/1 暗オリーブ灰色泥砂
(砂粒をブロック状に含む)【平安前期整地層】 | 17 7.5Y5/1 灰色シルト【基盤層】 |
| 9 10GY4/1 暗緑灰色泥砂
(暗緑灰色シルトを帯状に含む)【平安前期整地層】 | 18 2.5Y5/1 黄灰色砂礫【基盤層】 |
| | 19 5Y4/1 灰色極細砂【基盤層】 |

2 自然化学分析

パリノサーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、平安時代(9世紀)の落ち込み7を覆う泥質堆積物形成期の調査区および周辺のご環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定による堆積物の形成年代の検討、肉眼・X線写真観察による堆積物の層相解析、花粉・植物珪酸体分析による古植生の検討を行う。

1 試料

調査地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として写真4・図10に示す。調査地点の層相は、発掘調査担当者により採取された不攪乱柱状試料および現地調査時の断面写真に基づいて検討した。以下に上位層準から記載する。

3層：礫、偽礫混じりの細粒砂質泥からなる。偽礫の大きさは不揃いで不規則に配置するが、上部で小さくなる。人為的に造成された堆積物で、耕作土と推定される。

6層：6層上部・下部で層相が異なる。上部は見かけ上塊状をなす、大礫・遺物を多く含む灰色泥からなる。下部は大礫・遺物、炭化物片を多く含む灰～暗灰色腐植質泥からなる。人為的に擾乱されている状況が窺える。本層からは室町時代の遺物が出土している。

7層：灰色泥ないし砂質泥の偽礫が混じる、灰色泥からなる。偽礫は、下部では垂角状をなす4cm程度のものが認められるが、上部では小さくなる。人為的な客土と判断され、上部は6層下部の人為的擾乱の影響を受けている。本層からは室町時代の遺物が出土している。

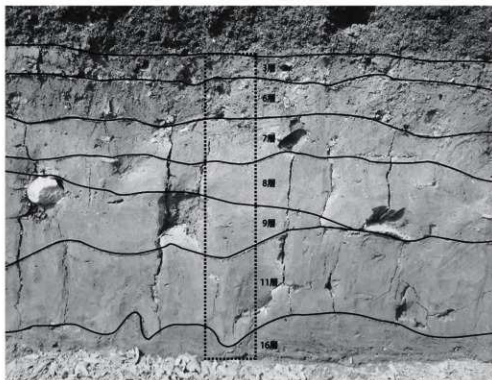
8層：暗オリーブ灰色を呈する砂質泥からなる。著しく流動変形している。この変形構造は、下位16層より本層上部まで連続する一連の変形構造である。後述するように地震動に起因する変形の可能性が高い。

9層：暗オリーブ灰色を呈する泥質砂からなり、著しく流動変形している。下位層準の11層に由来する堆積物が流線に沿って引き摺り上げられている状況が確認される。9層形成期の可能性がある。この含水塑性変形により、初生の堆積構造は不明瞭となっている。変形した粘土ブロック、炭化物混じり細粒砂質泥ブロックおよび小礫などが混じることから、人為的擾乱が及んだ堆積物と推定される(人為的な埋め戻しの堆積物の可能性もある)。

11層：微細な偽礫が混じる有機質細粒～極細粒砂質泥からなる。著しく流動変形しており、下位の植物遺体葉理を挟む泥混じり細粒～極細粒砂が巻き上がっている状況が確認される。滞水状態で形成された堆積物。

16層：植物遺体葉理を挟む泥混じり細粒～極細粒砂からなる。葉理は変形しており、断続的となっている。滞水域で形成された堆積物と推定される。本層準において9世紀頃の集石遺構が確認されている。

分析は、不攪乱柱状試料全体を対象にX線写真撮影観察を実施する。また、9層中の炭化物について放射性炭素年代測定、7層・9層・11層各層上部の堆積物について、花粉分析・植物珪



土壌サンプル採取範囲
(数字)は土層番号

写真4 北壁土壌サンプル採取地点

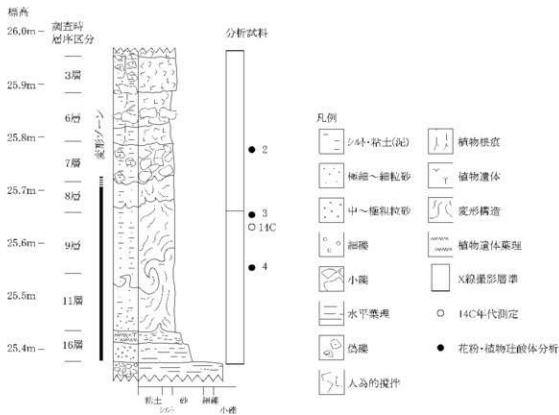


図10 調査地点の層序および資料採取位置

酸体分析を実施する。

2 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC 1 により炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HC 1 によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30分) 850℃ (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma: 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。試料が木材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) X線写真撮影観察

調査担当者により採取されている不攪乱柱状試料を厚さ 1 cm まで板状に成形する。上位の試料については大礫を多く含むため、片面をエポキシ樹脂で固めた後、厚さ 1 cm に成形した。成

形後の試料について、湿润状態のまま、管電圧 50kvp、電流 3mA、照射時間 270 秒の条件において軟X線写真撮影を実施した。なお、撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。X線写真の記載は、堆積物について宮田ほか（1990）、土壌について佐藤（1990a・b）、森ほか（1992）、成岡（1993）などを参考とした。

（3）花粉分析

試料約 10g を秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス（無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（4）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。各分類群の植物珪酸体含量とその層的变化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層的变化を図示する。

3 結果

（1）放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 1、図 11 に示す。炭化物の補正年代値は、 1720 ± 30 yBP を示し、暦年較正值は 2 σ で cal AD 249-391 を示した。

（2）X線写真撮影観察

試料および軟X線写真および主な構造のトレースを図 12 に示す。X線写真は、明るい部分がより高い密度の物質（ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や炭酸鉄）からなり、暗い部分が低密度の物質（水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など）からなる。以下に調査地点の堆積構造の特徴について記載する。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料番号 ・状態	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 BP	暦年較正年代 (cal)			Code No.	
				誤差	cal AD			相対比
					cal AD	cal BP		
14C-1 炭化材	1700± 20	23.63± 0.63	1720± 30 (1721± 26)	σ	cal AD 257 - cal AD 299	cal BP 1.693 - 1.651	0.493	
					cal AD 319 - cal AD 351	cal BP 1.631 - 1.599	0.383	
					cal AD 367 - cal AD 380	cal BP 1.583 - 1.570	0.124	
					2σ cal AD 249 - cal AD 391	cal BP 1.701 - 1.559	1.000	

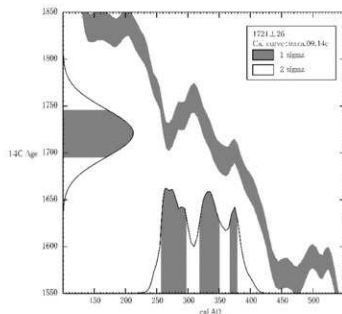


図11 暦年較正結果

調査地点の堆積層は、16層～8層上部まで著しく変形している。最下位の植物遺体葉理を挟む16層の細粒砂では、植物遺体葉理が不連続となっている状況が確認される。その上位の11層は流線状ないし火楯状に著しく変形しており、下位の16層上部堆積物が流線状の変形に沿って、9層まで引きずりあげられている状況が確認される（写真右側の暗色部分）。これとは逆に9層堆積物が11層下方に流動している状況も確認される（写真左側の明色部分）。また、8層も著しく変形しているが最上部は、7層形成期の人為的な客土の影響を受けているため不明瞭となっているが、部分的に水平方向の葉理が連続することがX線写真で確認される。

(3) 花粉分析

結果を表2、図13に示す。花粉化石群集は3層準は類似する。いずれの試料も、草本花粉に比べ、木本花粉の割合が高い。木本花粉化石は、際だって多い種類はないが、その中でもマツ属とスギ属がそれぞれ25%前後を示す。次いで、モミ属、アカガシ亜属、ツガ属、コナラ亜属の順に多く検出される。

草本花粉は、イネ科が多く、中にはイネ属花粉も一割程度含まれる。他には多産する種類はないが、イネ属以外の栽培植物としてベニバナ属やキュウリ属が、水生植物としてサンショウモ、オモダカ属、ミズアオイ属が含まれる。

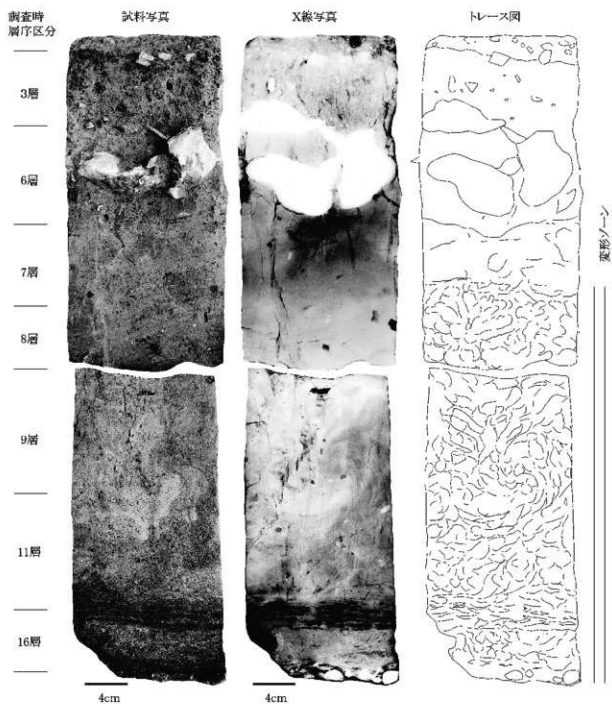


図12 試料・X線写真および主な構造のトレース図

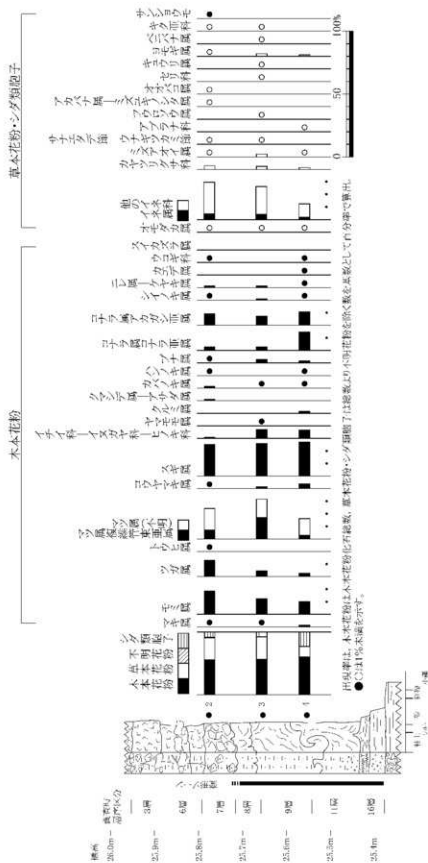


図 13 花粉化石群集の層位分布

表2 花粉分析結果

種 類	試料番号		
	2	3	4
木本花粉			
マキ属	1	1	3
モミ属	54	30	22
ツガ属	38	11	6
トウヒ属	1	-	-
マツ属複雑管束形属	21	42	6
マツ属(不明)	49	36	29
コウヤマキ属	1	4	8
スギ属	73	64	59
イチイ科-イヌガキ科-ヒノキ科	3	17	14
ヤマモモ属	-	1	-
クルミ属	-	-	3
クマシダ属-アサダ属	3	-	-
カバノキ属	4	2	2
ハンノキ属	1	-	1
ブナ属	1	7	4
コナラ属コナラ亜属	8	7	32
コナラ属アカガシ亜属	26	18	23
シイノキ属	1	3	1
ヒレ属-ケヤキ属	4	3	2
カエデ属	-	-	1
ウコギ科	1	-	1
スイカズラ属	-	-	-
草本花粉			
オモダカ属	2	3	2
イネ属	22	18	6
他のイネ科	130	96	38
カヤツリグサ科	16	11	5
ミズアオイ属	2	10	1
サナエダ属-ウナギツカミ属	3	1	-
アブラナ科	-	-	2
フクロソウ属	-	1	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属	3	-	-
オオバコ属	1	-	-
セリ科	-	1	-
キュウリ属	-	1	-
ヨモギ属	2	9	4
ペニペニ属	-	2	-
キク亜科	1	3	-
不明花粉	4	1	2
シダ類胞子			
サシショウモ	1	-	-
他のシダ類胞子	43	34	82
合 計			
木本花粉	290	246	217
草本花粉	182	156	58
不明花粉	4	1	2
シダ類胞子	44	34	82
総計(不明を除く)	516	436	357

(4) 植物珪酸体分析

結果を表3、図14に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。植物珪酸含量は、試料番号2と4がいずれも約2.9

表3 植物珪酸体含量

種 類	試料番号		
	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	600	200	300
タケ亜科ネザサ節	600	200	1,400
タケ亜科	6,900	2,400	8,500
ヨシ属	1,000	1,000	1,100
ウシクサ族ススキ属	800	600	700
イチゴツナギ亜科	400	200	500
不明キビ型	3,100	1,100	2,300
不明ヒダシバ型	1,600	700	2,000
不明ダンシク型	1,300	900	1,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	1,400	500	-
タケ亜科ネザサ節	600	100	1,000
タケ亜科	2,400	2,500	3,700
ヨシ属	2,300	900	1,100
ウシクサ族	500	200	300
不明	5,400	3,200	4,200
合 計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	16,100	7,300	18,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	12,500	7,400	10,400
総 計	28,600	14,600	28,700

数値は含量密度(個/g)を示す。10の位で丸めて表示する。

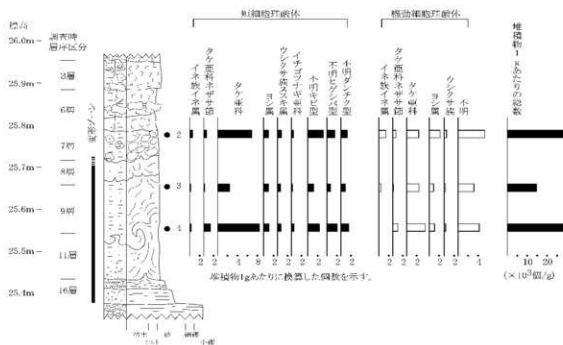


図 14 植物珪酸体含量の層位分布

万個/g、試料番号3では約1.5万個/gで他試料よりも少ない。植物珪酸体の産状は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、栽培植物であるイネ属も検出される。その含量は、試料番号4で短細胞珪酸体が約300個/g、試料番号3で短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約500個/g、試料番号2で短細胞珪酸体が約600個/g、機動細胞珪酸体が約1,400個/gと多くなる。

4 考察

(1) 調査地点で認められた堆積層の変形について

調査地点に堆積する16層から8層は、上記した肉眼およびX線写真観察結果から、著しく流動変形していることが確認された。この流動変形により、16層の植物遺体葉理を挟む砂層の葉理は、不連続となっており、その上位に累重する堆積物は、下位堆積物が流線に沿って、中・上部層準まで引きずり上げられており、一方、上位堆積物が下位層準に陥入している状況が確認された。このような変形構造は、Matsuda (2000) により定義されている、水底下の堆積物で見られる、地震動による変形構造に類似するものである。Matsuda (2000)・松田 (1999) によると、1回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼び、水底に堆積した泥質堆積物（上部ほど水分を多く含むとともに、厚密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ）に認められる1つの変形ゾーンは、上から順に (1) 水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット (liquidized deformation unit), (2) 上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状（ただしフレーム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット (hydroplastic deformation unit), (3) 下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット (brittle deformation unit), から構成されるとされる。また、これらの垂直的な変形ユニットの配列が重複した変形ゾーンの識別に役立ち、ユニット (1) の上位にユニット (3) あるいは (2) が認められれば、より新しい地震イベントが推定できるとされる。

今回の調査地点で確認された変形構造は、16層～8層上部までがユニット (2) の含水塑性変形ユニット、8層最上部がユニット (1) の液層の流動変形ユニットに相当することから、1回の地震イベントにより形成されたものと判断される。地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まるとされる (Matsuda, 2000)。今回の変形ゾーンの上端は、8層最上部である。16層において9世紀の集石遺構が検出されること、7層から室町時代の遺物が出土することから、9世紀から室町時代までの間の時期に発生した地震に由来することになる。

京都近辺は、古くから大規模な地震の記録が多数存在する地域であり、宇佐見 (1996) や尾池 (1996) による記録地震の集成をみると、9世紀から室町時代までの期間では、976年7月22日 (貞観元年6月18日) の地震、1185年8月13日 (文治元年7月9日) の地震記録がある。特に後者の地震は、推定震度7.4の地震で京都の震害が大きく、建物の倒壊などが記録されている。今回の調査区南西約300mに位置する平安京右京六条一坊三町跡では、平安時代後半から鎌倉時代の西坊条小路東側溝において、今回と同様な地震痕跡が確認されている (パブリック・サーヴェイ, 2008)。これらのこと、今回の調査地点の地震発生層準である8層直上の7層において、室町時代の遺物が出土することを踏まえると、今回の地震痕跡は1185年の地震に相当するものと推定される。また、地震発生時の調査地点は水に覆われていたことになり、8層7層の

人為的な客土は、このような堆積域に対して行われていることが窺える。なお、11層中の炭化物の放射性炭素年代測定結果では、暦年で3世紀中頃～4世紀初頭を示す年代値が得られているが、下記する花粉化石群集の特徴を踏まえると、炭化物は地震動に伴い、下位堆積物より引きずり上げられたものに由来する可能性が高い。

(2) 調査地点および周辺の古環境変遷

9世紀以降、室町時代までに形成された11層・9層・7層の花粉化石群集は、草本花粉が卓越すること、木本花粉において、針葉樹のマツ属（複雑管束亜属を含む）とスギ属が多産することが特徴である。本調査区近辺に位置する平安京右京六条一坊三町跡・平安京右京六条一坊十四町跡でも花粉分析結果（バリノ・サーヴェイ, 2008・2009）のうち、広域の植生を反映する可能性が高い木本花粉の産状をみると、古墳時代～9世紀頃層準ではスギ属とアカガシ亜属が多産、平安時代後半～鎌倉時代層準ではマツ属とスギ属が多産、さらに15世紀層準ではマツ属とツガ属が多産することが確認されている。これらの結果を踏まえると、今回の花粉化石群集は、平安時代後半～鎌倉時代の群集に生層序対比され、11層以上の堆積物は平安時代後半に形成されていることが推定される。

木本花粉において、多産するスギ属は谷治いや湧水地等の適湿地に林分を形成する種類である。マツ属複雑管束亜属にはクロマツ・アカマツが含まれ、これらは乾燥地や湿地まで分布範囲は広く、二次林の代表的な構成要素となっている。この他、随伴した種類では、コナラ属アカガシ亜属がヤマモモ属、シイノキ属等と共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科等の温帯針葉樹は扇状地面、谷頭、斜面地など土壤流失が起きやすい等、土地条件の悪い場所を更新適地とする種類である。また、クマシデ属・アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属・ケヤキ属等の落葉広葉樹は、河畔林の構成要素でもある。これらの種類構成から、当時の周囲植生は、マツ属などの二次林であり、山地の安定した場所にアカガシ亜属などの常緑広葉樹が林分を形成し、河川沿いにはスギ属や落葉広葉樹などが分布していたことが推定される。

平安京域における古植生に関する報告は、上記した近隣の調査区のほか、平安京右京五条二坊九町・十六町では平安時代～中世の花粉分析（バリノ・サーヴェイ, 1991）、平安京右京三条一坊・六・七町跡の平安時代の園池埋土の植物化石分析（環境考古学研究会, 2002）、平安京右京三条一坊二町跡の12世紀の朱雀大路西側溝埋土の花粉・種実化分析（環境考古学研究会, 2004）、史跡二条離宮の9世紀～13世紀まで続く庭園の池埋土の花粉分析（環境考古学研究会, 2001）、平安京左京二条二坊十町（高陽院）跡の11世紀の池埋土の花粉・植物珪酸体分析（古環境研究所, 2001）、大覚寺大沢池の12世紀～14世紀の池堆積物の花粉分析（未公表）、平安京右京六条一坊三町跡の12世紀末埋土の花粉分析（バリノ・サーヴェイ, 2006）などが存在する。これらの分析結果をみると、今回の調査結果と概ね類似する傾向が確認されるが、針葉樹と広葉樹の量比、マツ属花粉の産出率やその増加パターンなどが、地点によって多少異なる傾向も確認される。これは、微地形、河川や後背山地との距離、調査地点の土地条件とそこでの人間による土地

利用状況などの地域性を反映している可能性が高く、今後、時・空間的な検討を行うことで、平安京域における詳細な植生復元が可能になるものと思われる。

一方、調査区近辺に生育していたとみられる草本花粉や植物珪酸体の産状をみると、栽培植物のイネ属が花粉化石、植物珪酸体双方で検出される。その他、キュウリ属とベニバナ属の花粉が検出されている。これらの栽培植物が栽培・利用されていたと考えられ、特に7層のイネ属については、層相から、調査区での耕作に伴うものと推定される。

その他の草本類をみると、花粉化石では栽培植物のイネ属以外のイネ科が多産する。イネ科には陸域から水域に生育する多く種類が含まれ、その中には人里など開けた草地に生育する種類も含まれる。このほか、オモダカ属、ミズアオイ属など湿潤な環境下に生育する種類、7層では陸域の路上や路傍に生育するオオバコ属花粉も作出する。一方、植物珪酸体ではネザサ節、ススキ属などの乾燥した場所に生育する種類のほか、湿潤な場所に生育するヨシ属などが産出する。このような草本類の産状、および堆積層の層相から、調査地点は湿潤な環境下に置かれており、その周辺には人里植物が生育する草地が存在したことが推定される。

引用文献

- 環境考古学研究会,2001,自然科学分析,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 史跡旧二条離宮(二条城),財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,55-58.
- 環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,33-47.
- 環境考古学研究会,2004,溝 64 の土壌分析について,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.
- 環境考古学研究会,2004,溝 64 の土壌分析について,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.
- 金原正明・金原正子,1994,堆積物中の情報の可視化,可視化情報,14,9-14.
- 近藤 鏡三,1988,十二遺跡土壌の植物珪酸体分析,跡師屋遺跡群十二遺跡一長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書一,御代田町教育委員会,377-383.
- 近藤 鏡三,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.
- 古環境研究所,2005,自然科学分析,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8,平安京左京六条三条坊五町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,152-165.
- 古環境研究所,2005,自然科学分析,京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2005-7 平安京左京二条二坊十町(高陽院)跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,34-47.
- Matsuda,J.-I.2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,Sedimentary Geology,135,99-116.
- 松田順一郎,1999,瓜生堂遺跡第 45-2 時発掘調査でみられた古地震痕跡,都市計画道路大阪環状山線建設に伴う瓜生堂遺跡第 45 時発掘調査概要報告,財団法人東大阪市文化財協会,233-242.

- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷 淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一,1990,淡水生デルタの形成過程—琵琶湖愛知川河口部を例として—2.地質構成と堆積相,地質学雑誌,96,839-858.
- 森 也寸志・滋賀拱子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔,1992,土地利用による土壌間隙構造の差異—軟X線による観察を中心として—,土壌の物理性, No. 66,19-27.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 成岡 市,1993,土壌租間隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線,日本土壌肥料科学雑誌,64,190-97.
- 佐藤幸一,1990a,八郎潟干拓地重粘土水田土の租間隙の発達とその意義,農業土木学会誌,60,25-30.
- 佐藤幸一,1990b,八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の租間隙の発達とその意義,農業土木学会,60,287-292.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2003,自然科学分析の成果,向日市埋蔵文化財調査報告書第61集,長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡,財団法人 向日市埋蔵文化財センター,270-283.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2008,自然科学分析,平安京右京六条一坊三町跡, (財)京都市埋蔵文化財研究所,39-62.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2008,自然科学分析,平安京右京六条一坊三町跡, (財)京都市埋蔵文化財研究所,39-62.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2009,自然科学分析,平安京右京六条一坊四町跡, (財)京都市埋蔵文化財研究所,41-60.
- 杉山 真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 辻本 裕也・辻 康男,2008,生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷,日本花粉学会第49回大会講演要旨集,83p.
- 宇佐見龍夫,1996,新編日本被害地震総覧[増補改訂版],東京大学出版会,493p.
- 尾池和夫,1996,京都と周辺地域の地震活動の特性 京都と周辺地域の有感地震データベース(説),京都市防災会議,166p.

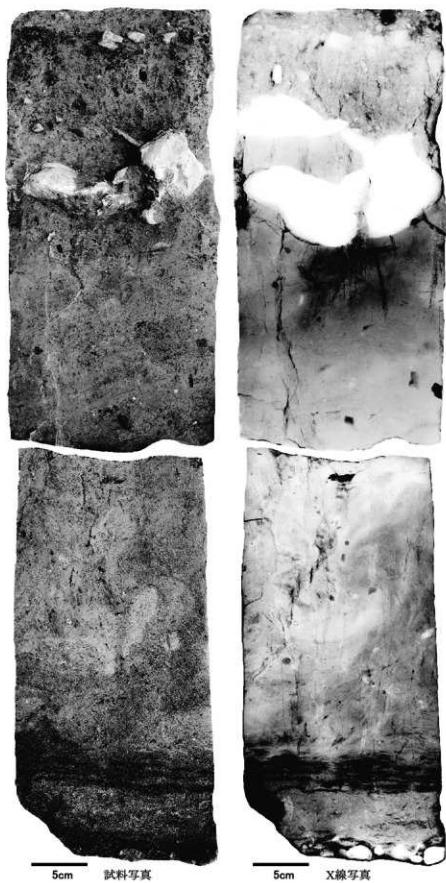
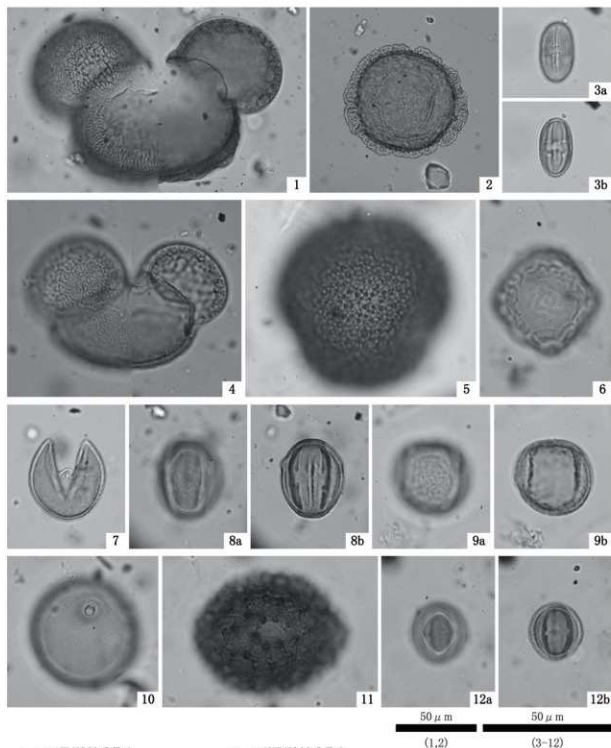
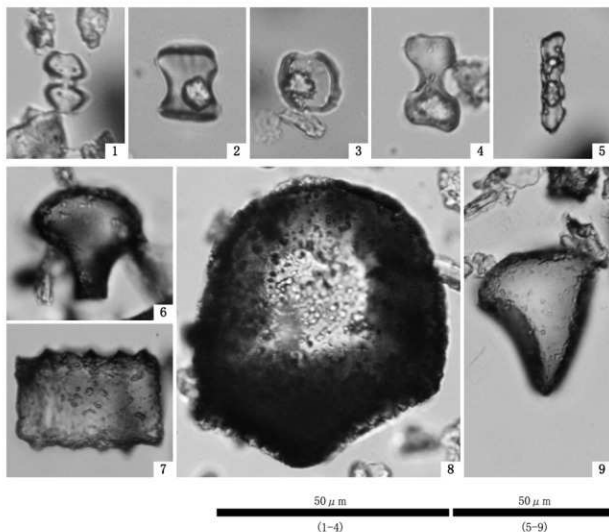


图 15 試料および X線写真



- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. モミ属(試料番号2) | 2. ツガ属(試料番号2) |
| 3. シイノキ属(試料番号3) | 4. マツ属(試料番号2) |
| 5. フウロソウ属(試料番号3) | 6. ニレ属—ケヤキ属(試料番号2) |
| 7. スギ属(試料番号2) | 8. アカガシ亜属(試料番号2) |
| 9. コナラ亜属(試料番号2) | 10. イネ科(試料番号3) |
| 11. ベニバナ属(試料番号3) | 12. ヨモギ属(試料番号2) |

図 16 花粉化石



- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号2) | 2. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号4) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号2) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号3) |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号4) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号2) |
| 7. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号4) | 8. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号2) |
| 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号4) | |

図 17 植物珪酸体

3 まとめ

当初の目的であった土地利用の変遷と古環境の復元については、分析により一定の見解が示された。ここでは、調査成果と自然化学分析の結果に一部相違点が認められたことから、その理由を考察してまとめとしたい。調査では、3基の泉から出土する遺物に時期差がないことから、水位が上がリ放棄されたものと考え、層10・11を落ち込み7埋土、層8・9を前期の整地層と判断したが、分析からは、11層以上の層位は平安時代後期に形成されたものと想定がなされた。落ち込み7から出土する遺物は前期に属するものであり、後期に形成されたものとは考えがたい。しかし、相8・9上面で遺構検出を行ったが、何ら遺構は確認出来なかった。一方で、層8以下の堆積層についても、地震による変動のため、初相堆積状況の把握が困難である。従って、明確な相違の理由を導き出すことは難しいが、調査の見解と自然化学分析の結果の相違がある場合には、十分に理由を考察することが必要であるといえよう。(西森 正見)

Ⅲ-1 相国寺旧境内 No.60



図18 調査位置図(1:5,000)

約20㎡調査した。調査の結果、鎌倉時代後半から室町時代前半の遺構群を検出したため設計変更をおこなったうえ遺構を地中保存することとなった。

2 層序と検出遺構

基本層序は、現代盛土、暗灰黄色砂泥(近世整地層)、黒色砂泥(地山)である。

1 Tr.では、現代盛土直下(GL-0.3m)で近世の遺構群を検出した。近世の整地層はみられない。遺構検出は地山上面(GL-0.8m)でおこなった。1 Tr.の東半では、近世以降に大きく掘られており、中世以前の遺構は残存していない。柱穴1基、土坑6基、ピット4基を検出した。土坑2や土坑6の埋土は焼土や炭を含み、出土遺物から近世の土坑とみられる。これら近世の土坑群は重複していることから2～3時期に細分できるものと考えられる。

中世以前に遡るとみられる遺構は、柱穴1、土坑3～5・9、ピット7・8である。

柱穴1は、直径40cmで円形の柱穴である。直径約20～30cmの礎石をもつ。埋土から土師器皿の小片が出土しているが、時期は特定できない。調査区内では、この柱穴と一連の遺構がみ

1 はじめに

調査地は、上京区上柳原町117-2、111-1、115-1、同区相国寺門前町700-6、700-7で、室町小学校の北方に位置する。この場所は、相国寺旧境内の北西寄りに該当し、室町時代以降は相国寺の子院「梅岑軒」が位置したとみられる。

周辺の調査では、南東方の烏丸中学校内で平安時代～鎌倉時代の東西溝を3条、室町時代～鎌倉時代の溝や土坑などを検出している¹⁾。したがって、本調査地でも、相国寺関連の遺構とともに、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出することが想定された。

この場所において、共同住宅の新築が計画されたため平成22年5月27日に試掘調査をおこなった。

調査区は敷地と計画建物にあわせ、東西方向に1 Tr.を約9㎡、南北方向に2 Tr.を

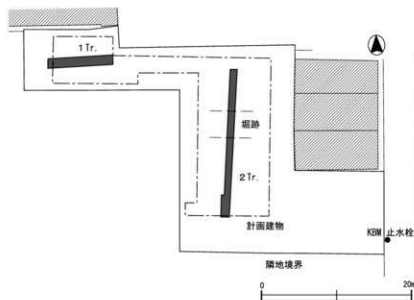
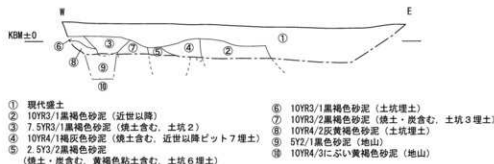


図19 調査区配置図 (1:500)



- | | |
|---|--------------------------------|
| ① 現代盛土 | ⑥ 10YR3/1黒褐色砂泥 (土坑埋土) |
| ② 10YR3/1黒褐色砂泥 (近世以降) | ⑦ 10YR3/2黒褐色砂泥 (焼土・炭含む, 土坑3埋土) |
| ③ 7.5YR3/1黒褐色砂泥 (焼土含む, 土坑2) | ⑧ 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑埋土) |
| ④ 10YR4/1褐灰色砂泥 (焼土含む, 近世以降ピット7埋土) | ⑨ 5Y2/1黒色砂泥 (地山) |
| ⑤ 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (焼土・炭含む, 黄褐色粘土含む, 土坑6埋土) | ⑩ 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (地山) |

図20 1Tr.北壁断面図・平面図 (1:100)

られないため、西に展開する建物跡であると考えられる。

土坑3・4・5は近世の土坑に切られる直径20～50cmの土坑である。土坑内から遺物が出土していないため時期は不明である。土坑9は近世以降の土坑に切られる直径50cmの不整形の土坑である。土師器皿が出土し、14世紀前半頃の土坑とみられる。ピット7・8も近世の遺構に切られているが、顕著な遺物が出土していないため、時期は不明である。

2Tr.では、現代盛土の下で近世の整地層が残存していた。近世の土坑も検出しており、遺構の広がり確認できる。近世の整地層直下 (GL-0.5 m) で黒褐色砂泥の地山を検出した。遺構検出は地山上面でおこなった。検出した遺構は、東西堀1条、東西溝3条、土坑2基、ピット4基などである。

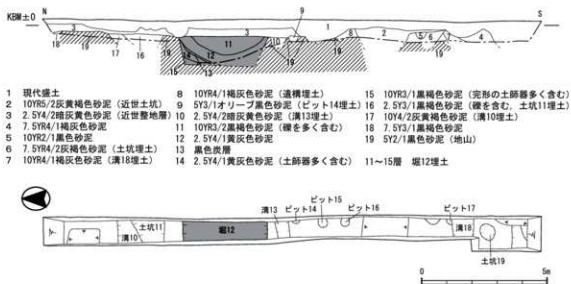


図21 2Tr.東壁断面図・平面図(1:150)



写真5 2Tr.東西堀(北西から)

堀12は幅3.3m、深さ1m程の東西堀である。断面形は逆台形を呈する。埋土は大きく分けて3層に分かれる。上層(11・12層)は礫を多く含む黒褐色砂泥層と礫を含まない黄灰色砂泥層である。遺物は含まない。中層(13層)は黒色炭層で、北肩に堆積しているが、南肩にはみられない。遺物は含まない。下層(14・15層)は黄灰色砂泥層と黒褐色砂泥層に分かれる。14・15層とも土師器皿が多く出土した。特に15層からは完形に近い土師器が出土し、鎌倉時代末から室町時代初頭頃に埋まったものとみられる。

このほかの遺構は、埋土を掘削していないため、遺物の出土が少なく、時期が特定できない。しかし、近世の整地層にバックされていることから中世の

遺構が良好に残っているものと考えられる。

3 出土遺物

1 Tr.の土坑9と2 Tr.の堀12から土師器と瓦器が出土した。

1は1 Tr.の土坑9から出土した土師器皿Nである。体部は外反し、口縁部は三角形を呈する。14世紀前半頃とみられる²³⁾。2～8は2 Tr.堀12の14層から出土した。2は土師器皿Acである。口径4.4cmの小型のものである。3・4は皿N大である。口径11.0～12.0cmで、口縁部は丸みがある。5～7は皿Sである。8は瓦質土器の鍋で、口縁部のみ残存していた。13世紀

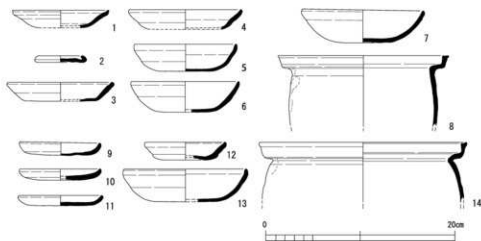


図22 遺物発掘図 (1:4)

中頃から14世紀前半頃とみられる。9～14は2Tr.15層から出土した。9～12は皿N小である。口径8cm代で、体部・口縁部は丸みがある。13は皿Sで、口径12.8cmの大型のものである。器高が高く底部から体部の立ち上がりに丸みがある。14は瓦質土器の鍋である。13世紀中頃とみられる。

4 まとめ

本調査地は、相国寺旧境内の北東部にあたり、江戸時代の絵図から相国寺の子院である梅岑軒が所在したことがわかる。今回の調査で検出した近世の遺構はこういった子院にともなうものの可能性がある。

一方、近世の遺構の下層から、鎌倉時代後半から室町時代前半の遺構を検出した。特に2Tr.で検出した東西堀12は幅3.3mと規模が大きい。平成5年度に発掘調査された烏丸中学校内では平安時代末から鎌倉時代前期の東西溝を3条検出している。この東西溝は、断面が逆台形を呈しており、今回検出した東西堀と類似している。東西堀12は出土遺物から13世紀中頃～14世紀前半頃に埋まったものとみられる。相国寺は永徳二年(1382)、足利義満が花の御所の東に創建した寺院であることから今回検出した中世以前の遺構群は、相国寺造営前のものであり、周辺の土地利用状況を知る貴重な調査成果といえよう。(家原 圭太)

註

- 1) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 平成5年度』1996年。
- 2) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』(有)京都編集工房, 2005年。

Ⅲ-2 白河南殿跡 No.15・67

1 はじめに

調査地は、左京区聖護院蓮華蔵町地内であり、琵琶湖疏水夷川ダム南側にあたる。ここに共同住宅の建設が計画され、周知の埋蔵文化財包蔵地である白河南殿跡に該当することから、試掘調査を実施することとなった。

白河南殿は、『中右記』嘉保2年(1095)5月10日の条にある白河上皇の御所について、「(法勝寺)前大僧正覚円の坊を御所と為す」とあるのが初見である。尊勝寺造営に伴う度重なる行幸で使用された際には、泉殿、又は白河泉殿と呼ばれている¹⁾。元永元年(1118)、北側に新たな御所(北新御所(白河北殿))が造営されたことにより、南本御所(南殿)と称されるに至った²⁾。

御所内には、九輪阿弥陀堂2棟、三重塔3基が次々と造営され、御所と御堂が並び立つ景観を呈するようになった。御堂については「蓮華

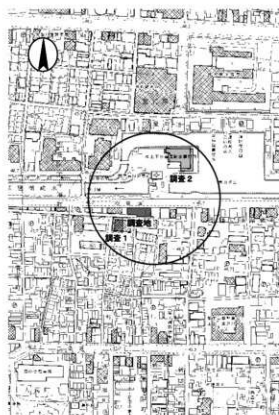


図23 調査位置図 (1:5,000)

冷泉通

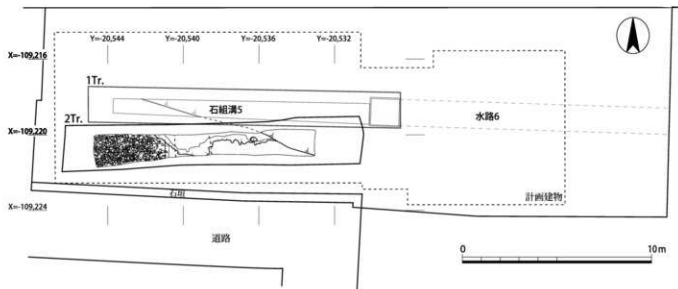


図24 調査区配置図 (1:200)

蔵院」と称され、現在でも地名にその名を留めている。

これまで、白河南殿の遺構が確認された調査は2例ある(図23・27)。調査地南西に位置する調査1³⁾では、東西に並列した建物2棟を確認している。西側の建物(SB2)では、掘り込み地業が施された基壇を有し、河原石で護岸した雨落溝が巡る。周囲では瓦が多く出土しており、瓦葺き建物であったとされる。東側の建物(SB1)は、亀腹状の基壇を呈し、雨落溝は存在しない。瓦の出土も少ないことから、性格の違う建物が非常に近接した場所に建てられていた状況が復元できよう。

調査2⁴⁾では、北端と南端で礎石建ち建物が存在し、両者を繋ぐ礎石列跡が確認されている。蓮華蔵院に築かれた九輪阿彌陀堂と玄関を繋ぐ廊下と推定されているが、瓦の出土量は少ないため、御所内の殿舎の可能性も指摘されている。

調査地の現況は、南側道路との段差が約1.5mあるが、これは排水建設に伴い掘削土を盛土した結果である。そのため、遺構の残存状況は良好であると期待された。

調査は、地中保存が前提の計画のため、遺構面のレベルの把握と調査1で確認された建物の広がりを中心にすることを目的とした。調査は1月12日に行い、調査面積は30㎡である。

調査の結果、平安時代後期の瓦や埴土を大量に含む大土坑を確認したが、予想に反して近代に大幅な改変を受けており、遺構面の残りが悪いことがわかった。その後、原因者側から、石組溝等の地中障害物が多いため、地盤改良の必要が生じ、遺構面まで掘り下げるとの連絡が入った。瓦を大量に含む土坑の存在から、付近に瓦葺きの建物がある可能性高いことから、原因者と協議の結果、試掘調査の延長を実施し、遺構面の広がりを確認することとなった。

調査の延長は、6月1～3日に実施、面積は39㎡であり、合計69㎡である。なお、1回目の調査区を1Tr.、2回目を2Tr.とする。

2 層序と遺構

確認した遺構は、1Tr.で、中世の火災処理土坑、近代石組溝、水路、2Tr.で、平安時代後期の基壇建物、溝、小ピット1基、中世の火災処理土坑と近代石組溝である。基壇建物には、地業、整地層、溝が伴う。

層序(図25) 現況は、調査地の南側と比べて約1.5m高いが、これは琵琶湖疏水建設の際に掘削で生じた排土を盛り上げたためである。層序は、GL-1.6mまで盛土、以下、30cmの近世耕作土、25～35cmの洪水堆積層、GL-2.2mで中世包含層、-2.35mにて基壇建物地業(標高43.25m)、-2.8m(42.7m)で灰色砂礫の基盤層である。

平安時代から室町時代

建物1(図25、巻頭カラー写真1・写真6・7) 2Tr.西半で確認した基壇建物である。東西3.5m以上、南北1.4m以上で、高さは約0.4m残存していた。南側、西側にはさらに広がっている。1Tr.では土坑3に削平され、最下層のみ確認できた。基壇は、基盤層を一段掘り下げた後、厚さ15cmの砂泥層と直径3～20cmの礫層を互層に積み重ねた地業が施されている。地業の端

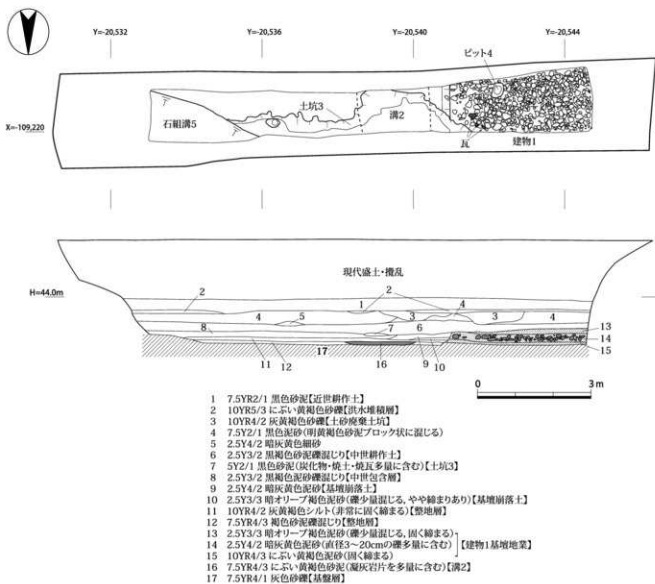


図 25 2Tr. 平面・南壁断面図 (1:100)



写真6 建物1 (北東から)



写真7 建物1 断面 (北西から)

には、径の揃った石が等間隔で並べられており、地業の東端に当たると想定できる。基壇外側には、厚さ10cmの整地層を2層確認した。地業を形成する埋土からは、平安時代後期の瓦片が数点出土している。

溝2 建物1に並行して、下層の整地層上面で成立する溝である。長さ1.2m以上、幅1.5m、深さ0.1mである。埋土には、凝灰岩片が多量に含まれる。基壇外装抜き取り溝、もしくは雨落溝の可能性が考えられる。基壇外縁としては、地業端からの距離と、切石でないこと、掘形等認められないことから可能性は低い。地業端からの距離、凝灰岩がブロック片であることから、雨落溝である可能性が高い。



写真8 水路6内部（東から）

土坑3 1Tr・2Trで確認した土坑である。規模は、東西8.5m以上、南北3m以上、深さ0.3m以上ある。埋土には、大量の焼土、炭化物が含まれ、平安時代後期の瓦、12世紀中頃の土師器皿が出土している。1Trで検出した際には、焼け落ちた建物に葺かれていた瓦が集中する場所と想定したが、2Trでは、基壇の一部を破壊しており、断面観察からは、基壇が崩落した後に掘り込まれていることが確認できた。従って、土坑の成立時期としては、南殿廃絶後、耕作地にするため、障害物を処理する目的で形成されたものと考えられ、中世に属するものであろう。

ピット4 基壇地業を切って形成されるピットで、直径30～40cm、深さ15cmである。埋土は、炭化物を含む黒褐色泥砂であり、13世紀前半の土師器皿が出土している。

近代

石組溝5 1Tr中央、2Tr東半で確認した石組溝である。疏水建設の際の盛土を掘り込んで構築されている。長さ10m以上、深さは0.75mである。兩岸は石で護岸され、レールを蓋として利用している。中は空洞であるが、底には水が流れていた痕跡が認められる。流れの向きから疏水に流れ込んでいたものと思われる。

水路6（写真8） 1Tr東端で確認した溝である。盛土を掘り込んで構築されている。レンガと花崗岩の切石積みで護岸され、花崗岩とコンクリートで蓋をしている。中は空洞であるが、底にはセタジミの貝殻が張り付いていた。東はさらに敷地外に伸びており、西端は、一辺1.6m×1.6m、深さ1.2mのレンガ積みの枡に接続される。

3 遺物

遺物は、建物1、土坑3、ピット4から瓦、土師器皿、須恵器、凝灰岩片などが出土しているが、土坑3からの出土が大半を占める。

なお、出土土器の編年については、平安京の土器編年に準拠する³⁾。

1～6は土師器皿で、1～4は皿Nである。口縁部には2段ナデを施し、断面は三角形形状を

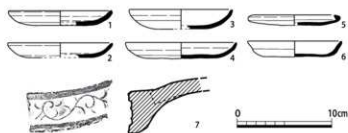


図 26 出土遺物実測図 (1:4)

呈する。口径はいずれも 11 cm 台である。5 はコースター形の皿 Ac であり、口径 8.4 cm を測る。1～5 は、京都 V 期後の一群であり、12 世紀後半に比定できる。土坑 3 から出土した。6 は、ピット 4 から出土した皿 N である。口縁は一

段ナデで、口径は 10.0 cm である。VI 期中に属する。13 世紀前半。7 は、土坑 3 出土の唐草文軒平瓦。唐草文は中央から両側に 2 転するもので、主葉は連続して緩やかに反転し、枝葉は巻き込む。平瓦凸面広端部に粘土を接合する。平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ、瓦当裏面指オサエと横ナデ、顎部下端は横ケズリを施す。山城産。

4 まとめ

今回の調査では、平安時代後期の基壇建物 1 棟、基壇に伴う地業、整地層、溝を確認することができ、白河南殿の建物復元について、重要な定点を得ることができた。また、近代の水路については、琵琶湖疏水に関連した遺構と想定でき、京都の近代化遺産として注目できよう。

ここでは、周辺の調査成果を踏まえてまとめたい。

(1) 基壇建物について

建物 1 の基壇を構成する地業は、礫層と砂泥層を互層に積み上げる方法で、烏羽殿や六勝寺関連の建物基壇に見られる技法の一つであり、白河南殿を形成する建物であることは間違いない。創建時期としては、地業内から遺物がほとんど出土していないため不明であるが、建物 1 の地業を切るピット 4 から 13 世紀前半に属する土師器皿が出土していることから、廃絶時期は想定できる。白河南殿は、承久 3 年 (1221)、寛喜元年 (1229) に塔が焼亡しており、この火災に関連したものである可能性が考えられよう。

建物 1 東端に並行する溝 2 については、雨落溝である可能性が高く、埋土に凝灰岩片を多く含むことから、格式の高い建物の一つであるといえよう。南殿には、九躰阿弥陀堂 2 棟、三重塔 3 基以外にも、御所の建物が数多く建てられていたことが文献から読み取れ、建物の比定を行うことは現段階では困難である。今後、周辺の調査に注意を払い、建物の比定や、配置を明らかにしていく必要があろう。

(2) 調査 1 の建物との関係について

調査 1 (図 27) では、建物跡を 2 棟 (SB 1・SB 2) 確認している。この内、建物 1 と同一建物の可能性があるのが、建物西端を確認した SB 1 である。ここでは、基壇を構成する地業の比較を行い、両者の関係性を考えてみたい。

SB 1 は、基壇の縁辺部に河原石 2 列 (一部は凝灰岩を使用) を並べて外装としている。2 列の石の間には、小礫が敷き詰められている。河原石列上には、花崗岩の礎石が 3 石認められた。

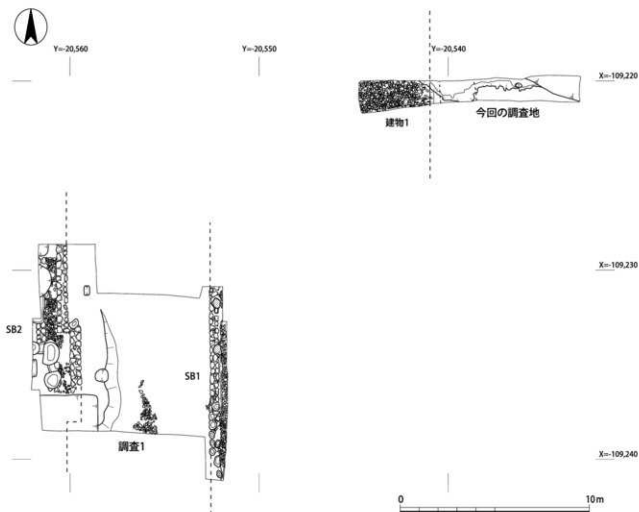


図 27 建物配置図 (1:200)

外装の内側には、地業が施され、河原石列よりも約15cm高くなっており、亀腹状を呈する。斜面には平瓦が貼り付けられ、瓦の外側に灰白色粘土が確認されている。調査担当者は、泥土は化粧土の役割を果たし、亀腹状基壇の先駆けになる建物としている。掘り込み地業は確認されていない。

建物1では、基壇の縁辺部に径の揃った石を等間隔に並べ、付近には数点の瓦も認められたが、貼り付けた痕跡もなく、化粧土とされる灰白色粘土も確認していない。雨落溝とした溝2が外装の抜き取り溝という可能性も捨てきれないが、凝灰岩片が多量に混じり、河原石が据えられていた痕跡はない。基壇は、基盤層を僅かに掘り下げて地業を施している。

以上のことから、SB1と建物1については、基壇の外装、縁辺部、雨落溝の有無等で異なる点が多い。調査面積の制約はあるが、同一建物とは考えにくい。SB1が礎石の間隔から建物の北西隅と想定されていることも参考になろう。いずれにせよ、非常に近接した場所に建物が存在したことは間違いなく、南殿内でも重要な場所を占めていたことを改めて裏付ける結果となった。

(3) 近代の水路について

水路6については、明治23年(1890)完成の琵琶湖疏水建設後に構築されている。底にはセタシジミの貝殻が張り付いており、琵琶湖疏水から水を引き込んでいたことを示している。

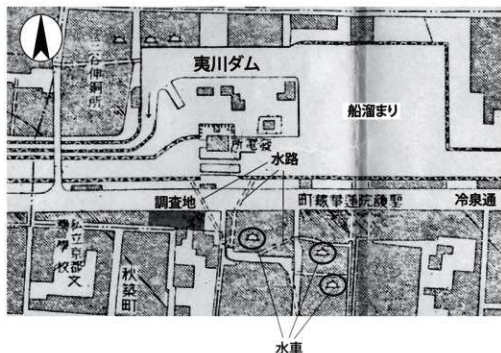


図 28 大正 11 年測図都市計画図

図 28 は大正 11 年測図の都市計画図の調査地周辺を抜粋したものであるが、夷川ダム南側一帯には工場群が建ち並んでいる。工場群の中には、疏水から引き込んだ何本もの水路と水車を表す記号が認められ、夷川ダムの船溜まりと落とし口との落差を利用した水車を動力として利用していたことが見て取れる。また、疏水記念館の常設展の中には酒造業者が水車を利用した精米を行うための水路建設申請書と添付された図面が展示⁶⁾されており、まさに今回の調査地を通る水路が示されている。従って、水路 6 は展示資料に示された水路である可能性が非常に高い。

当時の水車動力の一端を示す遺構を確認したことは、疏水建設の目的の一つとして掲げられていた地域産業の活性化を伺うことができる京都の貴重な近代化遺産といえよう。

最後に、測量ならびに写真撮影では(財)京都市埋蔵文化財研究所からの援助を受けた。また、琵琶湖疏水に関して、疏水記念館の白木正俊氏に資料の閲覧や貴重な資料の提供をして頂いた。記して感謝の意を表したい。(西森 正晃)

註

- 1) 『中右記』康和四年閏五月二日条「令留御泉殿御所」
- 2) 『中右記』元永元年七月十日条「件御所(白河北殿)本御所之北辺新被作小口」
- 3) 堀内明博「白河南殿 C 調査区」『六勝寺跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年
- 4) 梅川光隆・本弥八郎「白河南殿跡」『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
- 5) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』(有)京都編集工房 2005 年
- 6) 『琵琶湖疏水記念館 常設展示図録』京都上下水道局 2009 年

III-3 尊勝寺跡・岡崎遺跡 No.69

1 はじめに

調査地は、左京区岡崎西天王町70,70-2で、京都会館の北西方、冷泉通りの南に位置する。この場所は尊勝寺跡の西半に、岡崎遺跡の北西部に位置する。

このような場所で共同住宅の建設が計画されたため試掘調査をおこなった。

周辺の調査では、西隣で平成元年に発掘調査をおこなっており、尊勝寺阿弥陀堂の柱穴・雨落溝・掘込地業などを検出している¹⁾。また、昭和51年から昭和56年まで数次にわたり尊勝寺阿弥陀堂周辺を調査しており、阿弥陀堂の柱穴や掘込地業を検出している²⁾。このような周辺の調査成果から、阿弥陀堂の北半に関しては、その規模などが復元できる(図32)。今回の調査地は、阿弥陀堂の東側で、雨落溝よりも外側になる。西隣や南方の調査では雨落溝の外側にも、阿弥陀堂の掘込地業が及ぶものとみられており、今回の調査地でも掘込地業の痕跡が見つかることが想定された。

調査は平成22年9月13日と11月1日におこなった。調査区は、計画建物にあわせ南北方向に2箇所(1Tr.・2Tr.)、阿弥陀堂の掘込地業確認のため東西方向に1箇所(3Tr.)を設定した。調査面積は34㎡である。

2 層序と検出遺構

1Tr.の基本層序は、現代盛土、黄褐色泥砂、黒褐色砂泥、灰白色砂(地山)である。遺構検出は地山上面(GL-0.7~1.2m)でおこな

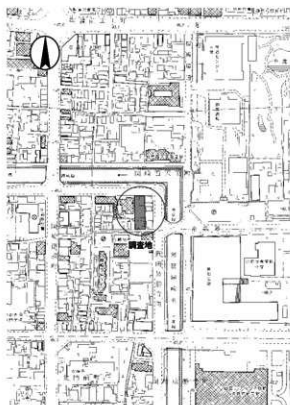


図29 調査位置図(1:5,000)



写真9 3Tr.全景(東から)

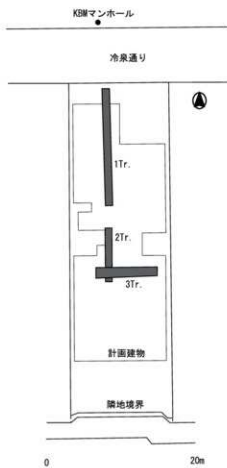


図30 調査区配置図 (1:500)

から出土した。13は土師器皿である。14は皿Acで、口径8.4cmの小型のものである。15は皿Aで、口径約9.5cmである。16は皿(坏)Nで、2段ナデを施す。これらの土器は11世紀末から12世紀初頭のものであり、尊勝寺造立時期のもと考えられる。

17・18は2Tr.の瓦溜SK1から出土した。17は山城産の偏行唐草文軒平瓦である。瓦当上縁を面取りする。18は丸瓦である。凹面は布目があり、凸面はナデ調整する。19は2Tr.掘削中に出土した丸瓦である。粘土組成形をしており、凸・凹面に布目や縄タキはみられない。

4 まとめ

今回の調査地の南方でおこなわれた昭和56年の発掘調査では、阿弥陀堂掘込地業東端の立ち上がりが見つかっている。掘込地業の埋土は下層が黒色砂泥、上層が黒褐色泥土・黄灰色砂・灰色土の版築となっている。今回調査をおこなった3Tr.は、その北延長線上にあるため掘込地業の立ち上がりを検出するものと想定していた。しかし、地業の下層埋土とされている黒色砂泥は水平に堆積していること、上層埋土の版築層がみられないことが明らかになった。したがって、黒色砂泥は地業の埋土ではなく阿弥陀堂造営時の整地層の可能性が考えられる。

これまでは、阿弥陀堂係廂の柱筋から10m以上外側まで掘込地業が広がると考えられていた

った。地山上面では顕著な遺構はみられなかったが、その直上には黒褐色砂泥が堆積する。この黒褐色砂泥は西隣発掘調査でも検出されており、尊勝寺阿弥陀堂造営時の掘込地業の埋土とされている。

2Tr.も1Tr.と同様に黒褐色砂泥を地山直上で検出した。また、北端で瓦溜(SK1)を検出した。平安時代後期の瓦が多量に含まれており、尊勝寺にかかわるものと考えられる。

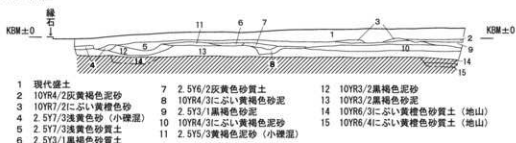
3Tr.の基本層序は1・2Tr.同様、現代盛土、オリープ黒色砂泥、黒色砂泥、地山である。遺構検出は地山上面でおこなった。地山上面では顕著な遺構はみられなかったが、1・2Tr.と同様、地山直上に黒色砂泥が水平に堆積していた。

3 出土遺物

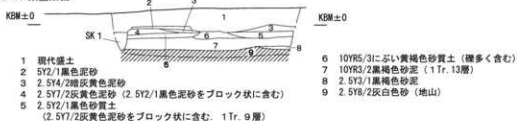
3Tr.の2層から土師器、2Tr.のSK1から瓦が出土した。

1～12は3Tr.2層上面から出土した。1・2は土師器皿Aで、口径10cm程度である。3～12は皿(坏)Nで、2段ナデを施す。13～16は3Tr.2層

1Tr. 東壁断面



2 Tr. 東壁断面



3 Tr. 南壁断面

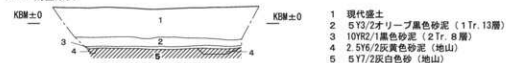


図31 1～3Tr. 断面図 (1:150)

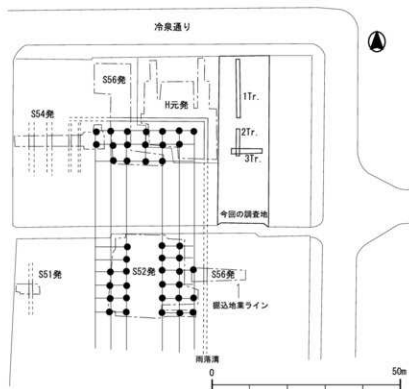


図32 尊勝寺阿彌陀堂配置図 (1:1000)

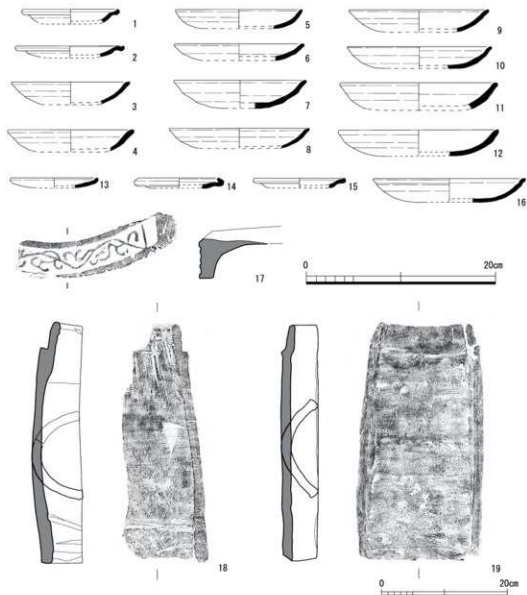


図33 遺物実測図 1～17 (1:4), 18・19 (1:6)

が、掘込地業がこれほど広範囲にされている例は他にない。したがって、黑色砂泥が広がる範囲は掘込地業というよりは阿弥陀堂造営時の整地であったと考えるべきであろう。(家原 圭太)

註

- 1) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 平成元年度』1994年。
- 2) 京都市文化観光局文化財保護課『六勝寺跡発掘調査概報 1978』1979年。京都市埋蔵文化財センター『六勝寺跡発掘調査概報 1980』1981年。京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告 1976-Ⅱ』1977年。財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『六勝寺跡発掘調査概報 1977』1978年。

III-4 法勝寺跡・岡崎遺跡1 No.16

1 はじめに

調査地は左京区岡崎にある京都市動物園内の中央南寄りの場所である。当該地は六勝寺の筆頭寺院である法勝寺跡にあり、その中でも法勝寺の中心部に想定されている八角九重塔付近にあたる。この場所でふれあい広場・新おとぎの国の建設が計画されたため試掘調査をおこなった。

調査は、平成21年12月21・22・24・25日、平成22年2月9・10・17日の7日間おこなった。計画建物と遺構の状況などから合計28Tr.の調査をおこなった。調査面積は126㎡である。試掘調査の結果、遺跡の深さが明らかになったため、掘削可能深を提示し、設計変更により遺跡を地中保存した。

1～4・6～8Tr.では法勝寺八角九重塔の掘込地業跡を検出した。今回の試掘調査によって初めて法勝寺八角九重塔跡の一面が発見されたことを受けて、塔の正確な位置と規模、地下構造の解明のための発掘調査を実施した。したがって、塔の掘込地業部分は『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』で報告するものとし¹⁾、本報告では塔の掘込地業を検出した調査区以外の報告をおこなう。

今回の調査では、中島の部分と池の部分に昭和21年の駐留軍接収時に整地されたとみられる層を検出した。この層は、八角九重塔の基壇を削平し、その土で整地していることから、平安時代の瓦が大量に含まれており、固く締まっている。そのため、この層が昭和の整地層か、平安～鎌倉時代の整地層（中島の積土）かの判断は非常に困難であった。今後、付近の調査をおこなう場合は注意が必要である。

2 各調査区の概要

5Tr. 東西方向に約12m設定した。層序は現代盛土直下で灰白色シルトと黄灰色砂質土の地山を検出した。調査区東端ではGL-0.6m(KBM-0.9m)で灰白色シルトの地山を検出した。この部分は中島にあたると思われるが、中島の積土は見られなかった。調査区東端から約4m以西は



図34 調査位置図(1:5,000)

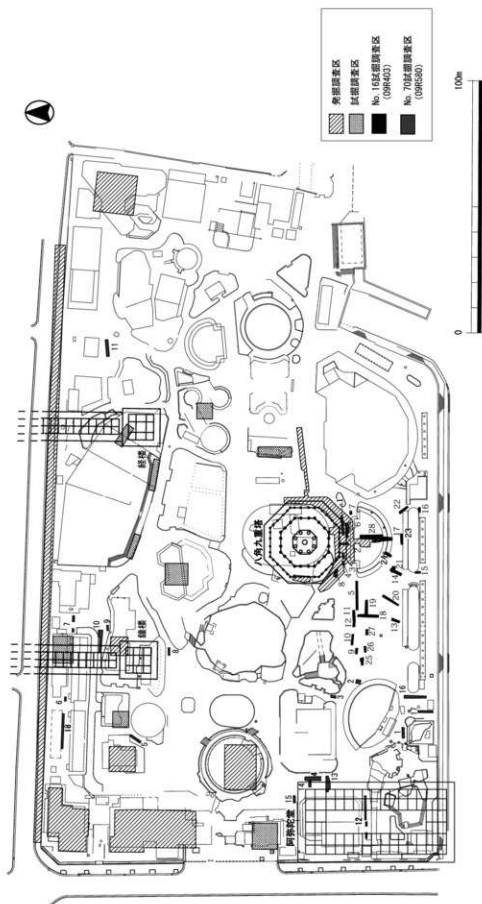


図 35 動物園内調査位置図 (1 : 1,500)

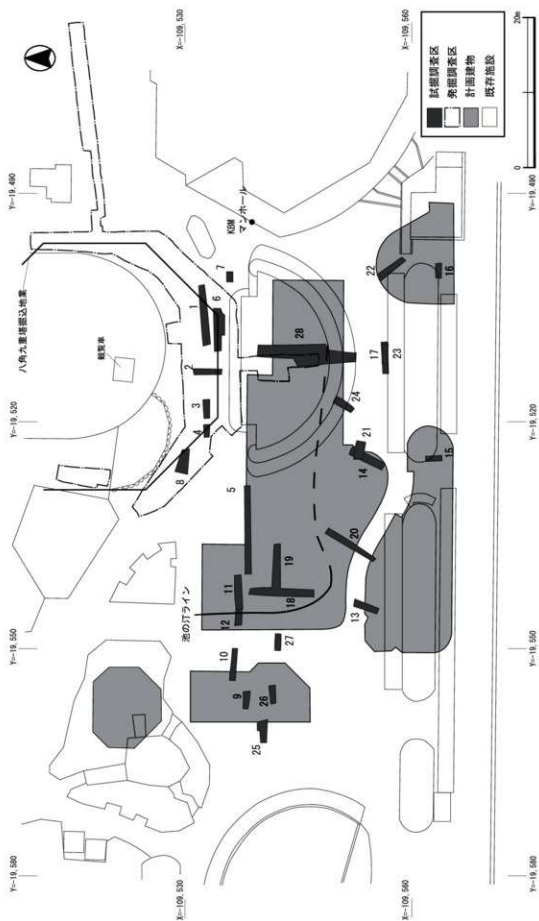
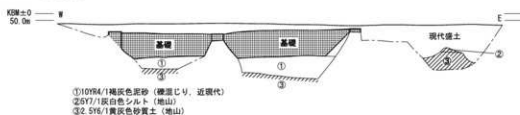


図 36 調査区配置図 (1 : 500)

5Tr. 北壁断面



10Tr. 北壁断面



11Tr. 北壁断面



12Tr. 北壁断面



13Tr. 西壁断面



15Tr. 東壁断面



16Tr. 南壁断面



18Tr. 西壁断面

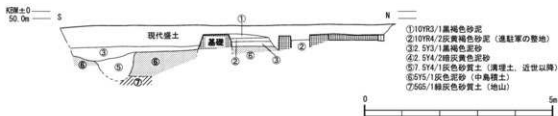


図 37 5・10～13・15・16・18Tr. 断面図 (1:100)

旧猿舎の基礎が残っており、GL-1.2m (KBM-1.5m) まで攪乱されていることがわかった。GL-1.2m 以深では黄灰色砂質土の地山が見られた。西隣で調査した 11Tr. では GL-0.55 m (KBM-0.85m) で中島の積土を検出していることから旧猿舎基礎部分は中島を削平しているものとみられる。

9 Tr. 5 Tr. の西方に設定した調査区であるが、旧猿舎の基礎にあたり、遺構確認のための掘削はできなかった。

10Tr. 旧猿舎の基礎をはずすように 9 Tr. の北東に設定した調査区である。層序は、現代盛土、進駐軍の整地層、オリーブ黒色泥砂（近世以降整地層）である。この近世以降整地層の下層 48.75m (GL-1.1m) で平安時代の池の埋土を検出した。埋土は上下 2 層に分けられ、上層は褐灰色泥砂、下層は暗褐色泥砂である。それぞれ約 15～20cm 堆積しており、地山は GL-1.5m で検出した。池の粘土や汀の化粧はみられなかったが、地山が西に向かって傾斜していることから池の東汀が近いことがわかった。



写真 10 12Tr. 全景（南東から）

11Tr. 10Tr. の東約 5m に設定した調査区である。現代盛土、進駐軍の整地層の下 49.3m (GL-0.55m) で平安時代の中島積土を検出した。10Tr. でみられた池埋土は 11Tr. では検出されず、中島の積土があったことから、10Tr. と 11Tr. の間に池の汀があったと考えられる。

12Tr. 池の汀を確認するため 10Tr. と 11Tr. の間に設定した調査区である。層序は 10・11Tr. と同様現代盛土、進駐軍の整地層の下 49.1m (GL-0.7m) で遺構面となる。12Tr. 中央部で池の汀を検出した。汀部分は、なだらかに西へ傾斜しており、貼石などは見られなかった。ただし、汀から約 1m 東では 5～20cm の石と瓦片がみられ、汀にかかわるものの可能性もある。池の埋土は 10Tr. ④層（池埋土上層）があり、下層の埋土はみられなかった。

13Tr. 現代盛土、進駐軍の整地層、近世以降の整地層の下 48.5m (GL-0.95m) で池の埋土を検出した。池の埋土は 10Tr. の④層（池埋土上層）に該当し、約 25cm 残存していた。下層埋土は存在せず、すぐに地山となる。

14Tr. 13Tr. の約 20m 東方に設定した調査区である。層序は、現代盛土、進駐軍の整地層である。進駐軍の整地層を法勝寺の整地層と誤認したため、下層の掘削をおこなっていない。

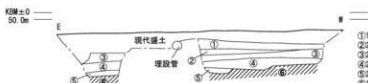
15Tr. 層序は、現代盛土、近世以降の整地層、湿地堆積（池の埋土）、平安時代の整地層である。池の埋土は GL-0.7m で検出したが、埋土直上が近世以降の整地層となっており、池の埋土は数 cm しか残っていなかった。したがって、この池の埋土が法勝寺の時期か、近世のものなのか特定できない。

19Tr. 西壁断面図



- ①10YR3/1黒褐色砂泥 (通駐軍の營地)
- ②10YR4/2灰黄褐色砂泥 (通駐軍の營地)
- ③2. 5Y3/1黒褐色泥砂 (近世以降)
- ④2. 5Y4/2暗灰黄色泥砂 (近世以降)
- ⑤5Y5/1灰色泥砂 (中島積土)

20Tr. 南壁断面図



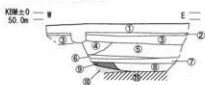
- ①10YR4/2灰黄褐色砂泥 (通駐軍の營地)
- ②2. 5Y5/1灰色泥砂 (近世以降)
- ③2. 5Y6/4にぶい黄褐色砂質土 (地山)
- ④2. 5Y4/1黄褐色泥砂 (近世以降)
- ⑤2. 5Y3/1黒褐色泥砂 (近世以降)
- ⑥10YR6/4にぶい黄褐色砂質土 (地山)

21Tr. 北壁断面図



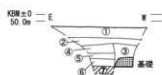
- ①現代盛土
- ②近代-現代盛土 (下半は近代、上半は現代)
- ③2. 5Y3/2黒褐色泥砂 (近代盛土)
- ④5Y5/2灰オリブ色シルト (地山)

22Tr. 北壁断面図



- ①現代盛土
- ②10Y5/9黄褐色泥砂 (通駐軍の營地)
- ③5Y4/1灰色粗砂 (現代盛土)
- ④レンガ土間を伴う基礎の掘方 (大正時代)
- ⑤7. 5Y4/2灰オリブ色粗砂 (礫混、近代盛土)
- ⑥5Y4/2灰オリブ色粗砂
- ⑦2. 5Y5/2黄褐色泥砂 (灰色土がまだらに混じる、近世以降)
- ⑧2. 5Y4/2暗灰黄色粗砂 (近世以降)
- ⑨10G75/1緑灰色砂 (池沼縁の可能性あり)
- ⑩2. 5Y6/2灰黄色泥砂 (黒褐色泥砂の小ブロック混)
- ⑪中島積土
- ⑫2. 5Y6/3にぶい黄褐色粗砂 (地山)

23Tr. 南壁断面図



- ①現代盛土
- ②10YR6/6明黄褐色泥砂 (礫混、通駐軍の營地)
- ③大正時代取寄基礎
- ④7. 5Y5/1灰色粗砂
- ⑤2. 5Y6/3にぶい黄褐色泥 (上面に白色粉砂層あり、洪水層積か)
- ⑥2. 5Y3/1黒褐色泥砂 (近世)
- ⑦2. 5Y8/2灰白色粗砂 (地山)

24Tr. 東壁断面図



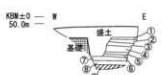
- ①10YR6/6明黄褐色泥砂 (礫混、通駐軍の營地)
- ②2. 5Y3/1オリブ黒色泥砂 (礫混、營地土)
- ③5Y3/2オリブ黒色泥砂 (大正取寄解体後の營地)
- ④2. 5Y4/2暗灰黄色泥砂 (粗砂混じり)
- ⑤2. 5Y3/2黒褐色泥砂 (粗砂混じり、染付食)
- ⑥5Y5/2灰オリブ色シルト (地山)

26Tr. 北壁断面図



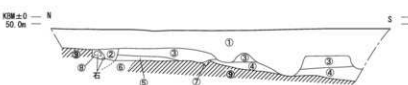
- ①7. 5YR8/2橙褐色砂泥 (礫・平交互多く含む、通駐軍の營地)
- ②10YR3/1オリブ黒色泥砂 (レンガ含む)
- ③5Y4/2灰オリブ色泥砂 (粗砂多く含む、近代以降)
- ④10Y3/1オリブ黒色泥砂 (やや粘性あり、地埋土)
- ⑤2. 56Y3/1暗オリブ灰色砂泥 (やや砂質、地埋土)
- ⑥7. 56Y3/1暗灰黄色泥砂 (やや粘性あり、粗砂を若干含む、池埋土)
- ⑦2. 56Y3/1暗オリブ灰色砂泥 (遺物含む、地埋土)
- ⑧56Y6/1オリブ灰色砂泥 (地山)

27Tr. 北壁断面図



- ①2. 5Y6/4にぶい黄褐色泥砂 (礫混、通駐軍の營地)
- ②2. 5Y3/2黒褐色泥砂
- ③10Y5/3にぶい黄褐色泥砂
- ④10G3/1暗緑灰色泥砂 (粗砂を多く含む)
- ⑤10Y3/1オリブ黒色泥砂
- ⑥5Y4/2灰オリブ色粗砂
- ⑦2. 5Y4/2暗灰黄色泥砂
- ⑧暗緑灰泥 (レンガ多く含む)
- ⑨約1cmの厚さ7. 5Y4/1灰色シルト (やや粘性あり、池の粘土)
- ⑩2. 5Y6/3にぶい黄褐色粗砂 (地山、表層に遺物含む)

28Tr. 東壁断面図



- ①現代盛土
- ②10YR3/1黒褐色砂泥
- ③10Y3/2暗褐色泥砂 (粘土ブロック混)
- ④2. 5Y4/1黄褐色泥砂 (柱瓦含む)
- ⑤2. 5Y3/2黒褐色泥砂
- ⑥10YR4/2灰黄褐色泥砂
- ⑦5Y4/1灰色泥砂 (近世以降か)
- ⑧10YR4/4暗褐色泥砂 (灰混)
- ⑨10YR6/4にぶい黄褐色砂 (地山)



図38 19～24・26～28Tr. 断面図 (1:100)

16Tr. 層序は、現代盛土の下 GL-1.4m まで近世以降の整地とみられる層が 7 層みられる。その下で平安時代の池の堆積がみられた。この池の埋土は 0.3 ~ 0.4m まで確認したが、池底までは掘削できなかった。

17Tr. 層序は現代盛土の下で進駐軍の整地層を検出した。この整地層を法勝寺の時期と誤認したため、下層まで掘削していない。

18Tr. 調査区北半で旧猿舎の基礎を検出した。基礎間の遺構残存状況を確認した結果、基礎の間では現代盛土、黒褐色砂泥、進駐軍の整地層、黒褐色泥砂の下 (GL-0.55m) で中島の積土とみられる灰色泥砂を検出した。11Tr. で中島の積土を検出しているが、レベルはほぼ同じである。調査区南端では、近世以降の東西溝を検出した。この溝は深さ 0.6m 程度であるが、その底部 GL-1.35m で砂質の地山を検出した。したがって、中島の積土は厚さ 60cm が残存している。

19Tr. 18Tr. と同様、旧猿舎の基礎を検出した。層序は 18Tr. と同様で、基礎の間では GL-0.7m で中島の積土を検出した。断ち割りをおこなっていないため、地山の深さは不明である。

20Tr. 池の汀を確認するために設定した調査区で 18Tr. の南東部分に位置する。層序は、現代盛土、進駐軍の整地層、近世以降の整地層が 4 層あり、にぶい黄橙色砂質の地山となる。地山は北東が高く、南西が低くなっており、その差は約 0.35m である。西方でおこなった 13Tr. のレベルと比べると、この地山の傾斜が池の落ちに対応するようにみえる。ただし、地山直上まで棧瓦を含んでいたため平安時代の池の汀部分になるのか明確ではない。

21Tr. 14Tr. と重複するように、掘削をおこなった。その結果、法勝寺の整地層と考え掘削を止めていた層が進駐軍の整地層であることが明らかになった。その下層では近代の盛土直下 GL-0.95m で地山を検出した。下層は大正時代の獣舎の基礎が残っていた。基礎のない部分では近世の整地層の直下 GL-1.05m で地山 (灰オリブ色シルト) を検出した。

22Tr. 池の汀を確認するためにベンギンプール計画地に設定した調査区である。23Tr. 同様、進駐軍の整地土の下に大正時代の獣舎の基礎が残っていた。その下層には近世の整地土があり、GL-1m で池の埋土の可能性のある緑灰色砂、中島の積土の可能性のある灰黄色砂泥があり、GL-1.25m で地山となる。

23Tr. 17Tr. と重複するように掘削をおこなった。その結果、法勝寺の整地層と考え掘削を止めていた層が進駐軍の整地層であることが明らかになった。GL-1.0m で地山を検出した。

24Tr. 層序は、現代盛土、進駐軍の整地層、大正時代獣舎基礎、近世整地層、灰オリブ色シルトの地山 (GL-1.1m) である。地山直上まで染付が入り近世以降の整地層であることがわかった。

25Tr. 旧猿舎の基礎の位置を確認することを主な目的とした。その結果、旧猿舎基礎の西端を確認した。基礎が密集していたことから、その間で遺構の有無を確認することはできなかった。

26Tr. 旧猿舎の基礎を確認したが、基礎のない部分で遺構の確認のために深掘りをおこなった。層序は現代盛土、進駐軍の整地層、近世以降の整地層があり、その下で池の埋土が GL-0.9m で残っていた。池の埋土は 4 層にわけられる。地山のオリブ灰色砂は GL-1.45m で検出した。

27Tr. 現代盛土、進駐軍の整地層の下で近世以降の層が 7 層ある。にぶい黄色粗砂の地山は

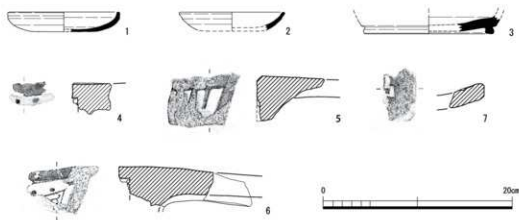


図 39 遺物実測図 (1:4)

GL-1mで検出した。地山の上面には約1cmの厚さで粘性のある灰色シルトがある。この層は池底の粘土の可能性はあるが、調査面積が狭小であることから確定はできない。

28Tr. 南北方向に約13m設定した。南から掘削したが、大正時代のライオン・トラ舎の基礎が残っていたため、若干東に筋を変えて掘削を進めた。層序は現代盛土、暗褐色泥砂、黄灰色泥砂、にぶい黄橙色砂(地山)である。地山は、南でGL-1.35m、北でGL-0.5mで検出した。北から南になだらかに傾斜する状況を確認した。ただし、南半では地山直上まで椀瓦を含む近世以降の層がみられること、23Tr.ではGL-1.0mで地山を検出していることから近世以降に削平されたものとみられる。調査区の北半では地山と近世の層の間に黒褐色泥砂層がある。この層からは近世以降の遺物は出土していないため、法勝寺にかかわる層の可能性はある。調査区北端付近では50cm程度の石を据えた痕跡がみられ、その南と北では地山が約30cmの段差がある。この石が何らかの境となっていたと考えられる。この石の南で一段下がったところの高さは、12Tr.で見つかった池と同じであったため、池の汀の可能性はある。

3 出土遺物

出土遺物には、土師器や瓦があるが、図示できるものは少ない。1は10Tr.⑤層(池埋土)から出土した土師器皿である。口径11.6cmで二段ナデを施す。2は12Tr.②層(池埋土)から出土した土師器皿で、二段ナデを施す。3は8Tr.③層(八角九重塔の掘込地業)から出土した須恵器壺の底部である。底径13.4cmで高台をはりつける。4は1Tr.の進駐軍の整地層から出土した軒平瓦である。上外区と珠文のみが残存し、凹面は布目をナデ消す。5は10Tr.⑤層(池埋土)から出土した剣頭文軒平瓦である。6は12Tr.②層(池埋土)から出土した唐草文軒平瓦である。7は20Tr.⑤層(近世以降)から出土した平瓦である。凹面に五輪塔文がみられる。

4 まとめ

京都市動物園は明治36年に開園し、多くの獣舎が建設され、その後も建物の建て替えがおこなわれている²⁾。埋蔵文化財の調査が本格化する以前から、既に多くの獣舎が建っており、今

回の調査でも5・9・18・19・25・26・27Tr.で旧猿舎の基礎が、13・21・22・23・24・28Tr.でも大正時代のものと思われる獣舎の基礎があった。このような古い獣舎の基礎が残る場所は既に遺跡が破壊されており遺構は残存しておらず、古い獣舎の基礎が残っていない20Tr.でも地山直上まで近現代の層が及んでいるところもある。ただし、基礎の間や古い獣舎がない場所では遺跡が残存しているところもあり、動物園の敷地全域が攪乱により遺跡が破壊されているわけではない。

今回の調査地を含む京都市動物園南半は、昭和21年に駐留軍により接収された。駐車場として利用するため、それまで残存していた八角九重塔の基壇が削平された。この削平された八角九重塔の基壇土による整地が塔の周辺で検出された。この整地層から出土する遺物は平安時代のものであり、また土質も基壇土と大差なく固く締まっている。したがって、この層が平安時代のものなのか否かを判断するのは極めて難しい。今後、周辺において調査する場合は注意が必要であろう。

このような近代以降の開発行為による障害があったものの、今回の調査では、法勝寺にかかわる重要な知見が得られた。特に、法勝寺八角九重塔の掘込地業を検出した意義は大きい。八角九重塔については、今年度の国庫補助事業により範囲確認調査をおこない、掘込地業の構造などが明らかにされるといった顕著な成果があがっている。また、今回の試掘調査では、八角九重塔の建つ中島やその周囲にある池を検出した。中島の積土は11・12・18・19・22Tr.で、池の埋土は10・12・13・15・16・22・26Tr.で検出した。池の汀を検出したのは12Tr.のみであるが、州浜はない。池の形状は、中島積土と池埋土の分布状況から入りくんだ形状であったことがわかる。塔の掘込地業は49.8mで検出している。中島から池に向かってなだらかに下がり、11・18・19Tr.では約49.3mで中島の積土を検出している。池の汀は12Tr.で49.1mであり、池もなだらかに下がる。池底については、地山検出レベルなどから復元すると、27Tr.で約49.0m、21・23・24Tr.で48.9m、22Tr.で48.8m、13Tr.で48.5m、26Tr.で48.4m、10Tr.西端で48.3mとなる。16Tr.では48.1mよりも深くなることから、汀から1m程の深さとなる。

今回の試掘調査では、今年度おこなった発掘調査とあわせて法勝寺中樞部を復元する重要なデータを提示できた。今後、数年かけて新京都市動物園構想にともなう調査が実施されると思われるが、法勝寺中樞部の解明と遺跡の保存を図っていきたい。(家原 圭太)

註

- 1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』2011年。
- 2) 京都市動物園『京都市動物園100周年記念誌 京都市動物園100年のあゆみ』2003年。

III-5 法勝寺跡・岡崎遺跡2 No. 70

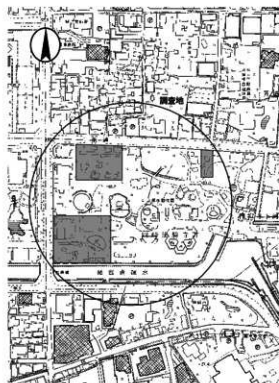


図40 調査位置図(1:5,000)

86 m²である(図35)。トレンチは園内の各所に及ぶため、以下では想定されている法勝寺の伽藍に即してエリアごとに報告する。なお、遺構番号は通し番号ではなくトレンチごとに付した。

1 はじめに

調査地は、左京区岡崎法勝寺町に所在する京都市動物園である。白河天皇の御願寺法勝寺の中枢部に当たる本動物園では、開園100年を過ぎて全面的なリニューアルを行うこととなり、地下遺構に抵触しない施設設計をするためのデータ収集を目的として、試掘調査を段階的に実施している。平成21年度は第1次として、「おとぎの国」ゾーンを対象として調査を実施した(本書前節)。今回の試掘調査はこれに引き続き、「アフリカの草原」・「ネコワールド」・「ゾウの森」・「教育・管理施設」の4つのゾーンのそれぞれ一部を対象として実施したものである。

調査は平成22年4月13～15日と12月15～16日の2回にわたった。前者で1～15Tr.を、後者で16～18Tr.を調査し、合計調査面積は

2 阿弥陀堂跡東方の調査

1～3Tr.及び16～17Tr.は動物園南西部に設けたトレンチである。これらは、法勝寺伽藍において塔と阿弥陀堂の間を隔てる園池が、実際にどの範囲に広がるのか確認することを目的としていた。検出した園池遺構の埋土は、本件調査全体を通じいずれの地点でも上下2層の埋土を基本としていた。下層埋土は法勝寺期の遺物のみを包含しているのに対し(池埋土)、上層埋土には近世の遺物が含まれ、廃絶後の園池に堆積した層と考えられる(近世堆積土)。

1Tr. 現在、北に接して半円形のアシカ池があるが、戦前の図面では円形である。実際のトレンチでは、旧アシカ池の南壁面が半解体状態で埋められているのを確認するとどまった。

2Tr. GL-0.65 m(標高48.96 m)で法勝寺の園池上層埋土、-0.99 m(48.62 m)で下層埋土、-1.30 m(48.31 m)でいわゆる白川砂の基盤層に至る。トレンチ東端で、下層埋土が基盤層を垂直に近い角度で切り込んでいるのを認めたが、その意味するところは追究できなかった。

3Tr. 近現代の攪乱がやや深く及んでおり、GL-1.00 m(標高48.62 m)で園池上層埋土に

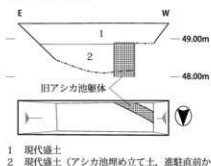
至るが、部分的に残存しているに過ぎない。下層埋土には-1.15 m (48.47 m) で達し、-1.30 m (48.32 m) で基盤の白川砂となる。園池以外の遺構は検出されなかった。

16Tr. 大部分がGL-1.3 m前後まで現代の攪乱を受けている。その攪乱直下で白川砂の基盤層が現れ、東西溝2条を検出した。時期は特定できない。攪乱を免れた南端でも、進駐軍接取時の整地層¹⁾と近世以降の盛土のすぐ下が基盤層で、法勝寺期に池であったのか陸であったのか、判断できなかった。なお、基盤層が最も高く残っていた部分の標高は48.10 mである。

17Tr. 現代盛土の下で見られる大きな掘方は疏水掘削時のものと思われる。トレンチ北半では現代盛土下に灰色泥砂があるが、染付が出土しており近世以降の堆積である。他に遺構はなく、近世層の下GL-1.70m (標高47.60 m) で白川砂の基盤層を検出したのみである。

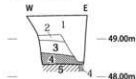
以上、阿弥陀堂跡東方に設けた5つのトレンチでは、1・16・17Tr.で攪乱・削平により遺構なし、2・3Tr.で池の中であることを確認し、検出された池底はほぼ同一レベルであった。

《1Tr. 平面・南壁》



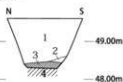
- 1 現代盛土
- 2 現代盛土 (アシカ池埋め立て土、進駐軍前か)

《2Tr. 北壁》



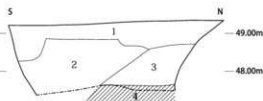
- 1 現代盛土
- 2 10YR 5/3 にぶい黄褐色泥砂 (近代以降造成土)
- 3 10YR 4/1 褐灰色砂泥 (瓦等包含、近世堆積土)
- 4 2.5Y 4/1 黄灰色砂泥 (瓦等包含、池埋土)
- 5 10YR 6/2 灰黄褐色砂 (白川砂、基盤層)

《3Tr. 東壁》



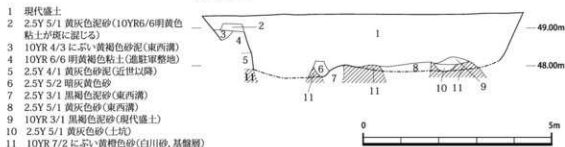
- 1 現代盛土
- 2 2.5Y 3/2 黒褐色砂泥 (近世? 堆積土)
- 3 7.5Y 3/1 オリーブ黒色砂泥 (池埋土)
- 4 10BG 6/1 青灰色砂 (無遺物、基盤層)

《17Tr. 西壁》



- 1 現代盛土
- 2 7.5YR 6/6 褐色粘土、2.5Y 4/1 黄灰色泥砂の互層 (疏水掘方)
- 3 5Y 4/1 灰色泥砂 (染付含む)
- 4 10YR 7/2 にぶい黄褐色砂 (白川砂、基盤層)

《16Tr. 西壁》



- 1 現代盛土
- 2 2.5Y 5/1 黄灰色泥砂 (10YR6/6 明黄色粘土が斑に混じる)
- 3 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (東西溝)
- 4 10YR 6/6 明黄褐色粘土 (進駐軍整地)
- 5 2.5Y 4/1 黄灰色砂泥 (近世以降)
- 6 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂
- 7 2.5Y 3/1 黒褐色泥砂 (東西溝)
- 8 2.5Y 5/1 黄灰色砂 (東西溝)
- 9 10YR 3/1 黒褐色砂泥 (現代盛土)
- 10 2.5Y 5/1 黄灰色砂 (土坑)
- 11 10YR 7/2 にぶい黄褐色砂 (白川砂、基盤層)

図41 阿弥陀堂跡東方のトレンチ平・断面図 (1:100)

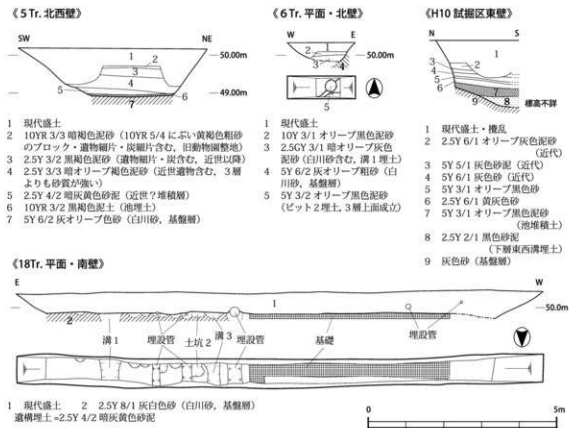


図42 金堂西軒廊跡西方のトレンチ平・断面図 (1:100)

3 金堂西軒廊跡西方の調査

動物園の北西隅一带に5・6・18Tr.を設定した。この辺りは金堂から腕のように南へ延びた西軒廊の西側に当たり、西築地との間の空閑地であるが、南東からは塔を取り巻く園池が張り出してきているという復元図が描かれることが多い。近接地点で昭和62年度に発掘調査²⁾、平成10年度に試掘調査³⁾が実施されており、ともに法勝寺の園池の堆積土を検出しているが、池の外形を描くだけの知見は得られていない。

5Tr. 昭和62年度調査区のすぐ南東側に当たる。GL-0.70 m (標高49.48 m)で園池上層埋土、-1.16 m (49.02 m)で下層埋土、-1.23 m (48.95 m)で基盤の白川砂に達する。基盤層がすなわち池底であるが、トレンチ内で見える限り、ほぼフラットで傾斜は認められない。

6Tr. GL-0.33 m (標高50.00 m)で、北東-南西方向の溝1と、それを切って成立するピット2を検出した。狭いトレンチの大部分を溝2と攪乱が占めているために、本来の基盤高は確認できなかったが、おそらく溝1やピット2の成立面と同一であろう。

18Tr. トレンチ西半では古い建物基礎が残されたままであったが、東半ではGL-0.50 m (標高49.88 m)の現代盛土直下で基盤層の白川砂が現れ、南北溝2条、土坑6基を検出した。溝1は幅約0.5 mの南北溝で、平安時代の須恵器小片が出土した。土坑2は径0.4 m程度の不整形土坑で、平安時代の布目瓦が出土。溝3は出土した土師器片から近世に属すると考えられる。

西軒廊西方においては以上のとおり、北の6・18Tr.ではごく浅いところに基盤層があって明

らかに陸部であるのに対し、南の5Tr.は池の中で、汀に向かって浅くなる様子はない。昭和62年度発掘区でも、検出された池底は標高48.7～48.8mとほぼ水平である。汀線に近いかと思われるのは平成10年度試掘調査区で、下層東西溝が掘りこんでいることによる傾斜を除いても、池の堆積土に接する基盤層が北へ緩やかに上がっていることが見て取れる(図42)⁹⁾。これまでに見つかっている汀はいずれも急な傾斜変換をもたないことから、このままの傾斜で池底が浅くなるとすると、10年度トレンチ北端から1.9mほど北で陸部の高さになる。池の水深が0.5mほどだとすると、汀線は10年度トレンチ北端にほぼ等しいか、その少し北になると推定できる。

4 金堂西軒廊跡の調査

7～10Tr.を設定した辺りは、金堂から西に、途中で南に折れて延びた先に鐘樓を置く西軒廊の推定地点である。軒廊の存在と屈曲地点は東軒廊の発掘調査で確認されているので⁵⁾、これを金堂中軸線で折り返した西軒廊の推定位置も、ほぼ間違いのないところである。

7Tr. 西軒廊に対しては若干東に外れた位置に当たる。埋設管を避けたため西区と東区に分かれることとなった。西区では、近代以降の盛土の直下GL-0.50m(標高49.92m)で灰オリーブ色粗砂の基盤層となり、遺構は認められなかった。東区では-0.74m(49.76m)まで現代の攪乱を受けており、直下が灰オリーブ色微砂の基盤層であった。この面で検出したピット1は一辺0.4mの方形を呈しており、柱穴の可能性もある。

8Tr. 本来鐘樓を確認するためのトレンチであったが、現獣舎と重なるため、その南に外れた地点に設定せざるを得なかった。大部分がGL-0.53m(標高49.36m)まで現代の攪乱を受けており、その直下が基盤の白川砂である。ただし、トレンチの西端では基盤層が攪乱を免れて立ち上がっており、本来、深くとも-0.32m(49.57m)で基盤層に達することが分かる。鐘樓に関する知見はなかったが、圍池でないことは確実と言ってよいだろう。

9Tr. 当初、西軒廊跡にかかるよう長いトレンチにする予定であったが、古い獣舎の基礎が現れて掘削を阻んだため、それ以上の調査を中止した。現代盛土直下のGL-0.52m(標高49.84m)で白川砂の基盤に至り、溝1を検出した。北東・南西方向の溝と思われ、南東側の肩口を検出したのみであるが、幅は0.9m以上ある。

10Tr. 9Tr.に代わり、西軒廊跡にかかるよう新たに設定した。現代盛土直下のGL-0.29m(標高50.11m)で白川砂の基盤層に達するが、東半ではこれを僅かに掘り込むように第3層が見られる。このトレンチでは、溝2条、土坑・ピット15基と多くの遺構が認められ、特にトレンチ東半に密集していた。溝1は西半唯一の遺構で、検出長5.0m、幅0.4m強を測る。ピット14と土坑15は柱当たりとその掘方かと思われたが、攪乱を利用して観察したピット14の断面は、掃鉢状を呈していて柱跡とは認めがたかった。その他の遺構のいずれも法勝寺に伴うものとは考えにくい。第3層を掘込地業の残欠と見ることも不可能ではないが、可能性は低いだろう。

以上、西軒廊及び鐘樓については、ここにあったことはほぼ確実であるにもかかわらず、遺構はもとより、建物があったことを示すような遺物の出土状況もないという結果になった。これは、

建物推定位置にかかっているのが 10Tr. だけということが原因ではないだろう。事実、10Tr. のすぐ北側で、平成 3 年度に西軒廊を横断する長さ 23 m のトレンチを掘っているが、ピット数基を認めただけで今回とほぼ同様の結果に終わっている⁶⁾。軒廊という軽量建物であるため、大規模な地業が必要でなく、容易に削平されてしまったものと考えられる。また、発掘で確認されている軒廊のコーナー部分が、動物園の GL より 2 m ほど高い基壇上にあることを思えば、軒廊の先端部分も周辺より少なからず高い基壇を有していた可能性もあり、それが削平された現状では全く痕跡をとどめていないのかもしれない。

5 金堂東軒廊跡東方の調査

法勝寺金堂東軒廊の東方に当たるこのエリアでは、今回 1 箇所のトレンチしか掘れなかった。

11Tr. GL-0.26 m (標高 50.88 m) の現代盛土直下が白川砂の基盤層である。大型の土坑 1 基、ピット 2 基を検出した。土坑 3 は直径約 2.9 m の円形で、埋土中からは法勝寺期の瓦が多量に出土した。寺廃絶後の廃棄土坑ではないかと考える。基盤層の標高から見て、法勝寺存続時には陸部であったと言える。

6 阿弥陀堂跡の調査

4Tr. 及び 12～15Tr. を設けた動物園南西隅は阿弥陀堂の推定地であるが、従来この堂に関する考古学的知見は全くなく、その正確な位置をつかむことは、今回最大の目標であった。

阿弥陀堂は、承保三年 (1076) に木作始めがあり、承暦元年 (1077) には九体の丈六阿弥陀像が安置され、金堂・講堂・五大堂・法華堂・南大門等とともに落慶供養が行われている。この

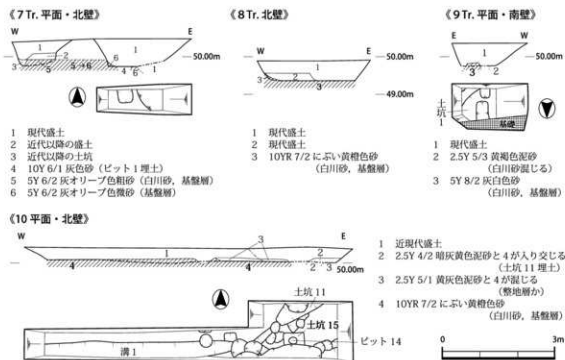


図 43 金堂西軒廊跡のトレンチ平・断面図 (1:100)

時の記録では、十一間四面瓦葺であったという。寛治元年(1247)の焼亡後は、建長五年(1253)に再建されたが、暦応五年(1342)に金堂や塔とともに焼け落ちた後は、そのまま再建されることがなかったようである。

4Tr. GL-0.29 m (標高 49.30 m) まで現代盛土があり、その直下に白川砂の基盤層がある。この面上で土坑・ピット多数を検出した。遺物がなく確証はないが、大部分は明治の動物園開園以後のものという印象を受けた。その中であって古いと思われたのは土坑2と土坑8で、後者からは弥生土器小片が出土した。阿弥陀堂を含め、法勝寺に関わることが明らかな遺構は認められなかった。

12Tr. 12～15Tr. は阿弥陀堂の範囲確認のため特に設けたもので、推定では12Tr. は阿弥陀堂の真下になるはずであった。このトレンチも、埋設管等のため西・中・東の3区に分かれることになった。西区では、GL-1.50 m (標高 48.04 m) まで掘り下げたが、現キリン舎の基礎等により全て攪乱であった。中区も、GL-0.45 m まで掘った時点で西区と同様と予想がついたため、掘削を中止した。

残る東区では東半にのみ、目立った攪乱を受けていない部分が残っていた。現代盛土下にオリブ褐色砂泥(第2層)、暗オリブ褐色泥砂(第4層)の2層があるが、いずれも法勝寺の遺構面とは認めがたかった。その下は白川砂の基盤層で、検出深はGL-0.75 m (48.78 m) である。4Tr. では49.30 m であることからすると、少なからず削平を受けているようである。基盤面で土坑1基、ピット1基を検出した。

13Tr. 4Tr. のすぐ南西に設定した。現代盛土直下のGL-0.12 m (標高 49.47 m) で、固くつき固められた地業を検出した。位置から推して阿弥陀堂の地業と見て間違いなく、その東辺附近と考えられた。トレンチの東半分が下水管敷設による攪乱を受けているため、残念ながら東辺そのものは失われていたが、この攪乱を利用して地業の断面観察を行った。それによると、地業の版築は厚さ0.25～0.35 m で3層からなり、残存する最上層には拳大～人頭大の円礫とともに、焼けた瓦片も含まれていた。版築層の直下の基盤面では径約0.2 m のピットが2基、南北に1.2

〔11Tr. 平面・北壁〕

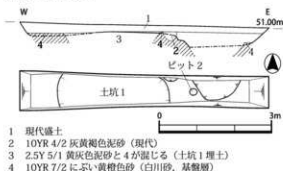


図44 金堂東軒廊跡東方のトレンチ平・断面図 (1:100)



写真11 13トレンチ全景(東から)

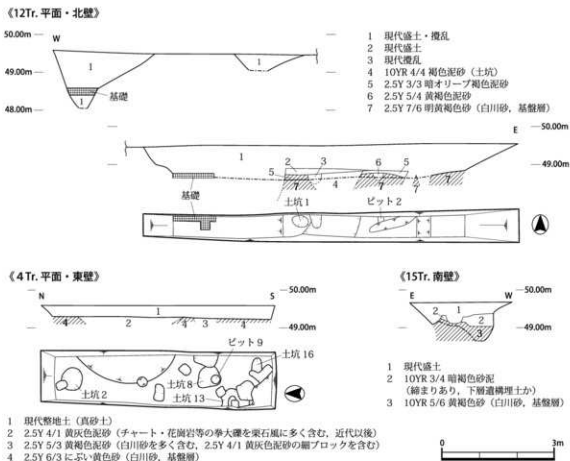


図45 阿弥陀堂跡のトレンチ平・断面図(1)(1:100)

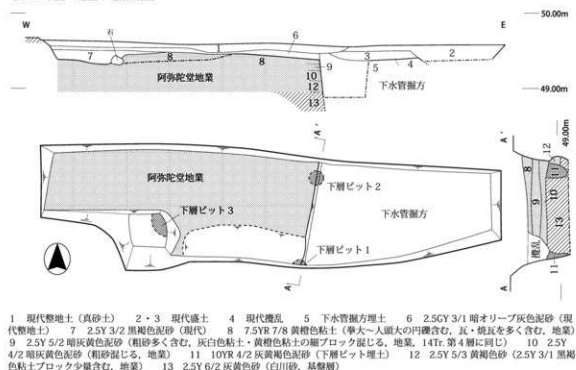
m離れて並んでおり、興味深いことに、北のピット2を境にして以北では版築が1層多くてその分深く、厚さ0.50mになっていた。これらのピットは版築の作業単位を示す可能性があるが、このことを追究する時間的余裕はなかった。なお、トレンチ南西隅で行った断ち割りでも、地業下層のピットを1基(ピット3)見出しているが、こちらは直径が約0.5mである。

14Tr. 13Tr.の検出遺構が地業であることの確認を得るため、その北側、4Tr.のすぐ西に設定し、狙いどおり地業の続きを検出した。GL-0.23m(標高49.40m)、現代盛土直下である。こちらの版築層は2層だが、厚みは0.55mあり、13Tr.ピット2以北の厚さとほぼ同じである。残念ながら13Tr.同様地業の東辺が攪乱によって失われているが、東側に隣接する4Tr.では全く地業らしいものを検出していないので、この攪乱部分に地業東辺があったことは確実である。

15Tr. 阿弥陀堂の北辺についてデータを得るべく設定した。埋設管が縦横にあって、希望どおりの位置と広さに掘れず、掘ったトレンチも攪乱を受けていないのはその南西隅だけだった。GL-0.30m(標高49.38m)でよく締まった暗褐色砂泥層があり、基盤の白川砂を掘り込んでいるが、地業とは土質が異なり、層の下面も水平でないことから、地業ではなく、弥生か古墳時代の遺構であろうと判断した。そのとおりであれば、阿弥陀堂は15Tr.より南にあることになる。

以上のとおり、阿弥陀堂の地業を初めて確認し、その東辺が14Tr.東端附近にあること、北辺は15Tr.より南にあることが判明した。雨落溝等が一切検出されていないが、今年度発掘調査し

《13Tr. 平面・北壁・地業断面》



《14Tr. 平面・北壁》

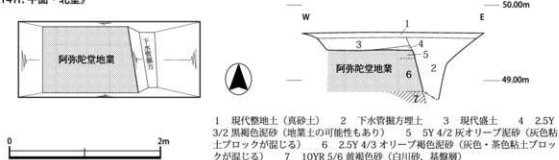


図 46 阿弥陀堂跡のトレンチ平・断面図（2）（1：50）

た塔跡がそうであったように、雨落溝よりも深く削平が及んでいるものと考えられる。また、阿弥陀堂の前面（東側）のどこまで池が迫っていたかについては、4Tr. では明らかに陸部であり、30 m東方の3Tr. では池の中であることを確認している、その間に汀線があることになる。史料からは、阿弥陀堂東面階段から東へおよそ5 mないし11 mの距離に汀線があったことが知れるので⁷⁾、それに矛盾しない成果と言える。

7 遺物

遺物は、近代以降の整地層にしばしば平安時代の瓦が含まれていたほかは、大寺院の跡にしては極めて少ない。1の軒丸瓦は11Tr. の土坑3から出土した。同范瓦が尊勝寺からも出土する。播磨産。2の軒丸瓦は11Tr. 攪乱内から出土した。3は軒平瓦。巴文の両側に唐草文を配する意匠である。13Tr. の掘削中に出土した。4は緑釉土製円塔で、底部以外に濃緑色の釉を施している。

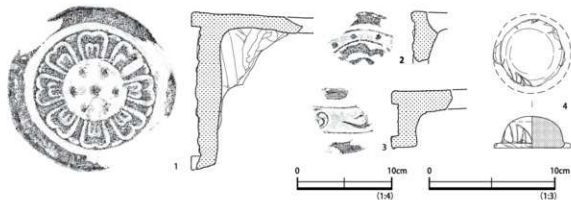


図47 出土遺物（瓦1：4，土製品1：3）

鈎状部を一部欠くが、ほぼ完形である。型作りで、身の部分には型と土の間に挟んだ布の絞り目が残る。3Tr.の園池下層埋土（第3層）から出土した。

8 まとめ

今回は、開園中の動物園での調査であったため、トレンチの設定位置と広さは思うに任せなかった面があるが、未確認だった九体阿弥陀堂の跡を、地業だけとは言え確認できたことが大きな成果である。これによって地業範囲の東辺はほぼ確定し、北辺も絞り込めてきた。調査に最大限の配慮をしていただいた動物園には感謝を申し上げたい。

また、園池についても形状が徐々に明らかになりつつある。西の汀線は本件3Tr.より西にあり、史料によれば阿弥陀堂に近づいても5mまでである。汀線の北西部は平成10年度トレンチの北を通り、昭和62年度発掘区を内包する。よって、池を鐘樓以南に収める復元諸図よりも池は北西へ張り出して、西軒廊を抱き込むような形状になっていたことになる。今回検出した池底は剥き出しの白川砂で、貼り土等の拵えはなかった。池底レベルは、21年度試掘16Tr.を除けば、本件2・3Tr.附近が最も深い。

一方、軒廊についての知見は全く得られず、残念な結果となった。今後の大きな課題である。

（堀 大輔）

註

- 1) 進駐車接取時の整地層は塔跡周辺でしばしば検出されるが、接取時に崩したと言われる塔基壇土等で低いところを埋めたらしく、土自体は平安時代の地業土とほとんど見分けがつかない。包含遺物も平安瓦ばかりである。16Tr.のように、下層から近世・近代の遺物が出土することで初めて確定しうる。
- 2) 平方幸雄「法勝寺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1991年
- 3) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概要 平成10年度』1999年，試掘調査一覧表No.57。この時点では池の存在を報告していないが、今回改めて土層図を検討した結果、池の堆積土と見て良いと考えた。
- 4) 図42では、池底の検出深がGL-1.47mほどあって、近接する5Tr.に比してやや深いように見えるが、GL自体が現状で0.25m程度の比高をもつことを差し引くと、5Tr.のGLを±0とするととき-1.22mとなり、

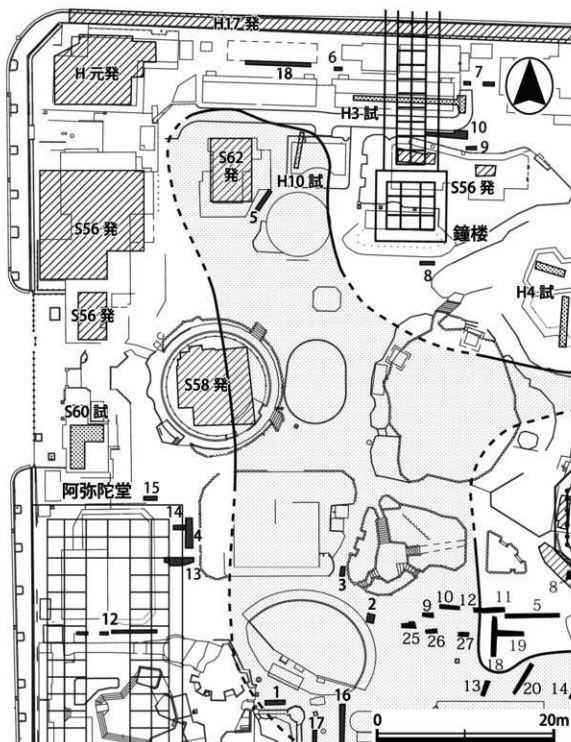


図48 伽藍及び園池配置図 (1:800, 明朝体の数字は21年度試掘トレンチ)

5Tr. で検出した池底 GL-1.23 とほぼ同一の深さと考えられる。

- 5) 辻裕司・上村和直『法勝寺跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1987年
- 6) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』1992年, 試掘調査一覧表No.79
- 7) 富島義幸『法勝寺の伽藍形態とその他の特徴』『日本建築学会計画系論文集』第516号, (社)日本建築学会, 1999年

III-6 御土居跡 No.73

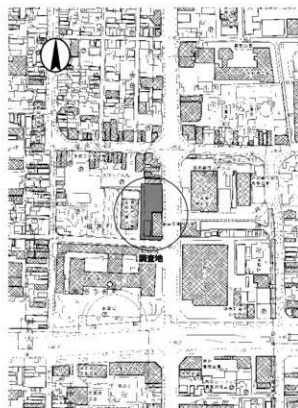


図49 調査位置図 (1:5,000)

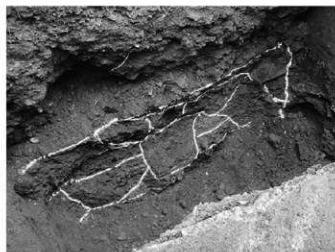


写真12 2Tr.北壁断面(南西から)

1 はじめに

調査地は、中京区一之船入町386-2、378の一部、同区榎木町450-11の一部で、京都市役所の北側、烏津製作所旧本社敷地内である。この場所は、豊臣秀吉が天正19年(1591)に京都を防備するために築いた土塁である御土居跡に該当し、寺町旧城(妙満寺跡)の東側に隣接する場所である。

この場所で新しく建築の計画があったため、平成22年12月6日に試掘調査をおこなった。計画は、河原町通り側に建っている建物そのまま利用し、西側の既存建物を解体して新しく建物を建てるものである。調査時は既存建物が解体前であったため、建物の隙間で東西方向に4箇所調査をおこなった。調査面積は37㎡である。

2 層序と検出遺構

1Tr.は現代盛土直下で黒褐色砂礫の地山(GL-1.6m)を検出した。顕著な遺構や遺物はみられなかった。2~4Tr.の状況から遺構面は削平されているものとみられる。

2Tr.は1Tr.の西側で東西方向に調査をおこなった。基本層序は現代盛土、灰褐色砂泥(GL-1.1m~-1.4m)、黒褐色砂泥(GL-1.4m~-1.6m)、暗灰黄色砂泥(GL-1.6m~-

2.1m)、黒褐色砂礫(GL-2.1m~・地山)である。検出遺構は、灰褐色砂泥層から掘られた土坑3基、黒褐色砂泥層から掘り込まれた土坑2基、暗灰黄色砂泥層から掘り込まれた土坑1基である。これらの土坑からは、骨壺や骨が出土したことから近世の墓と考えられる。地山上面も含

めて、遺構面は4面ある。御土居の盛土や堀の痕跡はみられない。西から掘削をしたが、3m掘ったところで擁壁（地下建物）が残っていたため遺跡が残存しているのは敷地西端のみである。

3 Tr.の基本層序は、2 Tr.同様、現代盛土、灰褐色砂泥（GL-1.4m～-1.6m）、黒褐色砂泥（GL-1.6m～-1.8m）、暗灰黄色砂泥（GL-1.8m～）である。遺構が残存していることから地山までの掘削はおこなわなかった。灰褐色砂泥から掘られた土坑2基を検出したが、2 Tr.同様に近世の墓とみられる。西から4mの位置で擁壁（地下建物）が残存していた。

4 Tr.の基本層序は、現代盛土、灰褐色砂泥（GL-1.5m～-1.6m）、暗褐色泥砂（GL-1.6m～-2.5m）、黒褐色砂礫（GL-2.5m～・地山）である。灰褐色砂泥は2・3 Tr.の第1遺構面にあたる。この面で近世の墓を2基検出した。調査区の西壁で検出した墓からは、「元禄八年」（1695）銘の墓石が出土した。この墓の東側、灰褐色砂泥上面に厚さ5～20cmの焼土層がみられた。暗褐色泥砂層は礫を多く含み、2・3 Tr.ではみられなかった土層である。西から3.5mの位置で擁壁（地下建物）が残存していた。

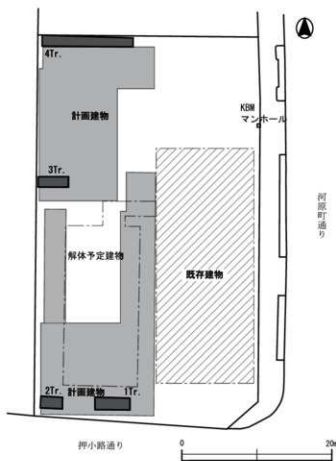


図50 調査区配置図（1：500）

3 出土遺物

2 Tr.～4 Tr.で近世の墓にかかわる遺物が出土した（図52）。

1は2 Tr.⑧層から出土した土師器皿で口径11.3cmである。2は2 Tr.⑤層から出土した陶器碗である。口縁部が外反し、浅黄色の釉薬を施す。3は3 Tr.掘削中に出土した、外面に竹紋様を描く染付の花入れである。体部が竹節状に凹んでおり、竹を表現したものである。4は3 Tr.掘削中に、5は3 Tr.④層から出土した土師器鉢である。口縁・体部は丸みがある。ロクロ成形で底部は未調整である。6は3 Tr.⑥層から出土した土師器皿である。圏線がめぐる。7は4 Tr.西壁で検出した「元禄八年」銘の墓石出土の近世墓から出土した骨壺の蓋である。つまみはなく、かえりがみられる。外面はケズリ調整する。8・9は2 Tr.掘削中に出土した。8は土師質壺である。口径17.2cmで器高は18.1cmである。無紋の火消し壺を骨壺として利用している。

1Tr. 北壁断面図

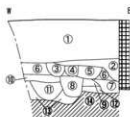
KBM±0

盛土

10YR3/1黒褐色砂礫 (地山)

2Tr. 北壁断面図

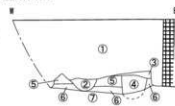
KBM±0



- ① 現代盛土
 - ② 10YR3/1黒褐色砂泥 (炭多く含む、現代)
 - ③ 2.5Y3/1黒褐色砂泥
 - ④ 10YR4/1褐灰色砂泥
 - ⑤ 7.5YR3/1黒褐色砂泥
 - ⑥ 7.5YR4/2灰褐色砂泥 (礫多く含む)
 - ⑦ 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - ⑧ 10YR3/2黒褐色砂泥
 - ⑨ 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
 - ⑩ 10YR3/2黒褐色砂泥
 - ⑪ 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
 - ⑫ 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - ⑬ 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
 - ⑭ 10YR3/1黒褐色砂礫 (地山)
- ③・④・⑤・⑦・⑩・⑪近世墓

3Tr. 北壁断面図

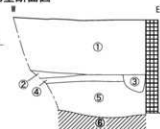
KBM±0



- ① 現代盛土
- ② 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (近世墓)
- ③ 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- ④ 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (人骨含む近世墓)
- ⑤ 7.5YR4/2灰褐色砂泥 (2Tr. ⑥層)
- ⑥ 10YR3/2黒褐色砂泥 (2Tr. ⑩層)
- ⑦ 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (2Tr. ⑬層)

4Tr. 北壁断面図

KBM±0



- ① 現代盛土
- ② 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (焼土多く含む)
- ③ 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (近世墓)
- ④ 7.5YR4/2灰褐色砂泥 (2Tr. ⑥層)
- ⑤ 10YR3/3暗褐色砂泥 (礫多く含む、土師器片含む)
- ⑥ 10YR3/1黒褐色砂礫 (地山)



図 51 1～4Tr.北壁断面図 (1:100)

口縁部は玉縁状を呈し、底部には離れ砂が認められる。8は9とセットになる骨壺の蓋である。つまみが付き、口縁は外方に開く。平坦な天井部には雲母が付着する。10は2Tr.③層から出土した土師質甕である。9と同様、火消し壺を骨壺に使用したものとみられる。11は2Tr.⑩層(近世墓)から出土した古銭である。寛永通宝が6枚重ねになっている。

4 まとめ

以上のとおり、敷地西端から4m以東では古い地下建物があったため、遺跡は残存していなかった。しかし、敷地西端から約4m幅では遺跡は残存していた。遺構面は多いところで4面あり、多くの近世墓を検出した。今回の調査区内だけで、少なくとも10基を確認した。当該地は御土居跡であるが、西に隣接する寺町旧域(妙満寺)が御土居部分に墓地を広げたことが明らかになった。遺構面が重複しているが、最上面である灰褐色砂泥上面から「元禄八年」銘の墓石が出土していることから、短期間に造成をおこないながら墓地を形成していたものと考えられる。

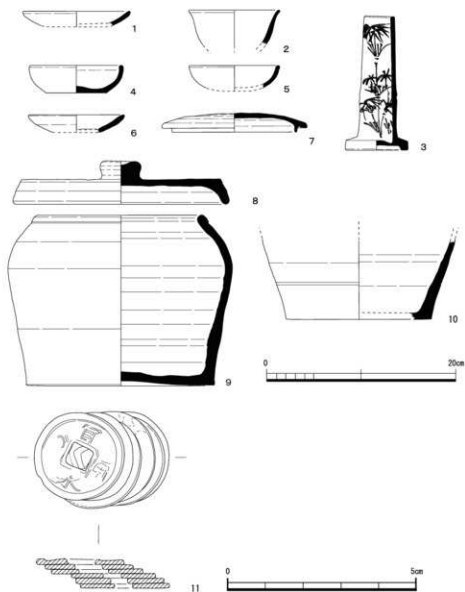


図 52 遺物実測図 1～10 (1:4), 11 (1:1)

平成 20 年度に試掘調査をおこなった河原町今出川の南西部でも、御土居が近世の早い段階で墓地として利用されたことが明らかになっている¹⁾。寺町旧域に隣接した御土居では、このような利用のされかたが広い範囲でおこなわれたことが今回の調査で明らかになった。

(家原 圭太)

註

1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 20 年度』2009 年。

Ⅲ-7 伏見稲荷大社境内 No.18

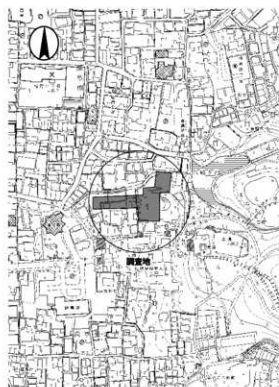


図53 調査位置図 (1:5,000)

1 はじめに

調査地は伏見区深草藪之内町68他に所在する、伏見稲荷大社の境内である。鎮座1300年に当たる平成23年に向け、本殿の北側にある社務所を建て替えることとなり、数期に分けられた工事に対して、試掘もこれまで20年度¹⁾、21年度²⁾の2回実施してきた。前者では祇川沿いの谷状地形を造成した様子を、後者では同じ谷状地形を鎌倉時代の土器を大量に含む客土で埋め立てていることを確認した。

今回の調査地は、明治14年築という旧社務所を曳屋した跡地で、古い谷筋に当たる過去2回の調査地よりも立地が良く、遺構の存在が最も期待されていた地点である。

調査は平成22年3月17日に実施した。調査面積は39㎡である。

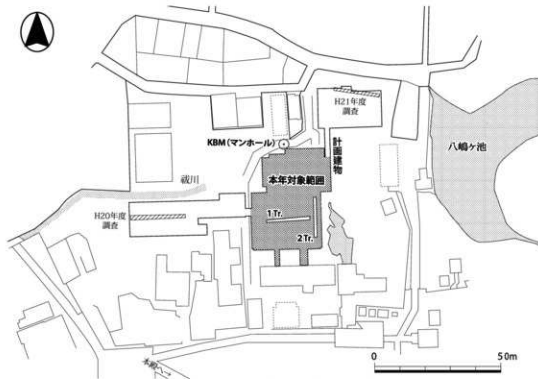


図54 トレンチ位置図 (1:1,500)

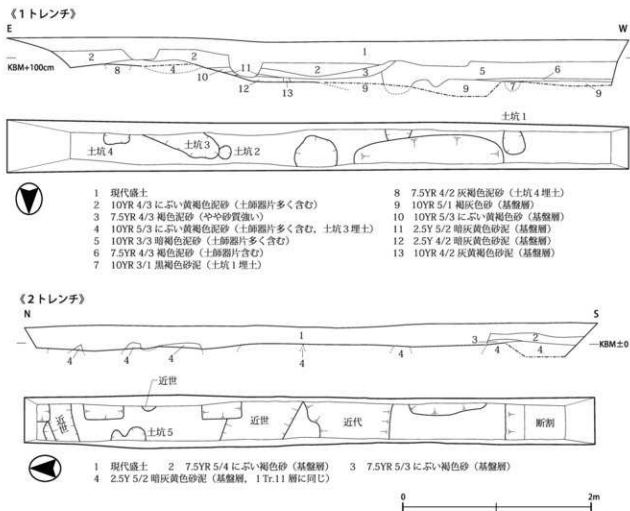


図55 トレンチ位置図 (1:400)

2 層序と遺構

今次調査の対象範囲のうち、北半は、既に進行中の1・2期工事の作業通路となっていて、実質的に調査不能であったため、南半部分に2本のトレンチを設定した。

層序 尾根筋平行方向に設けた1Tr.では、近代盛土の直下 (GL-0.3～0.5 m) で、旧社務所建築直前、即ち幕末頃と思われる生活面がある。この面は、近世盛土 (2・3・5・6層) の上で成立しており、これらの盛土中には土師器片が多数含まれる。この近世盛土の直下が基盤層で、東から西へごく緩やかな傾斜を伴って検出された。この基盤面上で土坑4基を確認した。

尾根筋直交方向に設けた2Tr.では、山側に設定した分基盤面が浅く、局所的に残りの良いところではGL-0.25 mで検出されるが、大部分はGL-0.5～0.6 mまで削平されていた。検出された遺構も一見して近世のものがほとんどで、最も古いと見込まれたピット5も、17世紀代と思われる遺物を包含していた。

土坑3 1Tr.の東端付近で検出した長楕円形の土坑で、幅0.8 m、長さ2.0 m以上を測る。断面図 (図55) に見るとおり、埋土 (4層) がやや盛り上がり、その埋土が土坑4の上に覆い被さっているようにも見えることから、土坑というより客土の一単位なのかもしれない。今回、

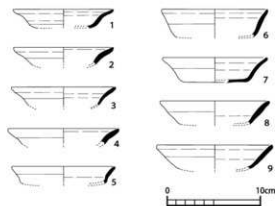


図 56 土坑 3 出土遺物実測図 (1:4)

形状を止めた遺物のほとんどがこの遺構から出土している。出土遺物の年代は京都Ⅶ期からⅨ期まで跨るが、最も新しいものは京都Ⅸ期中段階(15世紀後半)³⁾で、また数的にも最も多い。

3 遺物

土坑 3 出土遺物 出土したのは全て土器である。1～4は体部が開き気味に外反し、軽く内彎して収めるもので、京都Ⅸ期中段階頃のものと思われる。復元口径 10.8～11.2cm。5

は広い底部から短い体部が角をもって立ち上がる。復元口径 11.0cm。Ⅶ期中段階(14世紀前葉)。6～8は一定の器高を有することからⅧ期古段階(14世紀後半)に遡るだろう。復元口径 11.2cm～11.7cm。9は比較的直線的に体部が立ち上がり、端部を三角形に作るもので、Ⅷ期中段階(14世紀末～15世紀はじめ)に属する。

4 まとめ

旧社務所のあった平坦面の成立は、土坑 3 の存在により中世に遡る可能性があるが、土坑 3 自体が近世の整地に伴う客土である可能性も否定できない。また、土坑 3 以外のほとんどの遺構は近世のもので、中世以前の遺構は希薄であると言える。また、対象地の北半には今回トレンチを設けていないが、北半は祇川の開析谷へ近づいていくので、トレンチの所見以上に遺構が分布する可能性は低いものと判断できる。

古代以来奉祀されてきた伏見稲荷大社の歴史を思えば、当該地近辺は少なからぬ遺構の分布が期待されたところではあったが、今回は中世遺構が存在する可能性を指摘するにとどまった。近世の地形変化が大いなのかもしれない。(堀 大輔)

註

- 1) 京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 20 年度』2009 年、試掘調査一覧表 No.88
- 2) 西森正晃「伏見稲荷大社境内」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 21 年度』京都市文化市民局、2010 年
- 3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房、2005 年

III-8 史跡醍醐寺境内1 No.78

1 はじめに

調査地は伏見区醍醐伽藍町22-3、国指定史跡醍醐寺境内の一画である。醍醐寺は、貞観16年(874)理源大師聖宝の開基と伝える真言宗の寺で、山上の上醍醐と山裾の下醍醐からなっている。調査地は下醍醐の南東隅で、北は道路に面し、南東は山が迫り、南西隣地との境は2m近い段差となっており、当該地が高い。近年まで山裾の雑木林であったが、土地自体は明らかに造成によって平坦面を造られている。

当該地については平成13年2月に、別件にて一度試掘調査をしているが、雑木の伐採も十分でない中で実施したこともあり、その際は目立った遺構を認めていない¹⁾。

その際の計画は結局中止となったが、今回、改めて当該地で住宅新築が計画されるに当た

り、前回の調査面積が不十分であると判断されたため、再度試掘調査を行うことになった。調査は平成22年9月21日に実施し、調査面積は28㎡であった。



図57 調査位置図(1:5,000)

2 層序と遺構

調査では、まず北西-南東方向に1Tr.を設定し、ここで石列(石列2)を検出したことから、これを追跡するために2Tr.を設けた。

層序 基本層序は、GL-0.55mまで現代盛土(①層)、-0.66mまで上層整地層(③層)、以下は下層造成土層群(⑥~⑩層)となる。基盤層と断定できるものは今回確認していない。層中の遺物が皆無に近い時代判定は難しいが、上層整地層からは染付が出土しているため江戸時代以降と言える。また、下層造成土層群はそれぞれ西下りの斜め堆積を呈しており、東側から順次土を入れていったように見受けられる。遺構は主にこの下層造成土の上で検出した。

溝1及び石列2・3 1Tr.西端及び2Tr.で検出した。溝1は北東-南西方向の直線的な溝で、幅約0.7m、深さ約0.4mを測る。断ち割り気味に掘った1Tr.では、断面が緩いV字形を呈するこの溝の底に、径25cm前後の川原石4石以上が一列に並んでいるのを認めた(石列2)。石どうしの上面はほぼ揃っているが、側面は左右のどちらにも面を揃えていない。

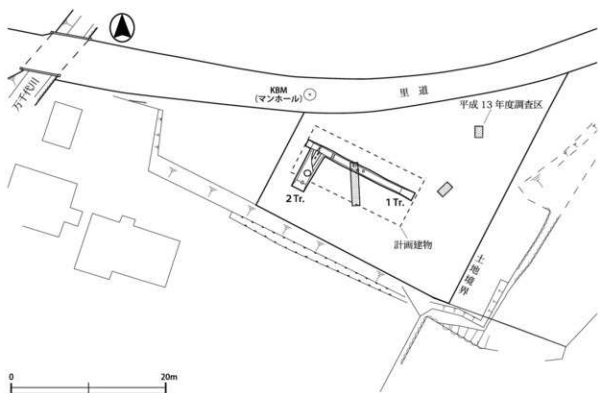


図 58 トレンチ位置図 (1:500)

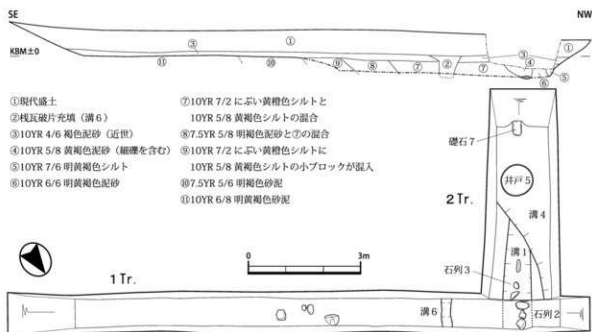


図 59 トレンチ平面及び断面図 (1:100)

この石列2に対し、溝1を追跡した2Tr.では、同じ溝1埋土中でもその検出面に近い深さ、したがって石列2よりも浅いところで、石列3を検出した。側面を揃えないことと並ぶ方向は石列2と同一だが、軸線はややずれている。また、断ち割りの壁面で見える限り両者の石材は噛み合っていないため、積み上げているというわけでもなく、その関係は不明である。

溝4 溝1は1Tr.の北東壁から3.0mほど延びたところで、ややカーブをもって南北方向に延びる溝4に切られる。溝4は東肩を検出しただけであるが、幅は2m以上あるようである。

井戸5 溝4の埋土上面で成立している。井戸用に焼いた瓦で円形の井戸枠を拵えたもので、直径0.8mを測る。掘方は、その外側すぐで掘られている。

溝6 ③層上面で成立しており、幅0.8m、深さ0.6mほどを測る。椀瓦の破片が充填されており、排水のための暗渠かと思われる。

礎石7 井戸5の南西、③層上面で検出。長さ40×幅20×厚さ15cmほどの直方体である。



写真13 2トレンチ全景（南西から）

4 まとめ

基本的に平面検出に止めたため、今回検出した遺構の年代は明確でないが、③層上面で成立する溝6と礎石7は江戸時代以降のもので、井戸瓦を用いる井戸5と、おそらく溝4も江戸と思われる。これに対し溝1は層位的に桃山期に遡る可能性がある。

溝1や溝6は、南北方向とも前面道路とも関係のない方向軸をもっており、下醍醐の伽藍軸とも若干異なっている。前面道路は昭和になってから造られたものなので当然として、それ以外の方位軸とも異なるのは、当該地南東の山裾から北西の万千代川に向かって下る旧地形に規定された結果であろう。溝1が桃山期まで遡るかどうか定かでないが、この溝が掘られた時には、少なからぬ人力を要する土地造成が既に行われていたことは確かである。

なお、今回確認された遺構面については、史跡現状変更の許可条件として計画建物の基礎深を変更し、地下保存されている。

（堀 大輔）

註

- 1) 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』、2002年、試掘調査一覧表No.17

III-9 史跡醍醐寺境内2 No.79



図60 調査位置図(1:5,000)

1 はじめに

史跡醍醐寺境内は、貞観16年(874)の創建以来1100年以上の歴史をもつ醍醐寺の境内域を指定したものであり、醍醐山上から西側の山裾に広がっている。醍醐山上の通称、上醍醐と呼ばれる区域は、醍醐寺開創の地である。現在でも国宝薬師堂、国宝清涼宮拝殿、重要文化財開山堂、重要文化財如意輪堂などの貴重な建造物や重要文化財理源大師坐像等の文化財に指定された美術工芸品が多数安置されている。

しかし、平成20年8月24日に准祇堂が落雷焼失した際に、自動火災報知機と一般回線の電話機等がその機能を失ったことから、上醍醐は自然災害に対して脆弱な地域であり、防災計画の見直しの一環として緊急連絡網を構築する目的で携帯電話基地局の設置が検討された。

携帯電話基地局の建設予定地は、京都市伏見区醍醐醍醐山8にあり、江戸時代後期に描かれた「上醍醐寺總画圖」¹⁾において、元円明院旧跡と推定される部分である。円明院については、醍醐寺子院について記された『醍醐寺新要録』巻第五に坊名は記されているものの、伽藍や資材に関する記述はなく詳細は不明である²⁾。「上醍醐寺總画圖」の描かれた江戸時代後期にはすでに

円明院は上醍醐内の別の位置に移動しており、調査地そのものは空閑地であったとみられる。

元円明院旧跡部分は過去に調査された実績のないことから、地下遺構の残存状況に関する資料を得る目的で、また保存管理計画に必要な資料を得る目的で確認調査を実施した。確認調査は、携帯電話基地局の予定部分に3箇所の試掘調査区を設定して行った。調査面積は59.86㎡であった。今回の調査の結果、南北方向及び東西方向の石垣を検出することができた。



写真14 1Tr 検出石垣1(南東から)

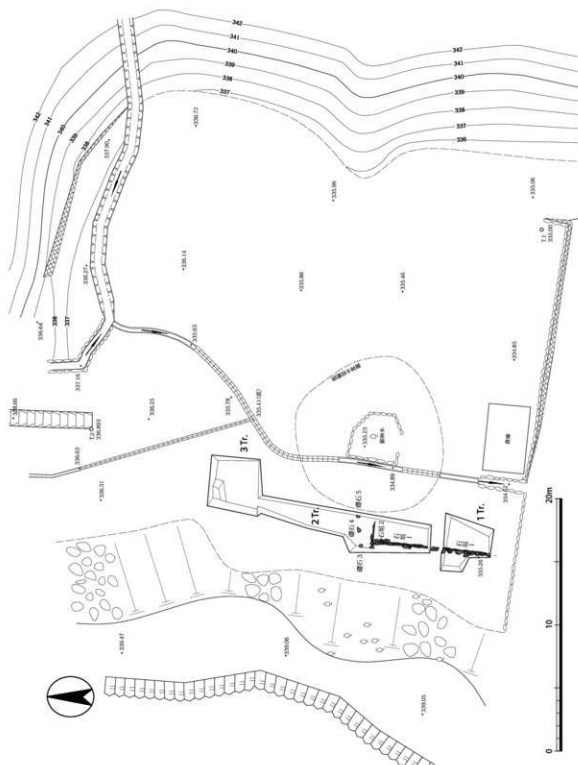


図 61 調査区位置図及び検出遺構図 (1 : 300)

2 層序と遺構

南北石垣 (石垣 1) 現地表直下で 1 Tr. 南端から 2 Tr. の南 3 分の 1 の範囲、延長約 9.2 m にわたって検出した東面する石垣である。長径 30cm 前後の自然石を野面積みにしており、3 段分 (高さ約 0.75 m) を確認することができた。この石垣の北端部において、平坦面を上に向けた石に半分載る形で石垣最下段の石が積まれていること (3 石分) も確認した。後述する東西石

垣との接合部付近では、平坦部を上に向けた石が基底石になる可能性がある。石垣の総段数、全高は不明である。また、1 Tr. の石垣後方の調査により、明確に裏込めと呼べるものではなく、小角礫混じりの山土が石垣の後方に充填されていたこともわかった。石垣を構築する段階で発生した土砂をそのまま使った可能性が高い。

東西石垣（石垣2） 2トレンチの南端から4.5m北側で検出された南面する石垣で、東西両端は調査区外に伸びる。この石垣の検出長は2.5m、検出高は0.6mである。東西石垣の南面に南北石垣が接合していることから、東西石垣が南北石垣に先行して施工されたことがわかる。東西石垣の北側（上面）約1mの部分で、石垣と並行する礎石3個を検出した。柱間は1.10～1.25mで、単列であることから石垣上に設けられた塼であろうか。控え柱に伴う柱穴等が認められないことから、柵状のものではなく土塼の芯柱である可能性が高い。

整地層 建設予定地の最北部に設定した3トレンチの北西隅で下層遺構を確認する目的で断



写真 15 2Tr. 検出石垣（南東から）



写真 16 石垣1・2接合部分（東から）

ち割り調査を行った。その結果、この平坦面の成立状況を確認することができた。KBM－142cmで中世後半の整地層（にぶい黄褐色泥砂層）、KBM－152cmでも中世後期の整地層（にぶい褐色泥砂）を確認した。KBM－200cm付近まで掘削したものの、この整地層が続いており、地山は認められなかった。

一方、建設予定地の南端部では西側崖面に近い1 Tr. での断ち割り結果から、現表土下6cm（KBM－44cm）で南北石垣の裏込めであるにぶい黄褐色砂礫層、現地表下146cm（KBM－90cm）で黄褐色泥砂の地山に達することがわかった。このことから、石垣1は1 Tr. 付近では最低でも4段以上あることがわかる。

3 遺物（図63）

石垣埋没土遺物 2 Tr. の石垣が埋没する過程で堆積した土砂中から出土した遺物である。土師器皿1, 2, 焼締陶器3を図化することができた。土師器皿の特徴は、下記の3 Tr. ④層で出土する遺物と共通する特徴をもつ。また、焼締陶器は口縁部の形状から同じく京都X期古段階（16世紀前期）前後のものと考えられる。

整地層出土遺物 3 Tr. の④層から出土した

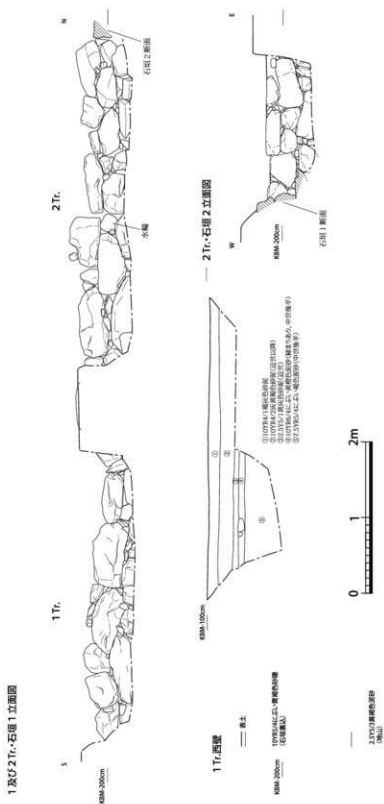


図 62 石組溝・散石遺構平面図・断面図 (1 : 50)

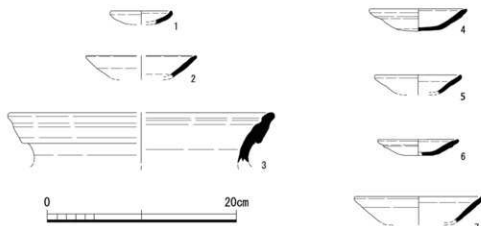


図 63 出土土器・瓦実測図（1：4）

4, 5 及び⑤層から出土した 6, 7 は、いずれも京都 X 期古段階（16 世紀前期）に属する土師器皿と考えられる。いずれも口縁端部の内側が内傾する端面化が進んでいる³¹。

4 まとめ

今回の調査において、中世後期頃に構築されたと考えられる野面積みの石垣を 2 つ検出した。東西石垣が古く、南北の石垣が続いて施工されている。今回検出した石垣のある平坦地後方及び東西両端には各所で石垣が残っており、一連のものとして築造された可能性もある。築造時期は石垣後方の平坦面の整地層に 16 世紀前期の遺物が含まれること、石垣が埋没する過程で埋まった遺物の中にも同様の時期のものが含まれることから、戦国時代後半から織豊期以前に築かれた可能性が高く、城郭史上の石垣を語る上でも貴重な資料である。

一方、調査区北半は近世以前の厚い整地層を検出した。石垣は上醍醐寺の塔頭である円明院の存在を確認する意味で重要である。調査区北半の整地層も円明院築造にあたる整地層と考えられるが、建造物等の重要遺構は存在しない部分と考えられる。これら両者の調査結果から、南に開放された谷状地形を埋め立てて平坦地を造ったことがわかる。

なお、これらの石垣は、土嚢を用いて養生、埋め戻して保存した。携帯電話基地局の設置箇所についても、石垣検出箇所から最も離れた 3 Tr. 部分で中世後半の整地層を保護する形で設計が進んでいる。

（馬瀬 智光）

註

- 1) 山岸常人 「上醍醐寺総画図と上醍醐の院家の遺跡」『研究紀要』第 17 号（醍醐寺文化財研究所 1999 年）
- 2) 座主准三宮義演撰 『醍醐寺新要録』巻第五の上諸院部圓明坊篇を参照
- 3) 小森俊寛 「京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7～19 世紀—」（京都編集工房 2005 年）

III - 10 京都市指定史跡法界寺境内 No. 19

1 はじめに

史跡法界寺境内は、山科盆地の東南部、伏見区日野西大道町に所在する。山科盆地を南北に縦断し、京と奈良を結ぶ主要街道である旧奈良街道の東側に位置する。

法界寺の明確な創建時期は不明であるが、『中右記』寛治6年(1092)9月2日条に、「参向日野観音堂、清談於功德園梨坊、件日野、是故伊予三人入道所建立道場也。伝教大師自作給築師仏安置其中、是一家之大宝也、至観音堂故備中守建立」とあることや、『醍醐雑事記』(巻5)にも「日野本願資業三位始被建立件之寺之時」と記述されていることから、浄土教の流行に則って、藤原北家内麻呂流から出た日野資業によって創建された可能性が高い。またその創建時期は、『公卿補任』永承6年(1051)の非参議藤原資業の項に、「二月十六日出家、隠居日野山荘、延久二年八月廿四日薨」とあることから、日野山荘に資業の隠居した永承6年頃、つまり11世紀中頃と考えられる。

平安時代後期には、境内に薬師堂、阿弥陀堂、観音堂、五大堂、山門、僧坊、弥勒堂、日野新堂(新阿弥陀堂)、塔などを有していたが、境内域の縮小や諸堂の荒廃を経て、近世の『都名所図会』では、本堂(阿弥陀堂)と本堂北東に取り付く庫裡、鐘樓、草庵風建物、弁天堂などが残るのみとなっていた。現在は鎌倉前期再建の国宝阿弥陀堂、奈良県の伝燈寺から明治37年に移築された重要文化財薬師堂が残り、境内の景観も江戸時代以降大きな改変を受けていないことから、平成11年4月1日に京都市指定史跡となっている。

今回、この史跡内において、庫裡の増築及び緊急時の防災車両の進入路の新造を目指した現状変更申請が提出されたことから、地下遺構の状況を確認する目的で平成22年2月3日に試掘調査を行った。調査では、境内西北部に位置する防災用貯水槽の北側及び東側に2箇所の調査区を設定した。調査面積は14㎡である。調査の結果、境内西北部の造成過程が明らかになった。



図64 調査位置図(1:5,000)

2 層序と遺構

1T土層 府道日野薬師線の東側に面した土塀北端部から防災用貯水槽の北側部分に沿って設定された長さ12.8mのトレンチの土層観察を行った。この観察の結果、現地表面（KBM + 156cm～121cm）から厚さ約80センチの部分は現代盛土（①層）であることがわかった。この盛土の下位、土塀東端から約7m付近から東側では、KBM + 80cm～58cmまで、焼土、炭、染付片を含む暗灰褐色泥砂層（②層）が認められる。この層からガラス瓶の底部が出土したことから、近代以降の廃棄物層と考えられる。この廃棄物層の下位は、土師器小片や陶器片を含む淡褐灰色泥砂（④層）がKBM + 30cmまでほぼ水平に堆積している。さらにこの層の下位にある

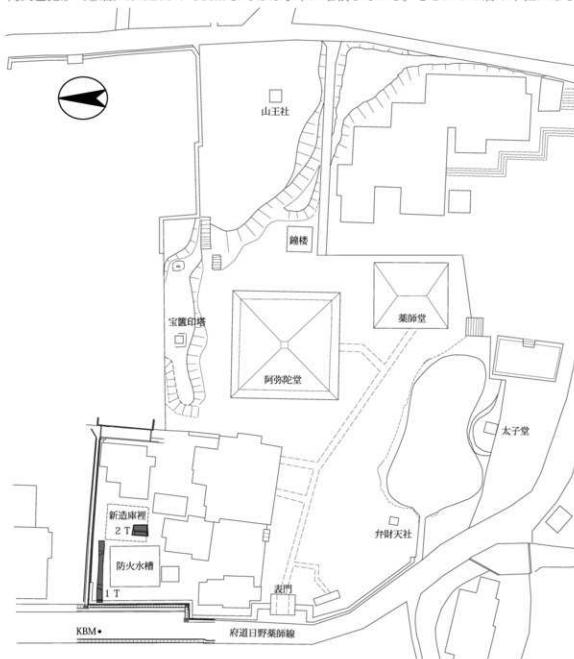


図65 調査区位置図(1:800)

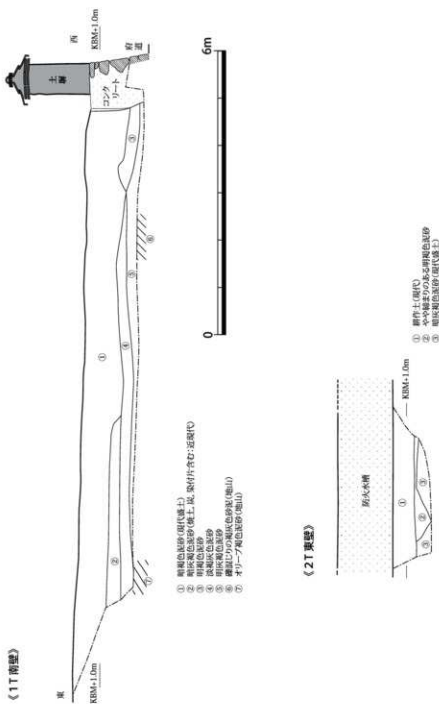


図 66 調査区土層断面図 (1 : 80)

明灰褐色泥砂層 (⑤層) は、西下りで厚く堆積し、褐色系の地山 (⑥層及び⑦層) は調査区東端で $KBM + 30cm$ 、西端付近で $KBM \pm 0cm$ でそれぞれ検出された。

土塙及び石垣 府道東沿いにある土塙の基礎でもある石垣は、道路面からの高さが 125cm であり、自然石を 5 段から 6 段積み上げて造られている。石垣石の後方は裏込めの栗石及びコンクリートであること、及び現代盛土である①層を切りこんで造られていることが判明した。土塙は、日干しレンガを積み上げ、表面漆喰塗で、屋根は万十軒瓦と棧瓦で葺かれている。



写真 17 1Tr 掘削状況（東から）



写真 18 1Tr 西端及び土塀断面（北から）

2T土層 庫裡増築部分に設定した2トレンチでは、現代の耕作土が現地表面（KBM + 129cm）から KBM + 84cm まで堆積し、その下層、KBM + 47cm まで暗灰褐色泥砂層と明灰褐色泥砂層が堆積していることを確認した。いずれも現代盛土であった。居宅部分の掘削深度はこの現代盛土内に取まることから、これ以上の掘削は実施しなかった。

3 出土遺物

土師器片、陶磁器片、染付片等を検出したが、いずれも小片であり、図化できるものはなかった。

4 まとめ

今回の試掘調査の結果、大きく二つのことが判明した。一つ目の成果は、防災用貯水槽の北側及び東側の耕作地は、江戸時代から近代に 40cm 程度盛土された後、現代になってから 75 ～ 80cm の厚さで大規模に盛土されていることがわかった点である。現代の大規模な造成の契機となったのは、敷地西側を南北に通る府道日野薬師線の拡張及び防災用貯水槽の施工であろう。二つ目の成果は第一の成果とも関連するが、敷地西端の土塀が戦後、現在の位置に移築されたことが判明した点である。敷地西側の土塀は総門西端から約 18 m の所で約 3.1 m 北側に後退している。このことと、当該築地塀が現代に構築されたことは関連しており、府道拡幅時に法界寺の南を限る築地塀の一部が解体撤去され、現在の位置にセットバックして再現されたと考えられる。

（馬瀬 智光）

参考文献

玉置豊次郎・坪井利弘、『日本の瓦屋根』（理工学社 1976 年）

京都植史跡研究会『法界寺調査報告書』1999 年

III-11 鳥羽離宮跡1 No.20

1 はじめに

調査地は、伏見区竹田真幡木町内にあり、名神高速道路と京都高速が交差する南東に所在する。ここに共同住宅が計画され、鳥羽離宮跡に該当していることから、調査を実施したものである。

周辺の調査では、鳥羽離宮の中心部から外れるため、当該期の遺構を確認した事例は少ないが、弥生時代から飛鳥時代の集落跡である鳥羽遺跡に関わる遺構、遺物が、京都高速建設・油小路延伸工事に伴う発掘調査（35・71・145・149次）などで確認されている。中でも、71次調査では、弥生時代中期中頃～後半の溝、方形周溝墓、土坑が確認され、溝からは多量の土器と共に、石製品（石斧、石剣、石包丁、石錘、砥石等）、木製品（石斧の柄、鍬、杵、弓等）が豊富に出土している¹⁾。近年では、調査地西側の152次調査において、弥生時代中期後半の井戸²⁾、柱穴、土坑を確認し、多くの遺物の出土を見ている³⁾。

周辺の環境として、調査地の北東から南西を流れる鴨川は、近世に付け替えられた姿であり、以前は東から南約0.5kmのあたりを流れていた。調査地周辺は、この旧鴨川の影響を強く受ける場所に位置しており、北東から南西にかけての自然堤防による微高地と、低湿地が混在した状況であったことが窺える。微高地は、黄褐色シルト層を基盤としており、鳥羽離宮期以前の遺構は、シルト層上面にて成立していることが周辺の調査からも確認されている。



図 67 調査位置図 (1:5,000)

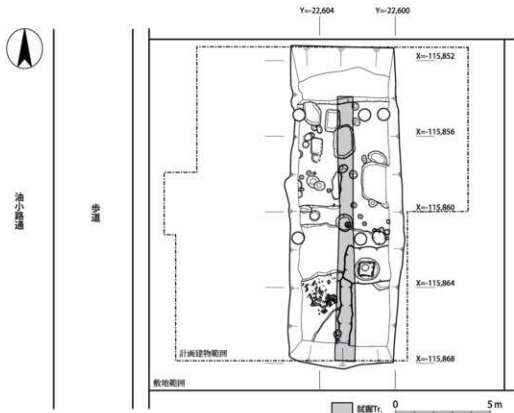


図 68 調査区配置図 (1 : 200)

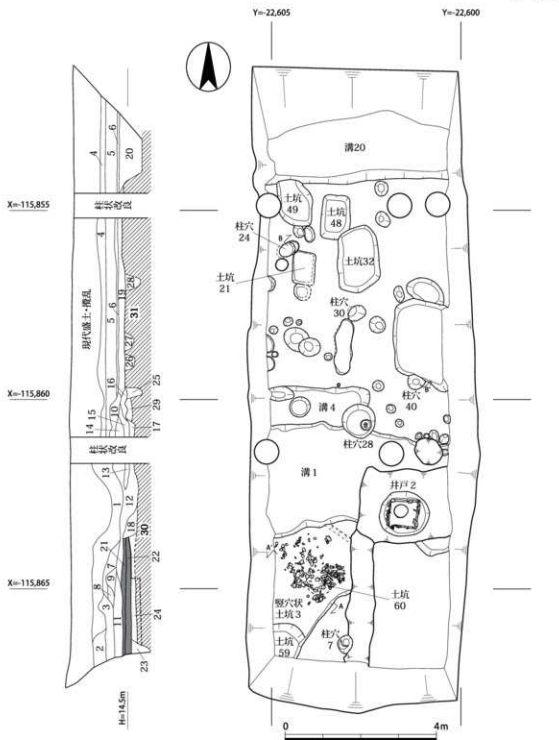


写真 19 調査区全景 (北東から)

調査は、鳥羽離宮期の遺構の有無と、弥生時代の遺構の広がりを確認することを目的として平成 22 年 1 月 13 日に実施した。その結果、弥生土器が集中する土坑が認められ、鳥羽離宮期以前の遺構面である明黄褐色シルト層が広がることから、調査区を広げて遺構の広がり、性格を把握することに務めた。調査の延長は、1 月 18～22 日に実施、面積は 90 m²である。

2 層序と遺構

層序 (図 69) GL-0.7m まで現代盛土、以下、中世までの耕作土が続き、-1.2m にて包含層、-1.4m (標高 14.6m) にて明黄褐色シルト (31 層) の基盤層となる。弥生時代の遺構は、基盤層上面にて成立している。シルト層は調査区北半のみに認められ、南半では灰色砂泥層 (30 層) の上に堆積



- | | |
|--|--|
| <p>1 現代溝</p> <p>2 近現代耕作土</p> <p>3 床土</p> <p>4 近現代耕作土</p> <p>5 7.5GY6/1 緑灰色シルト【近世耕作土】</p> <p>6 7.5GY6/1 緑灰色砂泥(径5cm程度の礫中量含む)</p> <p>7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
【近世包含層】</p> <p>8 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘砂シルト混じり【罍】</p> <p>9 5C5/1 緑灰色シルト【罍】</p> <p>10 2.5Y5/1 黄灰色シルト【罍】</p> <p>11 2.5GY6/1 オリーブ灰色砂泥【近世耕作土】</p> <p>12 5G2/1 緑灰色シルト(ラミナあり)</p> <p>13 10G7/1 明緑灰色細砂(ラミナあり)</p> <p>14 N5/0 灰色シルト</p> <p>15 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト</p> | <p>16 N4/1 暗オリーブ灰色シルト</p> <p>17 N4/1 暗オリーブ灰色シルト 【溝1】</p> <p>18 10GY6/1 緑灰色シルト</p> <p>19 2.5Y4/1 黄灰色シルト【中世包含層】</p> <p>20 上層2.5Y5/1 黄灰色シルト
下層10GY7/1 明緑灰色シルト</p> <p>21 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト(表面Mg多い) 【窠穴状土坑3】</p> <p>22 N3/0 暗灰色粘土</p> <p>23 10Y3/1 オリーブ黒色砂泥【土坑59】</p> <p>24 N4/0 灰色シルト砂粘混じり【包含層】</p> <p>25 N3/0 暗灰色シルト【土坑5】</p> <p>26 7.5Y5/1 灰色シルト【ピット】</p> <p>27 7.5Y5/1 灰色シルト【ピット】</p> <p>28 7.5Y5/1 灰色シルト【ピット】</p> <p>29 5Y3/2 オリーブ黒色シルト【溝4】</p> <p>30 5Y4/1 灰色砂泥【基盤層】</p> <p>31 10YR6/6 明黄褐色シルト【基盤層】</p> |
|--|--|

図 69 調査区平面・西壁断面図 (1 : 100)

する灰色シルト砂粒混じり層（包含層，24層）上面が遺構面となる。

遺構（図69） 確認した遺構は、弥生時代の土坑、溝、柱穴列、ピット、平安～鎌倉時代の溝、井戸、ピット、中世から現代に至る流路等に及ぶが、最も活発な土地利用状況を示す時期は、弥生時代中期中頃である。

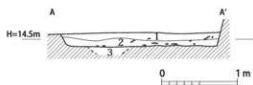
1) 弥生時代

竪穴状土坑3（図70・巻頭カラー写真2） 調査区南西隅で確認した方形土坑である。遺構の形状から竪穴住居の可能性を考えたが、壁溝や明確な主柱穴もなく、時期的に方形竪穴住居の事例が少ないなど、断定できる要素にかけるため、土坑として取り扱う。

北に対して約40°東に振る。試掘トレンチ、溝1に削平されているが、2辺の一部が残る。一辺3×2.5m以上、深さ0.25m。底は平坦で、炭化物が薄く堆積する。埋土は上層がオリブ黒色シルト、下層が暗灰色泥土で、多量の遺物が出土しているが、遺物は底面直上に集中する。時期は中期中葉後半に取まるものである。

底部壁面沿いに、土坑59、底面には土坑60を伴う。土坑59は、楕円形を呈し、径0.7m以上、深さ0.5m。土坑60は、円形を呈し、直径0.6m。時間の制約があり掘削出来なかったが、竪穴住居であった場合、位置的に主柱穴の一つとなる可能性がある。

土坑群 調査区北半には、土坑が点在する。土坑32は、楕円形を呈し、南北1.7m、東西1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂泥で、中期中頃の高杯、水指形土器が出土している。土坑48は、方形を呈し、南北1.15m、東西0.8m、深さ0.3m。埋土は、上層が灰黄褐色砂泥、下層がふい黄色砂泥である。土坑49は、不整形で南北1.2m以上、東西0.8m、深さ0.2mで、埋土は黒褐色砂泥である。土坑32、48、49は埋土に多量の焼土、炭化物を含んでいることが特徴である。土坑21は、方形を呈し、南北0.85m、東西0.6m、深さ0.15m。埋土は灰黄褐色砂泥で、中期中葉の高杯が出土している。



- 1 7.5Y3/1 オリブ黒色シルト(表面Mg強い)
- 2 N3/0 暗灰色泥土
- 3 N6/0 灰色極細砂(土器の極細片少量、炭化物多量に混じる)[土坑60]

図70 竪穴状土坑3断面図(1:50)

柱穴列（図71） 柱穴24・30・40からなる。各柱穴の形状は不整円形で、規模は直径0.4m、深さ0.6mと共通し、柱間は2.5m。規模から建物の可能性もあるが、調査区内に対になるものは確認できていない。

柱穴7 調査区南端にある柱穴である。形

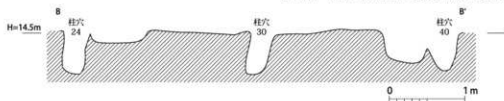


図71 柱穴列実測図(1:50)

状は不整円形を呈し、直径0.4～0.5m、深さ0.5m。柱は抜き取られており、埋土には、大量の炭化物と共に、同一個体と思われる土器が含まれている。

また、湧水のため図化し得なかったが、試掘トレンチ内にて炭化物を多量に含むピットを確認しており、埋土からは中期後葉の器台が出土している。遺構の形状、埋土、遺物の出土状況から柱穴7と対になる可能性も考えられ、年代を推定する手懸かりになるといえる。

2) 平安時代後期以降

井戸2 (写真20) 調査区中央にて確認した井戸である。溝1に切られ、上部は攪乱による破壊を受ける。掘形は、直径1.2mの円形を呈し、井戸枠は、一辺0.8mの方形縦板横枠組である。底には礫を敷き詰め、水溜として、北寄りに2段の曲物を設ける。調査中も湧水が激しく、常にポンプアップを必要とした。出土遺物は、平安時代後期の土師器皿、鎌倉時代の瓦器椀等が出土している。

柱穴28 (写真21) 調査区中央にて確認した柱穴である。掘形の形状は円形で、直径0.9m、深さ0.4m。掘形の東端に直径0.3mの柱痕跡が認められ、底には礎板が残る。

溝20 調査区北端を東西に流れる溝である。幅1.8m以上で、北肩は調査区外に広がる。深さは0.6mで、断面形状は逆台形を呈する。遺物は極細片のみで時代を特定できないが、規模、方位、形状から、鳥羽離宮期の区画溝の可能性を残しておきたい。

溝1 調査区中央を東西に流れる溝である。幅2.5～3.0m、深さ1.1m。断面形状は、掃鉢状を呈す。断面観察からは、常に水が流れていたことを示しており、繰り返し護岸が施されていることから、長く基幹水路として機能していたことがわかる。大正11年測量の都市計画図にも水路として認められる。埋土からは、弥生土器を含め、平安時代から現代に至るまでの遺物が出土しているが、井戸2との新旧関係から中世以降に成立したものと思われる。



写真20 井戸2 (南東から)



写真21 柱穴28 (西から)

3 遺物

出土した遺物の種類には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、国産施釉陶器、石製品、木製品などがある

が、弥生時代の遺物が大半を占める。特に、竪穴状土坑3からは、コンテナ15箱分の遺物が出土している。掲載した土器・石器の概要は、表4・5に示した。

1) 弥生土器

竪穴状土坑3出土遺物(図72~74, 写真23~25・27~29) 底面付近から多くの遺物が出土しているが、出土状況から、埋め戻す際に一括して廃棄された土器群と考えられ、中期中葉後半に属するものが大半である。

1~11は、甕である。1・2は、「く」の字形の口縁を持ち、端部に刻目を施す。口縁部内面には、横ハケ、胴部外面縦ハケ。3も「く」の字形の口縁を持つが、口縁部は横ナデ。4・5は、明瞭な受け口状の口縁を持ち、やや新しい様相を示す。4は、上端部に、5は、両端部に刻目を持つ。6は、外側に広がる口縁端部を上方に強くつまみ上げて、受け口状の口縁を呈する。外面には煤が付着する。7~10は、はね上げられた口縁を持つ。7・8・10は、口縁部内面を横ハケで仕上げた後、胴部外面上半にハケ状工具による直線文を施す。7・8には、内面頸部下半に指オサエが認められる。9は、口縁部内面を横ハケ後ナデ消し。11は、灰白色の胎土を持つ在地化した近江系の甕で、ほぼ完形である。頸部に対面二個一対の穿孔を外面から施す。調整は、外面から口縁部内面を横ハケ、端部をややつまみ上げる。内面は、頸~胴部最大径までナデ、胴部下半は粗いハケ、底面をナデで仕上げる。外面は、頸部下半に列点文を施し、胴部下半を粗いハケ、上半を左上がりハケの後、ハケ状工具による直線文を2帯施す。

12~22は、甕又は壺の底部である。12は、底部を穿孔し、内外面共に板ナデ。13は、外面板ナデか。14・15は、内面底部をナデ、底部~胴部にかけて縦ハケで仕上げ、14は外面底面にハケ、15はナデを施す。16は、底面を除く内外面に縦ハケ。17は、厚い底部を持つ。粘土接合痕が明瞭に残る。18は、形状、調整方法から壺の可能性が高い。内面底部に横ハケ、胴部下半を縦ハケ、胴部外面に縦ハケ。19は、内面を縦ケズリ、外面を縦ハケで仕上げる。底面にもハケ目痕が残る。20は、厚い底部を持ち、内面に強い指オサエが見られ、外面は横ナデ。胴部は縦ハケ。外面胴部は縦ケズリ後ヘラミガキで仕上げる。21は、厚い底部を持ち、外面底面には木の葉痕が残る。内面縦ハケ、外面縦ハケ後胴部下半をナデ消し。22は、口縁が受け口状を呈する甕の底部と思われる。内面底部を粗いハケ、下半を縦ハケ、外面左上がりハケ後、一部横ヘラミガキ。底面は、接地面を除いて横ナデ。

23は、台付きの鉢であるが、脚が付かない可能性も考えられる。口縁部を外下方に折り曲げ、端部上端を横ナデ、下端を縦方向の櫛描文を施す。内面は口縁部から最大径にかけて横ナデ。外面は底部下半を縦ヘラミガキ、最大径付近を横ヘラミガキ、上半に櫛描直線文3帯。24は、摂津系の把手付き台付鉢である。脚部上半を縦ケズリ、下半は横板ナデが見られる。25・26は鉢である。口縁部は内外面共に横ナデで、端部を横ナデした結果、やや肥厚する。内面上半を横ハケ、外面縦ハケで仕上げる。27は大型の鉢である。口縁端部の両端に刻目を施す。内面口縁~頸部は横ハケ、胴部縦ハケ後上半を板ナデ消し。外面は胴部縦ハケ後、最大径付近横ヘラミガキ、

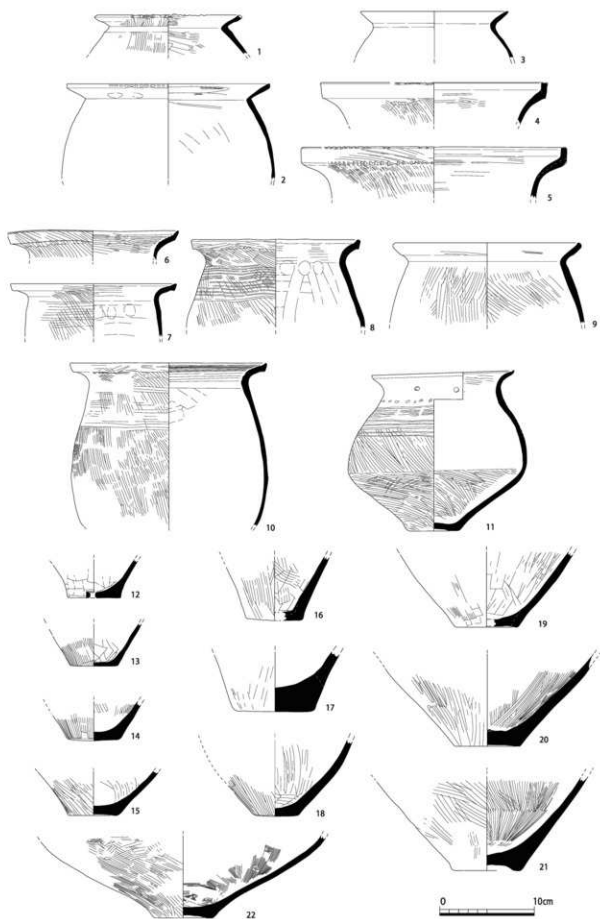


图 72 竖穴状土坑 3 出土土器実測图 1 (1 : 4)

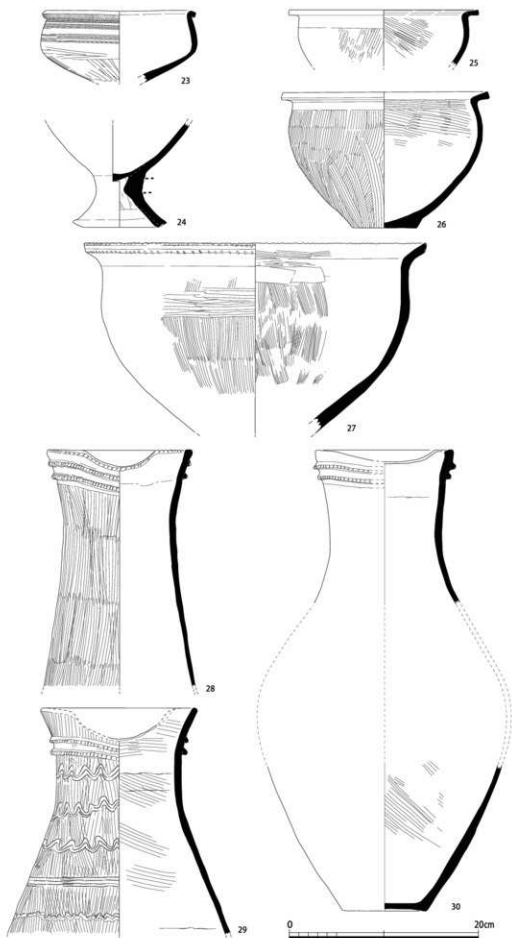


图73 竖穴状土坑3出土土器实测图2 (1:4)

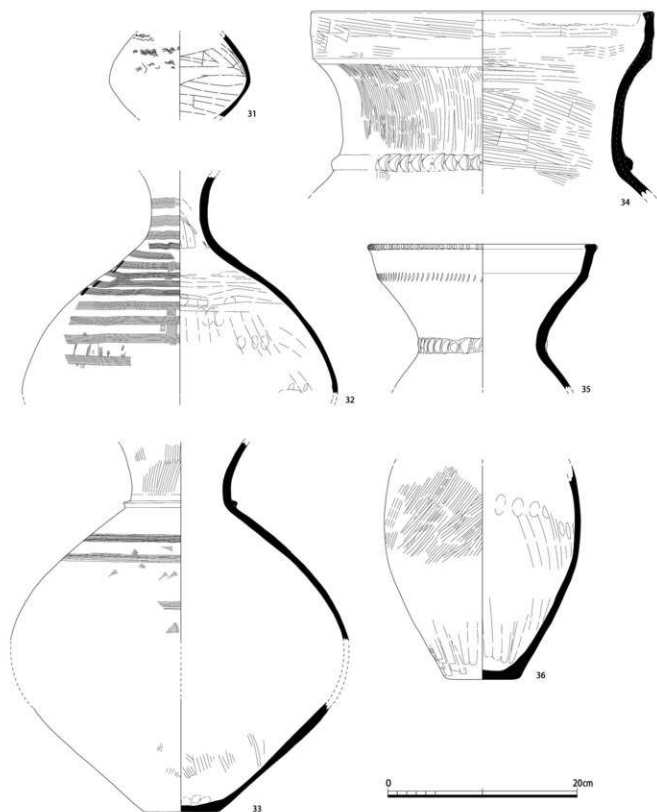


図74 竪穴状土坑3出土土器実測図3 (1:4)

頸部下を一部板ナデ消しを施す。

28～30は摂津系の水差形土器で、口縁部直下に刻目を持つ2帯の突帯文を貼り付け、28・29は口縁端部にも刻目を施す。28は、内面口縁～頸部に板ナデ、胴部は縦ナデ。外面縦ハケ。29は、内面横ハケ。外面は、縦ハケ後、突帯文下にヘラ描き波状文3帯、ヘラ描き直線文1帯、

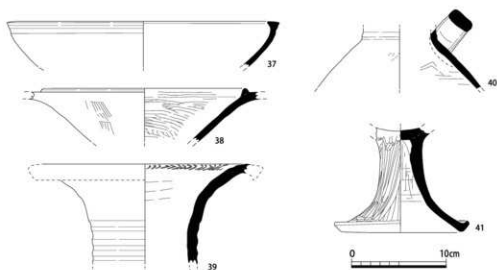


図 75 出土土器実測図 (1:4)

粗いヘラ描き波状文を施す。30は、口縁部直下に摩耗が進むが、外面は縦ハケ後ナデ消し。

31～36は、壺である。31は、小型広口壺の胴部と思われる。内面横板ナデ、外面櫛描波状文を施す。32は、細頸壺である。内面頸部を縦ケズリと縦ナデ、胴部上半横ナデ、下半縦ナデ。外面は全体を縦ハケ後、ナデ消し、頸部から胴部にかけては、櫛描直線文の後、5方向に縦方向の櫛描文を施す。33は、大型の広口壺である。内面底部指オサエ、下半は縦ハケ。外面頸部に貼り付け突帯文を施す。口縁部縦ハケ、胴部縦ハケ後ナデ消し。上半に櫛描直線文3帯。各直線文間に櫛描扇形文が認められる。34・35は大型の有段口縁壺である。34は、内面横ハケ、口縁部は端部を横ナデ、外面横ハケ後、下半をナデ消す。段直下に弱い沈線が認められる。頸部は縦ハケが見られ、指頭圧痕突帯を貼り付ける。35は、口縁端部外面と有段部に刻目を施し、頸部に指頭圧痕突帯文を施す。36は、内面縦ハケ後、ナデ消し。胴部上半には指オサエが認められる。外面胴部下半に板ナデ、最大径付近左下がりハケ後、上半に櫛描波状文が残る。

その他の出土土器(図75・写真26) 37は、土坑49から出土した台付鉢である。外面口縁部直下に凹線文を一条施す。中期後葉に属する。38は、土坑21から出土した高杯である。水平口縁を持つ。内面の突帯は断面が三角形を呈する。中期中頃～後半に属する。39は、試掘トレンチで確認したピットから出土した器台、又は広口壺である。口縁部内面に綾形状の櫛描刺突文、頸部外面に凹線文4帯以上が見られる。中期後半。40は、水指形土器である。摩耗が進むが、外面頸部直下に刺突文が認められる。41は高杯脚部である。脚部内面は横ケズリ、外面は縦ヘラミガキ。40・41は土坑32から出土した。

2) 石器(図76・77, 写真22)

石1は、片刃石斧で、石材は泥質ホルンフェルスである。石2は、柱状片刃石斧で、刃部には刃こぼれが認められる。石3は、砥石である。3面に研ぎ面が残る。石4は、有茎式の石鎌である。石5は、磨製石剣を転用した砥石と思われる。側面を主に研ぎ面として使用したと思われ、やや凹む。石6は、剥離した粘板岩片の両端に使用痕が認められる。石7は、二次加工のある剥片である。

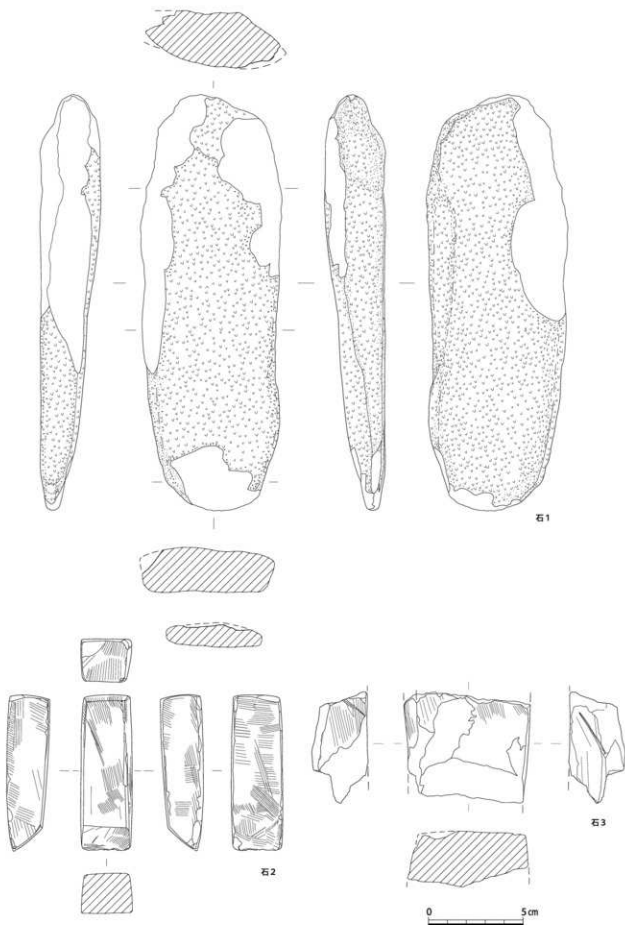


图 76 出土石器尖測図 1 (1 : 2)

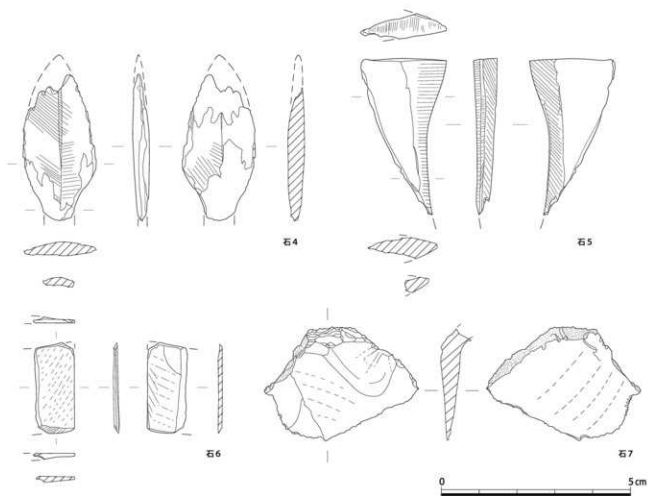


図77 出土石器実測図2 (1:1)

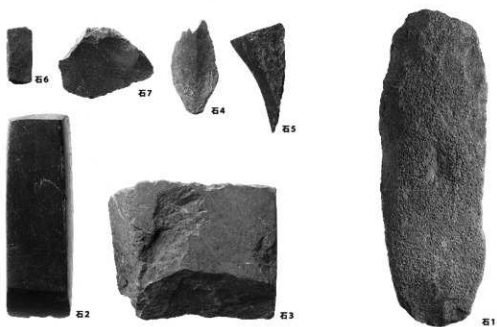


写真22 石器

表4 遺物観察表

掲載順	層位	遺物	法量(cm)	残存率	色調	土器の特徴(調整・文様)
1	土坑3下層	甕	残高4.1 口径15.0	口縁部 1/7	内:2.5H/2灰白~10YR7/4Cに近い黄褐色 外:10YR7/4Cに近い黄褐色 裾:2.5H/2灰白~10YR7/4Cに近い黄褐色	内:口縁~胴部にかけて横ハケ。外:口縁上部に斜目。胴~胴部に かけて縦ハケ。胴部は平直し。口縁部は下から縦ハケ。
2	土坑3下層	甕	残高10.1 口径21.5 胴径22.5	口縁部 1/8	内:K2/黄褐色よりやや浅め 外:10YR3/2灰黄褐色~K2/浅褐色 裾:K2/黄褐色よりやや浅め	内:胴部~胴部最大径にかけて横ハケ。胴部は横ハケ。胴部により 不明瞭。外:口縁部に斜目。口縁部は横ハケ。胴部にはハコ目直 筋。調整が著しい。
3	土坑3下層	甕	残高5.0 口径15.5	口縁部 1/4	内:5YR1/灰白 外:10YR3/2灰白~5Y7/4Cに近い黄褐色 裾:5YR1/灰白	内:口縁部横ハケ。胴部は横ハケ。外:胴部により不明。
4	土坑3底面	甕	残高4.4 口径24.6	口縁部 1/3	内:10YR6/3に近い黄褐色 外:10YR6/4Cに近い黄褐色~10YR5/3Cに近い黄褐色 裾:10YR7/3に近い黄褐色	内:口縁部横ハケ。外:口縁部部に斜目。口縁部は横ハケ。胴部は 右下がりハケ。口縁部附近のみ左上がりハケを露す。
5	土坑3底面	甕	残高5.5 口径27.6	口縁部 1/5	内:2.5H/2灰黄褐色 外:10YR3/2灰黄褐色~3/1黒褐色	内:口縁~胴部横ハケ。外:口縁上部部、下部部に斜目。口縁部や 左上がりハケ。胴部にかけては右下がりハケ。
6	土坑3下層	甕	残高3.2 口径18.1	口縁部 1/2	内:10YR6/3に近い黄褐色~2/2黒褐色 外:10YR3/2灰黄褐色~3/1黒褐色 裾:10YR6/3に近い黄褐色~2.5Y7/2灰黄褐色より暗	内:口縁~胴部横ハケ。外:口縁~胴部にかけては右下がりハケ。
7	土坑3下層	甕	残高5.6 口径17.4	口縁部 1/3	内:10YR8/2灰白~4/1黒灰色 外:1/黒灰色~3/1黒褐色 裾:3/1黒灰色	内:口縁~胴部にかけて横ハケ。胴部は横ハケ。外:口縁部は横ハ ケ。胴~胴部にかけては右下がりハケ。ハケ工具による直線。
8	土坑3下層	甕	残高9.4 口径17.4	口縁部 1/2	内:2.5H/2灰白 外:10YR3/2黒褐色~3/1黒褐色 裾:2.5H/2灰白	内:口縁部部横ハケ。口縁~胴部にかけて横ハケ。胴部は横ハ ケ。胴部と胴部の境に指す。外:口縁部は横ハケ。胴~ 胴部にかけては右下がりハケ。ハケ工具による直線(6条/1 部)。
9	土坑3底面	甕	残高8.5 口径19.6	口縁部 1/5	内:2.5H/1灰白~2.5Y3/1黒褐色 外:2.5Y7/2灰黄~5YR6/6暗色 裾:2.5Y3/1黒褐色	内:口縁部の横ハケ。胴部は横ハケ。胴部は横ハケ。外: 口縁部横ハケ。胴部は横ハケ。胴部は横ハケ。
10	土坑3下層	甕	残高17.4 口径20.6 胴径21.0	口縁部 3/4	内:2.5H/2灰白~3/1黒褐色 外:2.5H/2灰白~5/1黄灰色 裾:2.5H/1灰白	内:口縁~胴部にかけては横ハケ。胴部上半は横ハケ。以下、 調整が不明瞭。外:口縁部部横ハケ。以下、全体に横ハケ。胴 部~胴部上部にハコ目ハケによる直線。
11	土坑3下層	甕	残高17.1 口径15.0 最大径18.9 底径2.5	ほぼ完形	内:2.5Y7/2灰白 外:2.5Y7/2灰白 裾:2.5Y7/2灰白	内:口縁部部横ハケ。胴~胴部ナシ。胴部~胴部最大径まで粗 いハケ。胴部ナシ。胴部から胴部部に、二条一列の乳孔あり。 外:胴部上半は左上がりハケ。胴部下半は横ハケ。胴部は横ハケ。胴 部~胴部は粗い横ハケ。胴部はナシ。胴部はナシ。
12	土坑3下層	甕or甕	残高4.1 底径7.5	底部完形	内:2.5Y7/2灰黄 外:2.5Y7/2灰黄~2.5YR6/4暗色 裾:2.5Y7/2灰黄	内:縦ハケ。外:底面は粗い横ハケ。底面粗い縦ハケ。底面 穿孔。
13	土坑3上層	甕or甕	残高1.5 底径4.9 ~5.0	底部3/4	内:10YR7/6明黄褐色~10YR4/1黒灰色 外:5YR6/4Cに近い暗~10YR7/6明黄褐色 裾:10YR7/6明黄褐色~10YR4/1黒灰色	内:縦ハケナシもしくはハケ。外:底面無調整。底~胴部横ハケ。
14	土坑3底面	甕or甕	残高4.2 底径3.3	底部完形	内:K2/黒色 外:10YR3/3に近い黄褐色 裾:10YR9/1灰白色	内:底面横ハケ。胴部は粗い縦ハケ。外:底面には一定方向のハコ 目。胴部は下から横ハケ。
15	土坑3下層	甕or甕	残高4.6 底径3.5	底部完形	内:2.5Y1/黄灰色 外:2.5Y7/2灰黄~2/1黒色 裾:2.5Y1/黄灰色	内:底面横ハケ。胴部は横ハケ。外:底面横ハケ。底面無調整。底 面左上がりハケ。胴部は粗いハケ。
16	土坑3上層	甕?	残高6.8 底径4.4 ~5.0	底部3/4	内:K2/黒色(一部2.5YR6/6暗色) 外:10YR7/6明黄褐色(一部2.5Y1/黄灰色) 裾:2.5H/1灰白	内:縦ハケ。外:底面~胴部横ハケ。
17	土坑3下層	甕or甕	残高8.0 底径8.1 ~8.6	底部完形	内:2.5Y1/黄灰色 外:10YR8/2Cに近い黄褐色~2.5YR6/2灰黄褐色 裾:2.5H/1灰白~2.5Y1/黄灰色	内:縦ハケナシ。外:底面無調整。調整により不明。
18	土坑3下層	甕or甕	残高6.4 底径4.4 ~4.9	底部完形	内:2.5H/2灰白より上赤色がかる 外:2.5H/2灰白より上赤色がかる	内:底面は横ハケ。胴部に向かつて縦ハケ。外:底面無調整。底~ 胴部横ハケ。
19	土坑3下層	甕	残高4.0 底径6.4	底部3/4	内:10YR7/2に近い黄褐色~4/1黒灰色(底部) 外:10YR8/2灰黄褐色~4/1黒灰色(底部) 裾:10YR8/2灰黄褐色 一部2.5Y7/2灰黄褐色	内:底~胴部にかけて縦ハケナシ。外:底面には一部斜いハケ。調整 面はナシ。胴部横ハケ。
20	土坑3下層	甕or甕	残高9.8 底径7.0	底部完形	内:2.5Y7/2灰黄褐色より暗 外:10YR7/3に近い黄褐色~1.5YR7/4Cに近い黄褐色 裾:5YR1/灰白色	内:底面に粗い指す。調整面横ハケ。外:底面は横ハケ。胴~底 部にかけてはナシの縦、ヘタミナシ。
21	土坑3下層	甕or甕	残高10.0 底径6.9	底部完形	内:2.5H/2灰黄褐色 外:2.5H/2灰黄褐色。一部5YR6/4Cに近い黄褐色 裾:10YR7/3に近い黄褐色	内:底~胴部横ハケ。外:底面には木の葉状あり。調整面はナシ。 胴部附近に縦ハケナシ。胴部は横ハケ。
22	土坑3下層	甕	残高8.8 底径6.2	底部完形	内:5YR1/灰白~2.5Y3/1黒褐色 外:2.5H/2灰黄~3/1黒褐色 裾:2.5Y1/灰黄~3/1黒褐色	内:底面粗い横ハケ。胴部に向かつて横ハケ。外:底面横ハケ。底 面無調整。胴部上半は左上がりハケ。横ハケミナシ。
23	土坑3下層	付録鉢	残高7.6 口径14.4 胴径16.6	17/18	内:5YR6/6暗色 外:2.5H/2Cに近い黄褐色~2.5YR6/4Cに近い黄褐色 裾:2.5H/2灰白~10YR7/6明黄褐色	内:口縁部部~胴部最大径にかけて横ハケ。外:口縁上部部横ハケ。 口縁部は調整面式(7条/1cm)。胴部下半は横ハケミナシ。最大径 付近に横ヘタミナシ。上半に3本の帯形調整面(2条/1cm)。
24	土坑3下層	付録鉢	残高11.1 口径9.9	ほぼ完形	内:10YR8/2灰黄褐色 外:5YR7/2Cに近い黄褐色~10YR7/3Cに近い黄褐色 裾:10YR8/2灰黄褐色	内:口縁部は底面附近に一部ハケ痕のみ。調整面は不明瞭。胴部 上半は横ハケナシ。下半は横ハケナシ。外:胴部により不明。
25	土坑3下層	鉢	残高6.0 口径19.8	1/9	内:2.5H/1灰白 外:2.5H/2灰白 裾:K4/黒色	内:口縁部は横ハケ。胴部にかけては右下がりハケ。外:口縁部横ハ ケ。胴部左上がりハケ。胴部附近はナシ。
26	土坑3下層	鉢	高さ14.4 口径21.4 底径7.0	完形	内:2.5Y7/2灰黄褐色 外:2.5H/2灰黄褐色 裾:2.5YR3/2灰黄褐色	内:口縁部横ハケ。胴~胴部上半横ハケ。下半ナシ。外:口縁 部部横ハケ。胴部以下、縦ハケ後部のみナシ。
27	土坑3下層	鉢	残高20.2 口径36.0	1/5	内:2.5Y7/4黄褐色 外:10YR7/3に近い黄褐色 裾:2.5YR3/2灰黄褐色	内:口縁~胴部は横ハケ。胴部は下からの縦ハケ。一部ナシ。胴 部は横ハケナシ。外:口縁上部部と下部部に斜目。胴部一部横ハ ケ。調整面は、縦ハケと横ハケを露し。口縁部調整面附近は横ハケ。口縁 部はナシ。調整面ナシ。
28	土坑3下層	水笠形土器	残高25.0 口径15.2	1/2	内:10YR8/1灰白~10YR5/1黒褐色 外:10YR9/1灰白~10YR4/1黒褐色 裾:10YR8/1灰白	内:口縁~胴部は横ハケ。一部は斜目付直筋あり。胴部~胴部は横 ハケ。外:全体に縦ハケを露し。口縁部調整面附近は横ハケ。口縁 部に斜目。口縁部に斜目のある二重の帯付付突出。
29	土坑3下層	水笠形土器	残高24.0 口径16.0	1/2	内:2.5H/2灰白~2.5Y3/1黒褐色 外:2.5H/2灰白~2.5YR2/灰黄褐色 裾:2.5Y1/黄灰色	内:粗い横ハケをナシ。調整面ナシ。調整面は粗い。外:全体を横ハケ。 口縁部は斜目に調整面二重帯付付突出あり。胴部~胴部は二重の粗 い横ハケ直筋。横ハケ直筋を一本採り、横筋ハコ横筋を 直筋、ハケと同一致。

30	土坑3下層	水差形土器	残高 49.0 口径 14.6 底径 8.8	口縁部 1/4、底部 1/3	内:10YR6/3にふい黄褐色 外:10YR6/3にふい黄褐色~4/1褐色 断面:10YR7/1灰白色	内:口縁部線ナデ、胴部ナデ、外:口縁部線ナデ、口縁部以下は縦ハケ後ナデ消し、口縁部に斜目を通す二重突帯を施す。不明。
31	土坑3下層	広口 か	残高 8.9 口径 15.0	胴部1/2 部	内:2.5Y1/黄灰~2/1黒色 外:2.5Y2/灰白~8/4黄褐色 断面:2.5Y1/黄灰より灰白色がかかる	内:横線ナデ、外:ハケ後、胴部上部に磨き並波状文、摩滅により不明。
32	土坑3底面	細頸壺	残高 23.3 口径 33.5	胴部 2/3	内:2.5Y7/2灰褐色 外:2.5Y7/3~7/4黄褐色 断面:2.5Y7/2灰褐色	内:頸部線ナデナデ、頸~胴部上部は線ナデ、胴部最大径にかけて線ナデ、外:縦ハケ後、ナデ消し、磨き並波状文(9条/cm)の後、同原色で磨き並波を5方向に施す。
33	土坑3底面	広口 壺	残高 39.0 口径部 30.4 底径 8.0	胴部1/2 底部1/3	内:10YR4/1褐色 外:黒:10YR7/2にふい黄褐色	内:底部指サセ、胴部下半部ハケ、外:胴部に貼り付け突帯、胴部ハケ後、ナデ消し、胴部上部に、磨き並波状文(11条/1cm)を施す上、直線文を施す。断面は直線文を配す。土縁部線ハケ。
34	土坑3底面	有段口 鉢	残高 18.7 口径 36.0	口縁部 2/3	内:2.5Y7/2灰褐色~4/1黄褐色 外:2.5Y7/2灰褐色 断面:K3/0暗灰色	内:口縁部線は線ナデ、口縁部線ハケ後、狭くナデ消し、胴部線ハケ、外:口縁部線ハケ後、下半部を狭くナデ消し。有段部下一部が線が認められる。有段~胴部線ハケ、胴部には磨き並波状文を施す。不明。
35	土坑3下層	有段口 鉢	残高 15.4 口径 23.7	口縁部 1/3	内:2.5Y7/2黄~2.5YR6/4にふい褐色 外:2.5Y7/2灰黄~2.5YR6/6褐色 断面:10YR6/2灰白色	内:摩滅により不明。外:口縁部、有段部に斜目、胴部には指帯状突帯を施す。不明。
36	土坑3下層	壺	残高 23.6 口径 33.4 底径 7.0	1/2	内:10YR4/1褐色 外:2.5Y7/3にふい黄~2.5Y5/2暗灰黄褐色 断面:10YR7/1灰白~7/2にふい黄褐色	内:胴~頸部線ハケの後、ナデ消し、胴部上部に指サセ、外:底部指サセナデ、底~胴部にかけて線ナデ、最大径附近は左下がりハケ、胴部上部に磨き並波状文(単位不明)。
37	土坑49	台付鉢	残高 4.9 口径 29.0	口縁部 1/5	内:7.5YR6/3黄褐色 外:2.5Y7/2にふい黄褐色 断面:10YR7/2にふい黄褐色	内:線ナデ、外:口縁部線ナデ、下方は摩滅により不明。口縁部下に直線文一筋。
38	土坑21	高杯	残高 5.7 口径 (21.3)	杯部 1/9	内:7.5YR6/2灰白色 外:2.5Y5/4黄褐色 断面:7.5YR6/2灰白色	内:口縁~杯にかけて線ナデ、杯部細い縦ハケ、外:摩滅が著しいが縦ハケがみられる。
39	試掘トレンチ	鉢	残高 10.6 口径部 11.0 ~11.3	胴部 1/2	内:10YR6/3にふい黄褐色~2.5YR6/4にふい褐色 外:10YR6/3にふい黄褐色~10YR7/2にふい褐色 断面:10YR6/3にふい黄褐色~2.5YR6/2灰白色	内:口縁~胴部にかけて線ナデの後、線ナデ、口縁部には線ナデの磨き並波状文、外:胴部には直線4条以上。
40	土坑32	水差形土器	残高 6.0 口径部 8.2	胴部 1/2	内:2.5Y7/4にふい褐色 外:2.5Y7/4にふい褐色 断面:2.5Y7/1灰白色	内:縦ハケがわずかにみられる。外:胴部下に磨き並波状文。
41	土坑32	高杯	残高 11.1 口径部 12.9	杯部 2/3	内:K2/0褐色 外:2.5Y7/2褐色 断面:7.5YR6/4にふい褐色	内:胴部線は横ナデ、外:胴部線はヘラミガキ後、横ヘラミガキ。

表5 石器観察表

No	遺構・層位	種類	石材	法量 (cm・g)				備考
				長さ	厚さ	幅	重量	
石1	土坑3下層	片刃石斧	原産ホルンフェルス	27.0	3.2	7.4	642.0	
石2	溝1	柱状片刃石斧	原産片岩	8.2	2.2	2.7	106.0	
石3	土坑3下層	砥石	頁岩~粘板岩	5.8	3.0	6.7	127.0	
石4	土坑3上層	磨製石鏃	粘板岩	3.9	4.0	1.9	2.7	有基式
石5	土坑3上層	砥石	粘板岩	4.15	0.65	2.25	3.95	石剣を転用か
石6	土坑3	磨製石鏃	粘板岩	1.1	1.7	約2.5	0.3	刃部に使用痕あり
石7	土坑32	二次加工のある鉋片	サヌカイ	2.95	4.1	0.55	4.8	

4 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期中葉の遺構が濃厚に分布することを確認した。現在の遺跡地図では、鳥羽遺跡に含まれておらず、遺跡範囲を見直す契機といえる。ここでは、出土した遺物の概要と周辺の調査成果を踏まえた、鳥羽遺跡の立地と特徴を概観してまとめたい。

竪穴状土坑3から出土した遺物は、廃絶時に埋め戻す際に廃棄された弥生時代中期中葉の後半に属する一括資料である。土器の種類としては、「く」の字状口縁、受け口状口縁、広口口縁の壺、有段口縁、広口、細頸状の壺、鉢、水差形土器等を確認している。傾向としては、壺、壺の種類が多様であり、受け口口縁を持つ壺など、山城地域の特徴といえる近江地域の影響を色濃く受けている。さらに、水差形土器などの摂津系の影響も見受けられ、淀川水系に属する鳥羽遺跡の立地が反映されているといえよう。

周辺の調査成果からは、前期に属する遺物が確認されており³⁾、集落の成立時期を推定できるが、遺構は確認されていない。その後、中期中葉から後期にかけての遺物は多く認められるが、流路、溝からの出土が多く、未だ明確な居住域は確認されていない。近辺の調査成果からは、北東から南西方向に向けての湿地状堆積（非常に流れの緩やかな流路？）が存在し（図78⁴⁾）、その間に帯状に存在する僅かな微高地を選んで生活域が分布しているものと思われ、確認される各遺

構、遺物についても、比較的短い期間に集中することが挙げられる。安定した微高地が少なく、状況に応じて居住域を移動していたと考えるのが妥当であろう。今回の調査においても、遺構が集中する明黄褐色シルト層の直下に、湿地状堆積に由来する灰色砂泥層が厚く堆積する。竪穴状土坑3が成立する灰色砂泥層にも、遺物が含まれており、中期中頃のある時期に水位に変動があり、居住するに適した環境に至ったものと考えられよう。今後、周辺の調査で弥生時代における鳥羽遺跡の実態が明らかになることを期待する。

最後に、調査から測量、写真撮影に至るまで（財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。また、土地所有者からはひとかたならぬ御協力を頂いた。記して感謝したい。

（西森 正晃）

註

- 1) 木下保明・本 弥八郎・長宗繁一「鳥羽離宮跡第71次調査」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 2) 平田 泰「鳥羽離宮跡（152次）」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-5（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 3) 1)に同じ
- 4) 本図は、本 弥八郎「鳥羽離宮跡（149次）」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2003-14（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年の図版1を基に、周辺の試掘調査成果を加味し、加筆訂正したものである。

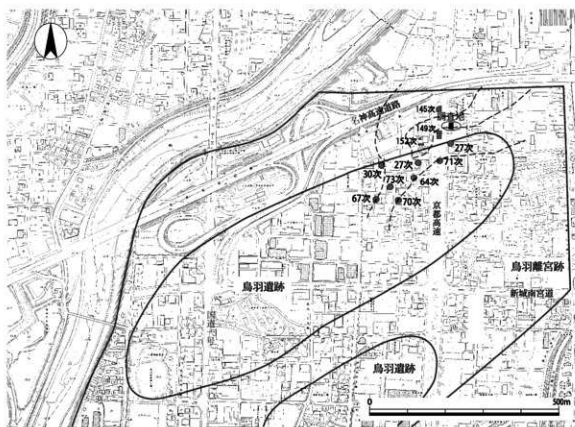


図78 湿地状堆積範囲推定図



写真23 遺物41



写真27 遺物32



写真24 遺物23



写真28 遺物33



写真25 遺物26



写真29 遺物29



写真26 遺物11

III-12 鳥羽離宮跡 2 No.21

1 はじめに

調査地は近鉄京都線竹田駅の南西、伏見区竹田中内畑町内で、近衛天皇陵や安楽寿院境内の東側に位置する青空駐車場である。

これまでに鳥羽離宮跡では数多くの調査が実施され、膨大な調査データが蓄積されている。広範囲に及ぶ鳥羽離宮跡のうち、調査地のすぐ西側に位置する東殿は、11世紀末に造営が開始され、中島を伴う園池を囲むように御塔や阿弥陀堂などの建物が配置されたことが判明している。

今回の調査地は鳥羽離宮跡として埋蔵文化財包蔵地に周知されている範囲の東端にあたり、離宮として展開した範囲を確認する上で重要な位置にあたる。周辺では、平成元年度に道をはさんだ南隣で発掘調査（第133次¹⁾）が実施され、今年度においても北方約50mの地点で試掘調査後、発掘調査が実施されている（試掘：No.92、発掘：第153次²⁾）。

今回、駐車場が営まれていた調査地に共同住宅建設が計画されたため、試掘調査を実施した。調査は平成22年1月18日に実施し、調査面積は27㎡である。

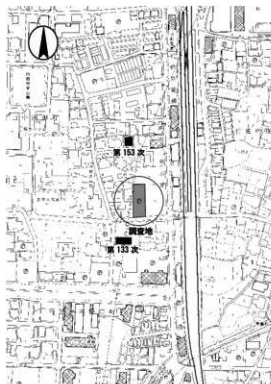


図79 調査位置図 (1:5,000)

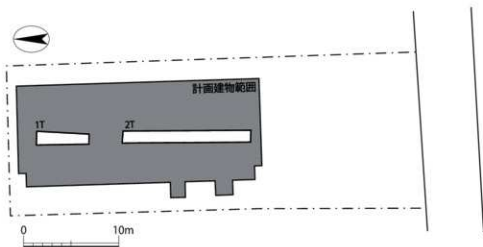


図80 調査区位置図 (1:400)

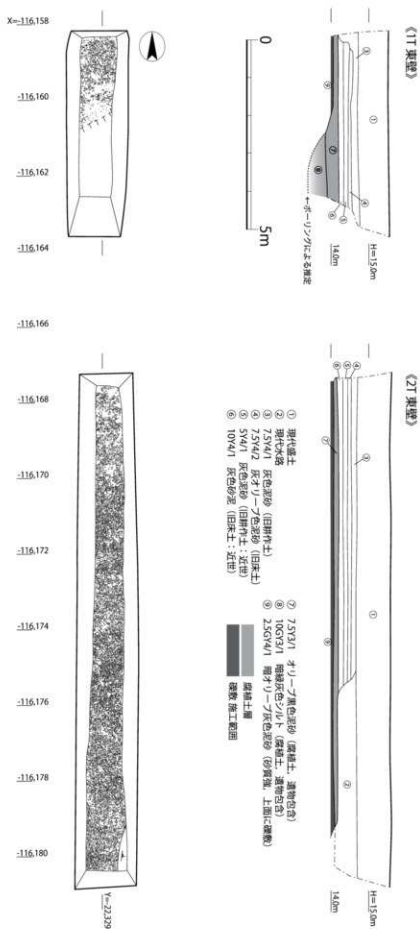


図 81 調査区平面・断面図 (1 : 100)

2 層序と遺構

調査区は計画建物の形状に合わせて南北方向に2箇所設定した(1・2T)。両調査区とも層序は同様で、上から順に現代盛土層、近世～現代にわたる複数の旧耕作土層、腐植土層(平安末期～鎌倉前期遺物包含)が堆積し、その下層には暗オリーブ灰色泥砂層が認められた。

泥砂層の上面で、径5cm前後の小礫(河原石)が敷かれている状況が確認された。この礫敷遺構は両調査区の全面で検出されたが、特に2Tでは小礫が平らな面を上にしてタイル状にほぼ隙間なく敷き詰められており、人工的に作られたものと判断することができた(写真30)。さらに平安時代末期～鎌倉時代前期の土器や瓦などを含む腐植土層が上層に堆積するため、当初、鳥羽離宮の園池遺構に伴う洲浜とも考えられた。ただ、検出した範囲では1Tの南端に認められた溝状の落ち込みを除けば、1T-2T間の南北方向約23mの範囲で、標高約14.1mの平坦な面を形成する礫敷が検出されるのみで、それ以外に確実に園池遺構と判断できるような施設等は確認されなかった。

1T南半では溝状の落ち込みを確認した。幅約0.9mのわずかな検出幅で確認された小礫の施工状況や北肩部の形状から、東西方向でなく北東-南西方向を向くと考えられる。南肩は検出されなかったため、幅は明らかでないが、深さは検出面より約0.7mを測る(ボーリングステッキによる推定)。埋土の層位からみて礫敷遺構に伴う遺構の可能性も考えられるが、詳細は不明である。

なお、2T南端の断面で確認した溝(②層)は現代の水路である。この水路は、昭和30年代の調査図「鳥羽殿跡地形実測図」³⁾にも記載されており、調査地を北北東-南南西方向に縦断する水路である。

3 遺物

平安時代末期～鎌倉時代前期の遺物が出土した(図82)。一部にまとまって出土することはなく、腐植土層中あるいは礫敷施工面の上面よりほぼ均等に出土した。出土量はコンテナ1箱程度である。内訳は、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・瓦・木製品である。

土師器(1～4)は小型及び中型の杯で、完形に復元できるものはないが、口縁部外面に2段ナデあるいは1段ナデが施され、一定の時間幅をみることができる。おおむね京都V～VI期⁴⁾におさまる。5は山茶碗で、底面に回転糸切りの痕跡を残す。

これらのほか、全形は不明なもの、須恵器甕や瓦器碗、播磨産瓦、加工痕の残る木製品の破片がそれぞれ出土した。

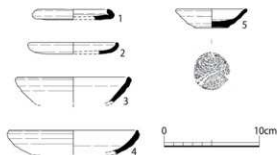


図82 遺物実測図(1:4)



写真 30 2T 全景 (南から)

4 まとめ

調査の結果、鳥羽離宮期にさかのぼる洲浜状の礫敷遺構及び上層の池状堆積を調査区のほぼ全面で確認することができた。同様の遺構は、周辺で実施された発掘調査でも確認されている(第133次・第153次)。各調査で確認された礫敷遺構は、礫の大きさや敷き方などに、場所による違いがいくぶん認められるも、上層の腐植土層に鳥羽離宮期の遺物が含まれることや、標高14.0～14.1mとほぼ同一レベルで検出されていることから、一連の遺構と考えてよいだろう。

礫敷遺構の性格については、東殿の東側縁辺近くに広大な園池が展開していたとは考えにくく、各次調査にわたって広範囲にほぼ平坦に検出されていることや、一部では確実に人工的に敷かれたと判断できる礫敷面もあることから、離宮縁辺部の整備状況を示す遺構として位置づけられる。ただし、詳細な範囲や性格に関しては、なお不明な点が多く、今後も周辺の開発行為の動向を含めて注意を払う必要がある。

なお、試掘調査後の設計担当者との協議の結果、設計変更がおこなわれたため、発掘調査は実施されることなく、検出遺構の地中保存が図られることとなった。(宇野 隆志)

註

- 1) 山本雅和 1990「第133次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局
- 2) 長戸満男 2011「鳥羽離宮跡 153次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局
- 3) 森 蘊 1959『鳥羽殿遺跡図版 第1図』『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会
- 4) 小森俊寛・上村恵章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所

III-13 長岡京左京二条三坊十三町跡 No.96

1 はじめに

調査地は伏見区久我西出町内、名神高速道路の桂川パーキングエリア（P A）の南西にあたる田地である。周辺における既往調査の状況としては、桂川P A建設に伴う一連の発掘調査¹⁾のほか、近年ではP A周辺の物流倉庫等の建設が活発化しており、それに伴い試掘調査や発掘調査が実施されている。各調査では、長岡京期の掘立柱建物等の遺構群が疎らながら検出され、条坊側溝の施工も確認されている。

調査原因は田地2枚を造成後、工場を建設する計画であるが、工場の配置等の詳細は未定であったため、試掘調査では調査地全域を調査対象とした。調査区は長岡京条坊の推定位置を考慮して、計5箇所設定した（1～5T）。調査期間は平成22年6月14・15・17日の延べ3日間である。

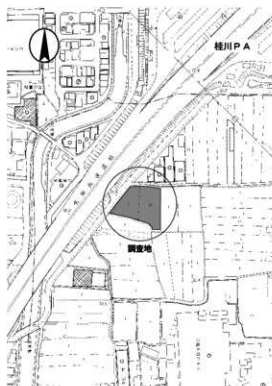


図83 調査位置図（1：5,000）

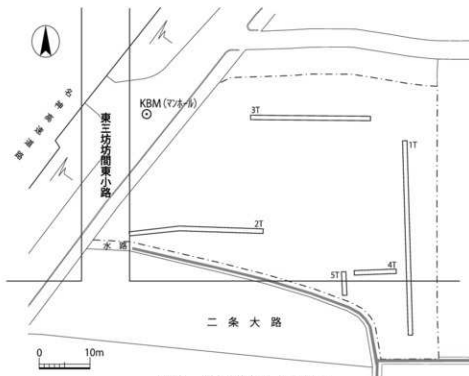


図84 調査区位置図（1：750）

2 層序と遺構

基本層序は単純で、現代から中世の耕作土がGL - 0.6 ~ 0.8mまでほぼ水平に堆積し、その下で基盤層を検出した。基盤層は灰色砂泥(⑨層)で、決して安定した地盤とはいえないが、上面で長岡京期を中心とする遺構群を検出した。

1・4・5 T (図 85) 調査地の東半部を中心に設定した調査区であり、二条大路北側溝の検出を目的の一つとした。その結果、1T及び5Tを横断する形で東西溝(溝1)が検出され、検出した範囲も推定位置と一致することから、二条大路北側溝と断定することができた。断面形は扁平な逆台形を呈し、幅1.7~1.8m、深さ0.25mを測る。

1Tの溝1のすぐ南で、北東-南西方向の溝を検出した(溝2)。深さは約0.3mを測り、幅は

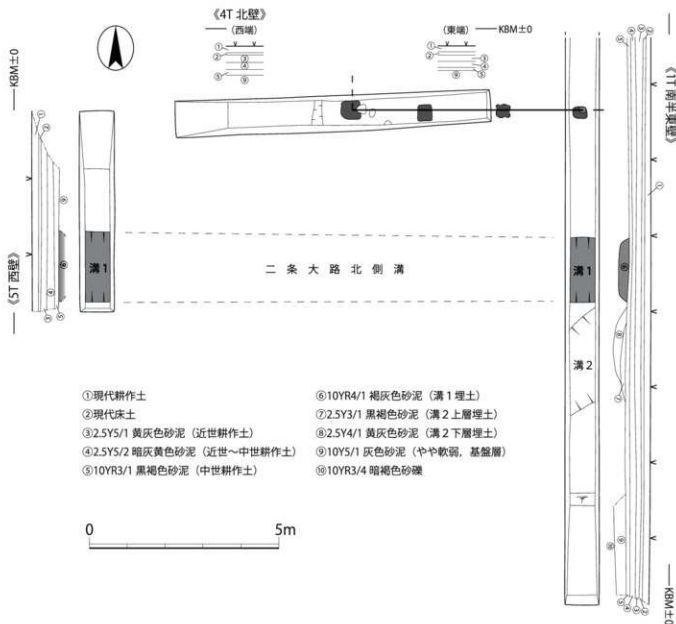


図 85 1・4・5T平面・断面図(1:100)

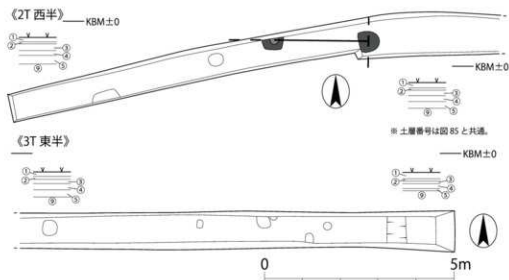


図 86 2・3T 平面・断面図 (1:100)

1.5～2.0m 程度と推定される。埋土は上下2層に分けられ(⑦・⑧層)、縮まりはない。埋土からの遺物の出土はなく、かつ溝1との切り合いもないため、時期については明らかでないが、近隣に展開する東土川遺跡に伴う弥生時代あるいは古墳時代に帰属する可能性も否定できない。さらに、1T及び4Tにまたがる形で長岡京期の遺構と考えられる柱穴列が検出された。

2T (図86) 調査地南西に設定した調査区である。調査地西端付近を南北に縦断する東三坊坊間東小路の東側溝を検出するため、可能な限り調査地西端からの掘削を試みたが、草木に阻まれ、結果として小路東築地心推定位置を横断する形で調査区を設定することができなかったようである。ただ、名神高速道路関連で実施された調査地北方の発掘調査では、東三坊坊間東小路の東西両側溝が検出されており²⁾、少なくとも東側溝は調査地にも及んでいるものと推察される。

基盤層上面で、柱穴列やピット、中世耕作溝などが検出された。トレンチ調査のため、詳細は不明であるが、柱穴列の掘方は平面隅丸方形を呈し、長岡京期の建物遺構に復元される。

3T (図86) 調査地北部に東西方向に設定した調査区である。他の調査区同様、柱穴やピット、耕作溝などが基盤層上面で検出された。各調査区の中で、遺構面検出レベルが最も高く、KBM(西面車道上マンホール) - 1.0m である。

3 遺物

長岡京期～中世の遺物が包含層や遺構より出土した(図87)。検出遺構数が少ないうえ、ほとんどの遺構は検出するにとどめているため、出土量はごく少量でコンテナ1箱にも満たない。

溝1出土(1～6) 長岡京二条大路北側溝に推定される溝で、長岡京期の遺物が一定量出土した。主に土師器(碗・皿)、須恵器(蓋・杯・甕・平瓶)、瓦が出土し、このほか緑軸陶器(5)、木製品(6)もみられる。緑軸陶器は火舎と思われる胴部片で、胴部の中央付近に沈線が水平方向に1条めぐる。木製品は横櫛で、幅2.3cmが残存する。平面形は肩部がやや丸みを帯びた長方形に復元される。切り通し線は外縁にほぼ平行し、2歯1単位として歯を挽き出している。

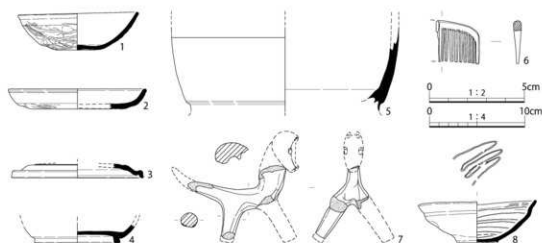


図 87 遺物実測図（1：4、6のみ1：2）



写真 31 5T 全景（北から）

⑤層出土（7・8） 中世耕作土層の⑤層からは長岡京期～中世の遺物が出土した。長岡京期の遺物の小片が中世の遺物よりも多く出土しており、耕作によって長岡京期の遺構面が削られたことが窺える。図化したものに土馬（7）や瓦器碗（8）がある。

4 まとめ

調査の結果、各調査区において長岡京期の遺構が良好に残存していることが明らかになった。周辺の調査成果とも合わせれば、調査地全域には中世耕作土下層で条坊関連遺構や建物遺構などの長岡京期の遺構が展開していると想定される。

なお、本調査地における埋蔵文化財の取り扱いについては、試掘調査成果と今後の建築計画の内容に基づいて指導をおこなう予定である。

（宇野 隆志）

註

- 1) 野島永他 2000『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第 28 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
 - 2) 百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一 1991「長岡京左京二条三坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 石尾政信他 1992「長岡京跡左京第 241・267・268 次 向日工区」『京都府遺跡調査概報』第 51 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

IV 試掘調査一覧表

平成21年度1月～3月

平安宮地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
1	内裏跡・聚楽遺跡	上京区下立売通千本東入田中町477-8	3/5	GL-0.95mで平安時代の整地層を検出。	6㎡	09K550
2	陸陽京跡・聚楽遺跡	上京区下立売通千本東入中務町486-31他2筆	2/10	大半が既存建物による攪乱。一部で平安時代柱穴が遺存。免掘調査を指導。	89㎡	09K458
3	兵部省跡	中京区西ノ京内畑町34	3/19	GL-0.4mで黄褐色砂礫の地山。遺構はなし。	8㎡	09K398
平安京左京地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
4	三条一坊六町跡	中京区西ノ京港ノ内町20-12	3/1	GL-1.25mにて基盤層確認。顕著な遺構なし。	19㎡	09H471
5	四条三坊九町跡・鳥九藏小路遺跡	中京区室町通六角上る鳥羽子屋町490,492,494	2/16	GL-1.4mで中世整地層、-1.8mで基盤層。近世の削平が著しく、中世以前の遺構は僅少。	29㎡	09H399
平安京右京地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
6	二条三坊六町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京塚本町6-2, 3-1	2/1	GL-0.7～0.9mで灰色砂礫シルト混じりなどの基盤層を確認。時期不明の溝・土坑を確認。	62㎡	09H447
7	三条三坊七町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京徳大寺町1	2/4	GL-1.5m前後にて、弥生～平安時代の遺構を多数確認。設計変更を指導。本文3頁。	50㎡	09H457
8	三条三坊十町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京徳大寺町1	3/8	GL-1.25～1.65mで基盤層。設計変更を指導。	28㎡	09H539
9	三条三坊十四町跡	中京区西ノ京桑原町3	2/5	遺構面の残存を確認。No.44で再調査実施。	54㎡	09H491
10	七条三坊二町跡	下京区西七条朱雀町1-2他	3/15	旧耕土下。GL-2.2mまで堀地・流水堆積。	21㎡	09H468
11	九条大路跡	南区唐橋羅城門町37他	1/14	GL-0.6mで砂礫の基盤層。条坊遺構は確認できず。	68㎡	09H408
12	九条三坊十五町跡	南区吉祥院前河原町30	3/10	GL-0.74mで氾濫堆積。遺構・建物なし。	29㎡	09H535
太秦地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
13	龍安寺御陵ノ下町遺跡	右京区龍安寺御陵ノ下町2-1	3/25, 26	GL-0.3mで平安後期の遺物包含層を確認。No.55で引き続き調査実施。	27㎡	09S437
14	龍安寺御陵ノ下町遺跡	右京区龍安寺衣笠下町20, 23	1/6	GL-0.1～0.5mで地山を検出。	30㎡	09S390
北白川地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
15	白河内殿跡	左京区聖護院逢草蔵町43-2, 43-3, 43-4	1/12	一部で平安時代後期の包含層を確認。No.67で再調査実施。本文28頁。	30㎡	09R272
16	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町	2/9, 10, 17	法勝寺跡の中島及び池の範囲を部分的に確認。設計変更を指導。本文39頁。	63㎡	09R403
17	史跡南禅寺境内	左京区南禅寺福地町86他	1/26	設計GL-38cm～50cmで旧汚水管の掘方。同76cm～85cmで参道遺構を検出。	4㎡	21N041
伏見・醍醐地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
18	伏見稲荷大社境内	伏見区深草藪之内町68他69筆	3/17	山側ではGL-0.25m、平地側では-1.10mで基盤層。近世以降の土坑・溝などを検出。本文62頁。	39㎡	08S202
19	京都市指定史跡 法界寺境内	伏見区日野西大道町14-2, 14-4, 15-3の各一部	2/3	GL-0.8mまで現代盛土。GL-1.2mで地山。近世以前に遡る明確な遺構はなし。本文73頁。	14㎡	09KS003
鳥羽地区						
番号	道跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
20	鳥羽離宮跡	伏見区竹田真幡木町65	1/13～22	GL-1.4mで弥生時代の遺構を多数確認。本文77頁。	90㎡	09T448
21	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町146, 147	1/18	GL-1.4mで鳥羽離宮期の石敷遺構を確認。設計変更を指導。本文93頁。	27㎡	09T373
22	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島秋ノ山町100番1の一部	1/25	鳥羽離宮北側の園池。GL-2.9mで池底を検出。	10㎡	09T439
23	鳥羽離宮跡	伏見区中島前山町57他	3/23	GL-1.9m。泥土層上面で耕作溝を確認。	28㎡	09T449

Ⅳ 試掘調査一覧表

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
24	長岡東京京極大路跡	伏見区久我本町11-4, 11-5	3/3	GL-1.84mで南北方向の溝を検出。	33㎡	09NG517
25	長岡京左京二条三坊八町跡・通冠井遺跡	南区久世東土川町180-1, 182-3, 184-1, 2, 185-3/4	2/8	GL-1.6mで緑灰色極細砂の基盤層。遺構、遺物ともに確認できず。	87㎡	09NG418
26	長岡京左京四条四坊七・十町跡	伏見区久我西出町14-8他	1/27	GL-0.9mで、弥生～古墳時代、長岡京期の遺構を確認。設計変更を指導。	62㎡	09NG433

平成22年度4月～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
27	一条大路・聚楽第跡	上京区一条通松屋町西入鏡石町6	10/5	GL-0.5mで聚楽第本丸北濠を検出。	10㎡	10K269
28	大蔵省跡	上京区仁和寺街道七本松東入白竹町189-2	7/13	GL-1.5mで黄褐色砂泥の基盤層を確認。近世以降の土坑を複数確認。	10㎡	10K070
29	主水司跡・聚楽遺跡	上京区西院町923	6/30	GL-0.4mで平安期の整地層、-0.6mで基盤層。顕著な遺構はなし。	30㎡	10K088
30	豊楽院跡	中京区聚楽堀西町100	10/1	大平が近世の土取りなどの擾乱。一部、GL-0.8mで黄褐色砂泥の基盤層を確認。	15㎡	10K237
31	豊楽院跡	中京区聚楽堀南町19-2	10/12	GL-3.0mで黄褐色砂泥の地山を確認。遺構はなし。	10㎡	10K211
32	右馬寮跡	中京区西ノ京右馬寮町13-6他	8/2	GL-0.75mにて灰色砂礫シルト混じりの基盤層。平安時代に遡る遺構なし。	68㎡	10K073

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
33	二条三坊六町跡	中京区鏡屋町27他	11/8, 9	近世における擾乱が顕著。	90㎡	10H294
34	三条三坊五町跡・烏丸御池遺跡	中京区三条通室町西入御池町5	8/30	GL-1.6mで平安時代中期～中世の遺構群を検出。発掘調査を指導。	50㎡	10H230
35	三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡	中京区富小路通御池上る守山町156-3	10/18	GL-1mで中世以前の遺構を検出。取り扱い協議中。	16㎡	10H213
36	四条一坊十二町跡	中京区壬生坊地町14-1	4/28	GL-1～1.2mで地山。顕著な遺構なし。	27㎡	09H581
37	六条一坊八町跡	下京区中堂寺台地町1, 1-9	6/7～9	壬生川・万寿寺交叉点北側の4ヶ所高-93～118cmで基盤層。削平・擾乱により顕著な遺構なし。	208㎡	10H028
38	八条三坊九町跡・東本願寺前古基群	下京区七条通烏丸西入東境町171, 173, 173-1, 173-2, 175	4/2	GL-0.8mで室町時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	6㎡	09H537

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
39	史跡妙心寺境内・北辺四坊三町跡	右京区花園妙心寺町20他、花園寺ノ中町16-1, 16-2	7/26	GL-0.23mで近世以降の整地面。	2㎡	22N009
40	二条二坊十一町跡・御土居跡	中京区西ノ京殿町38	6/23, 24	GL-0.45mで御土居の痕跡、GL-0.8mで平安時代の遺構面を検出。発掘調査を指導。	30㎡	09H221
41	二条三坊十一町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京小堀池町3-4他	9/15	GL-1mで砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	36㎡	10H195
42	三条一坊四町跡・壬生遺跡	中京区梅地町地内(梅尾公園)	9/6, 7	GL-1.5mで砂礫の基盤層。-1.4mで平安時代中期の包含層を確認。	21㎡	10H105
43	三条二坊二町跡・西大宮大路跡	中京区西ノ京輪町65	12/14	GL-1.0mで西大宮大路路面と西側溝を確認。取り扱い協議中。	18㎡	10H402
44	三条三坊十四町跡	中京区西ノ京桑原町3	6/21	平安時代の柱穴や溝などを確認。取り扱い協議中	151㎡	09H491
45	四条四坊九町跡	右京区山ノ内西裏町15, 15-90	9/9	GL-1.4～1.5mにて基盤層。遺構・遺物ともになし。	33㎡	10H198
46	西京極大路跡	右京区西院東貝川町10-2	5/13	GL-1.38mで湿地堆積。遺構・遺物なし。	11㎡	09H572
47	六条二坊二町跡・西大宮大路	中京区壬生東高田町45	11/4	広範囲に大規模な擾乱あり。GL-3.8mまで掘削したが、地山確認できず。	74㎡	10H200
48	六条三坊一町跡・西院遺跡	右京区西院西寿町16	10/7	GL-0.8～1.2mで砂礫の地山を検出した。	17㎡	10H242
49	七条二坊十二町跡・西市跡、衣田町遺跡	下京区西七条北衣田町49	8/9	GL-0.25mで地山を検出。擾乱が多く、顕著な遺構や遺物はない。	28㎡	10H139
50	八条三坊十二・十三町跡	南区吉祥院向田東町27, 28-1	4/19	GL-0.6mで安定した黄褐色砂泥の基盤層を確認。顕著な遺構はなし。	14㎡	09H487
51	九条二坊八町跡	下京区梅小路高畑町13	9/17	GL-85cmで湿地状の堆積を検出。	36㎡	10H225
52	九条二坊十一町跡	南区唐橋西平垣町21-1, 22-1, 23	7/9	GL-1.1m以下、湿地状堆積。	28㎡	10H126

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
53	村ノ内町遺跡	右京区常盤出口町5他	4/7	GL-30～35cmで竪穴住居等多数の遺構を確認。発掘調査を指導。	61㎡	09S499
54	広隆寺旧境内・常盤仲之町遺跡	右京区太秦常盤岡町5他、綾岡町36-8他	5/6	残存状況が良好な調査区では、GL-0.25mで平安時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	37㎡	09S108
55	龍安寺御陵ノ下町遺跡	右京区龍安寺御陵ノ下町2-1	5/17、25	既存施設に伴う擾乱が顕著。一部で、平安後期の南北溝などを検出。発掘調査を指導。	34㎡	09S437

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
56	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1	8/24、25	GL-0.5mで基盤層、竪穴住居や土坑などの遺構を多数検出。発掘調査を指導。	46㎡	10S135
57	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1	8/23	GL-1.0mで基盤層、竪穴住居や土坑などを検出。発掘調査を指導。	18㎡	10S134
58	植物園北遺跡	左京区下鴨南野々神町1	7/15、16	GL-1.2mで基盤層を確認。ピットや土坑を検出するも遺構密度は希薄。詳細分布調査報告平成22年度参照。	86㎡	10S098
59	植物園北遺跡	左京区下鴨北園町5,6	11/30	GL-45cmで褐色系砂泥の基盤層を確認。上面で柱穴及びピットを複数検出。発掘調査を指導。	33㎡	10S377
60	相国寺旧境内	上京区上柳原町117-2、111-1、115-1、相国寺門前町700-6、700-7	5/27	GL-0.5mで中世～近世の遺構群を検出。設計変更を指導。本文24頁。	29㎡	10S016
61	相国寺旧境内・上御堂遺跡	上京区烏丸通上立売上る相国寺門前町647-20他	12/8	既存建物下で遺構の残存を確認。取り扱い協議中。	36㎡	10S256
62	上京遺跡・寺ノ内旧城	上京区寺ノ内通堀川西入東町407-1他	7/30	近世の遺構面が3面。GL-1.7mで基盤層。	27㎡	10S127
63	上京遺跡	上京区北舟橋町847-2、857-3、山名町817-2	7/7	GL-40～55cmにおいて、黒褐色砂泥確混じりの基盤層。顕著な遺構はなし。	34㎡	10S042
64	上京遺跡	上京区堀川通上立売下る北舟橋町860-1、860-3、今出川通大宮一丁東入上る北猪熊町295、297、305	4/1	GL-0.7m以下で室町時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	51㎡	09S420
65	上京遺跡	上京区大宮通今出川上る嵐世町135-1	4/20	近世の土取り、ピット群を検出。大半は既存建物による擾乱。詳細分布調査報告平成22年度参照。	54㎡	09S582

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
66	白河北殿跡	左京区丸太町通川端東入東丸太町29-6、29-9、29-11、29-16	8/12	GL-1.2mで中世以前の遺構面。遺構密度は低い。	22㎡	10R150
67	白河南殿跡	左京区聖護院蓮華蔵町43-2、43-3、43-4	6/1～3	白河南殿に伴う建物の地業を確認。本文28頁。	39㎡	09R272
68	白河南殿跡・岡崎遺跡	左京区聖護院蓮華蔵町29-5、29-6、29-11、29-18	9/27	GL-1.1mにて院政期の整地層。GL-1.2mにて暗灰黄色砂礫の基盤層を確認。遺構は希薄。	21㎡	10R163
69	尊勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎西天王町70、70-2	9/13、11/1	GL-0.4mで尊勝寺阿弥陀堂にかかわる遺構を検出。本文35頁。	34㎡	10R214
70	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町(京都市動物園内)	4/13～16、12/15、16	法勝寺阿弥陀堂の地業の一部を確認したほか、各調査区で遺構及び遺構面の残存を確認。設計変更を指導。本文48頁。	86㎡	09R580
71	公家町遺跡・法成寺跡	上京区染殿町680他	11/24～26	平安～幕末(公家町)に至る複数の遺構面の残存を確認。取り扱い協議中。	45㎡	10S327

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
72	法興院跡	中京区河原町夷川上る指物町333-1	5/12	GL-0.94～1.85mで砂礫の基盤層。遺構・遺物なし。	20㎡	09S516
73	御土居跡	中京区河原町通二条下る一之船入町386-2、378の一部、寺町通二条下る榎木町450-11の一部	12/6	敷地西端で近世の墓(GL-1.1m～)を検出。本文58頁。	37㎡	10S286
74	法性寺跡	東山区福福上高松町60	7/20	GL-0.3～0.95mで弥生時代の遺構を検出。発掘調査を指導。	61㎡	10S077
75	中臣遺跡	山科区西野山中臣町20	7/28	GL-0.5～0.7mで基盤層。時期不明の土坑・溝など数基を検出。	39㎡	10N102

IV 試掘調査一覧表

76	大宅遺跡	山科区大宅中小路39, 40-1, 46-1及び46-2, 47 (一部)	10/14	表土直下にて橙色シルト層確認じりの基盤層。顕著な遺構・遺物はなし。	54㎡	10S238
77	大宅廃寺・大宅遺跡	山科区大宅山田町	11/15, 16	GL-0.2m~1.1mで地山を検出。顕著な遺構・遺物はみられない。	159㎡	10S284

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
78	史跡醍醐寺境内	伏見区醍醐伽藍町22-3	9/21	GL-0.66mで近世造成面。その下層で石列及び溝等を検出。本文65頁。	28㎡	22N024
79	史跡醍醐寺境内	伏見区醍醐醍醐山8	5/26	中世後期頃の石垣を検出。本文68頁。	60㎡	22N02
80	伏見城跡	伏見区西町401-2	6/18	GL-1.8mで埋地堆積を確認。	17㎡	10F059
81	伏見城跡	伏見区桃山町伊庭16	4/5	GL-60cmで基盤層。顕著な遺構なし。	22㎡	10F001

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
82	上久世遺跡	南区久世上久世434	5/20	大半は河川堆積。調査地北端において、GL-0.8mで室町時代の溝を検出。	57㎡	10S033
83	史跡名勝嵐山	西京区嵐山山下町22-9の一部, 22-1の一部	9/29	GL-0.7~2.1mで砂礫の地山を確認。顕著な遺構なし。	22㎡	22N021
84	中久世遺跡	南区久世中久世町三丁目63番	4/26	GL-0.7~0.8mで地山。顕著な遺構・遺物はない。	31㎡	09S576
85	中久世遺跡	南区久世中久世町3丁目76-6, 76-7	9/21	一部で階部を確認したものの、大半が埋地状堆積。	75㎡	10S227
86	大敷遺跡・中久世遺跡・下久世構跡	南区久世殿城町476-1	5/10	GL-0.45mで基盤層。中世の井戸1基を検出。	16㎡	10S045
87	福西古墳群	西京区大枝東長町1-210の一部	8/5	GL-0.6mにて暗褐色粘土の遺構面。遺物なし。	32㎡	10S169
88	福西古墳群	西京区大枝東長町1-59他	4/23	GL-0.5mで黄褐色粘質土の地山を確認。遺構なし。	31㎡	09S573
89	福西古墳群	西京区大枝東長町1-68	6/28	GL-0.2~0.5mで黄褐色砂礫の地山。	28㎡	10S049

島羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
90	唐橋遺跡	南区吉祥院西定成町30	6/4	GL-0.8cmで暗灰黄色砂泥の基盤層。遺構・遺物ともになし。	12㎡	10S062
91	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町75	4/16	鳥羽離宮に伴う遺構はなし。近世の南北溝を2条確認。	23㎡	09T587
92	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町131	6/10	GL-1.1mで園池遺構埋土層。発掘調査を指導。	11㎡	10T032
93	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島鳥羽離宮町24	7/5	GL-1.3~1.4m以下、埋地状堆積。	12㎡	10T076
94	下鳥羽遺跡	伏見区竹田松林町68	9/10	GL-1.3mで古墳時代後期の竪穴住居状遺構等を確認。設計変更を指導。	30㎡	10S189

長岡地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	受付番号
95	長岡京東院跡	南区久世殿城町309-1の一部他	5/31	GL-1.66mで黄灰色シルトの基盤層。顕著な遺構・遺物なし。	12㎡	10G065
96	長岡京左京三条坊十三町跡	伏見区久我西出町2-33他	6/14~17	GL-0.6~0.8mで灰色砂泥の基盤層を確認。上面で長岡京期の遺構を検出。本文97頁。	93㎡	10G036
97	長岡京左京四条四坊八・九町跡	伏見区久我西出町13-67	8/4	GL-1.6m以下、遺構面が大半が埋地状堆積。	41㎡	10G122
98	長岡京左京六条西坊八町跡	伏見区羽東師古川町178-1他	9/2	GL-2.3mで地山。顕著な遺構や遺物は検出されず。	26㎡	10G148
99	長岡京左京九条一坊九町跡	伏見区淀大下津町174-11	11/18	GL-1.2m以下、無遺物層。	30㎡	10G285

表6 遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内 訳			出土箱数 合計
		Bランク 箱数	Cランク 箱数	出 土 箱 数	
点数及び箱数	142点 (18箱)	7箱	19箱	44箱	

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなないせきしくつちょうきほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野雄志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎農勝寺町13 京都会馆内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市	町 村					
平安京右京三条 三坊七町跡 西ノ京遺跡	京都府京都市中京区 西ノ京徳大寺町1	26100	1	35度 0分 33秒	135度 43分 39秒	2010/2/4	50	倉庫
平安京右京六条一 坊七町跡	京都府京都市下京区 中堂寺北町44	26100	1	34度 59分 50秒	135度 44分 26秒	2009/2/2, 4/2~7	65	集会所
相国寺旧境内	京都府京都市上京区 上柳原町117-2他 相国寺門前町700-6他	26100	229	35度 2分 8秒	135度 45分 2秒	2010/5/27	29	共同住宅
白河南殿跡	京都府京都市左京区 聖護院遠華蔵町43-2	26100	417-7	35度 0分 55秒	135度 46分 30秒	2010/1/12 2010/6/1~3	69	共同住宅
尊勝寺跡 岡崎遺跡	京都府京都市左京区 岡崎西天王町70、70-2	26100	417-2 418	35度 0分 55秒	135度 46分 47秒	2010/9/13, 11/1	34	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京右京三条三坊七町跡	都城跡	平安時代		柱穴・土坑・溝				地中保存
西ノ京遺跡	散布地	弥生~古墳時代		落ち込み		弥生土器・須恵器		
平安京右京六条一坊七町跡	都城跡	平安時代		泉		土師器・瓦		地中保存
相国寺旧境内	寺院跡	室町時代		土坑・堀		土師器・瓦器		
白河南殿跡	邸宅跡	平安時代後期		建物地業・溝		土師器・瓦		
尊勝寺跡	寺院跡	平安時代後期		整地層		土師器・瓦		
岡崎遺跡	集落跡	弥生~古墳時代						

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちょうきほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒 606- 8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都金館内							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒 604- 8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
法勝寺跡 岡崎遺跡	京都市左京区 岡崎法勝寺町	26100	417-1 418	35度 0分 45秒	135度 47分 10秒	2010/2/9・ 10・17	63	動物園
法勝寺跡 岡崎遺跡	京都市左京区 岡崎法勝寺町	26100	417-1 418	35度 0分 45秒	135度 47分 6秒	2010/4/13~ 16, 12/15・16	86	動物園
御土居跡	京都市中京区 一之船入町386-2他 榎木町450-11の一部	26100	149	35度 0分 45秒	133度 46分 7秒	2010/12/6	37	集会所
伏見稲荷大社境内	京都市伏見区 深草藪之内町68他	26100	1116	34度 50分 5秒	135度 46分 25秒	2010/3/17	39	社務所
史跡醍醐寺境内	京都市伏見区 醍醐伽藍町22-3	26100	A1103	34度 56分 56秒	135度 49分 13秒	2010/9/21	28	個人住宅
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
法勝寺跡	都城跡	平安時代後期		池・中島	土師器・須恵器・瓦	地中保存		
岡崎遺跡	集落跡	弥生~古墳時代						
法勝寺跡	寺院跡	平安時代後期		地業・土坑	瓦・土製円塔	地中保存		
岡崎遺跡	集落跡	弥生~古墳時代						
御土居跡	土器跡	桃山時代		墓	骨壺・陶磁器・銭貨			
伏見稲荷大社境内	神社	奈良時代		土坑・溝	土師器			
史跡醍醐寺境内	史跡	平安時代		溝		保存		

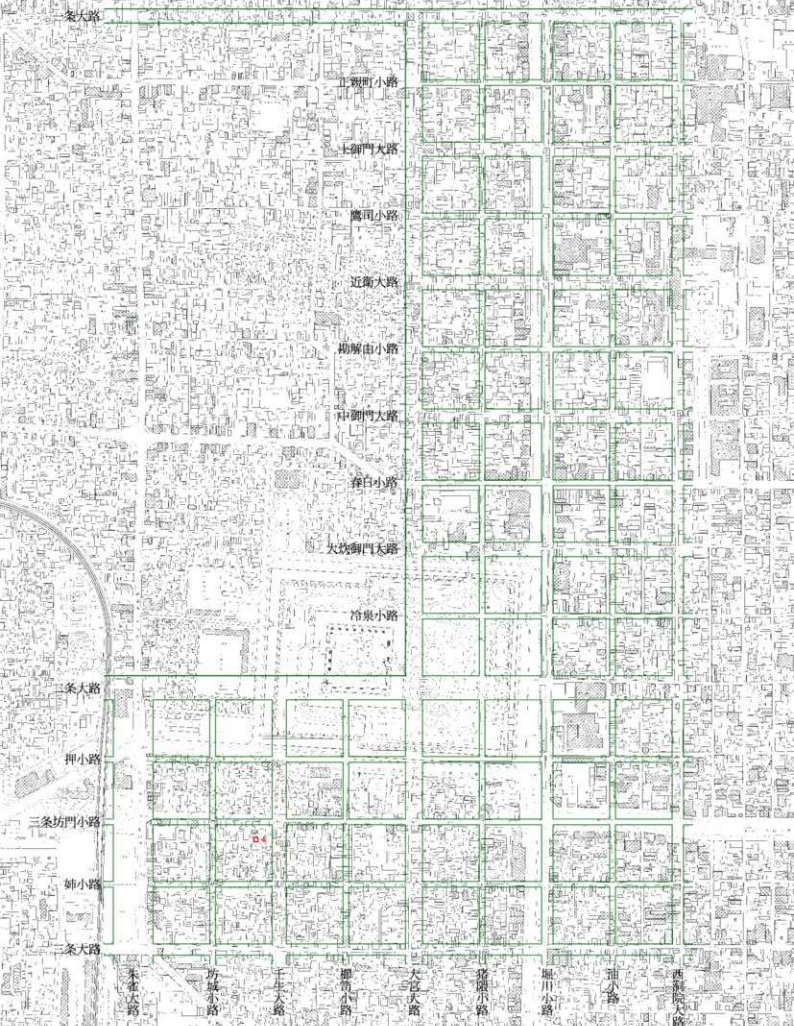
報告書抄録

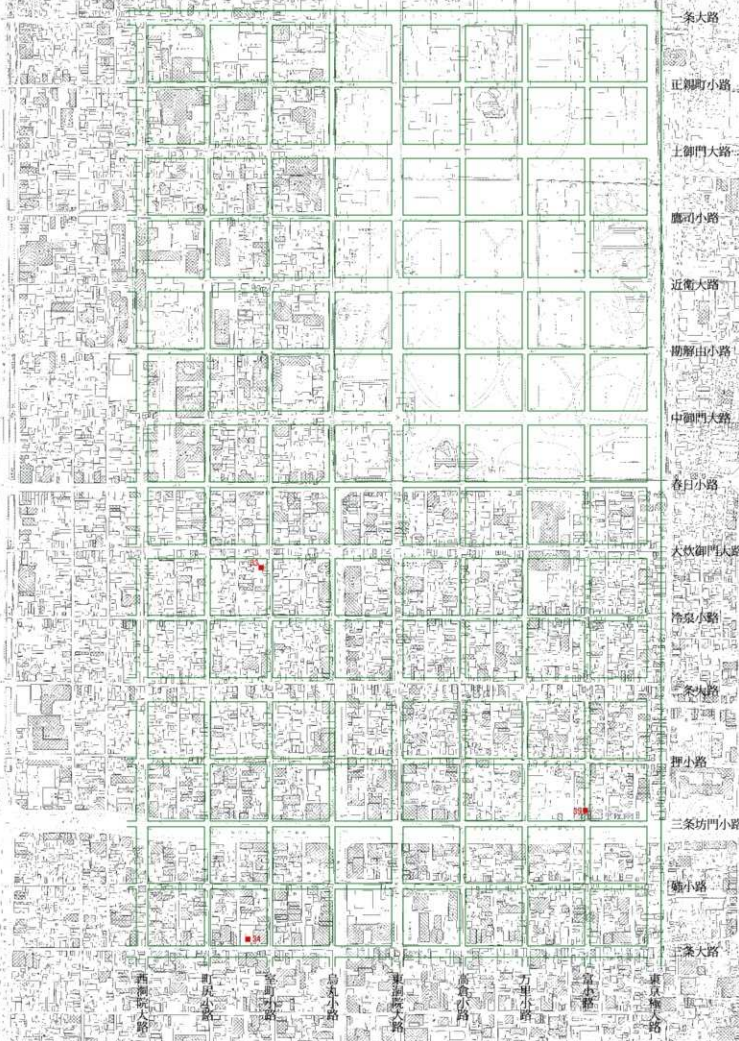
ふりがな	きょうとしないいせきしくつちようさほうこく								
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・宇野隆志・家原圭太・西森正晃・鈴木久史								
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課								
所在地	〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会馆内								
発行機関	京都市文化市民局								
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488								
発行年月日	西暦2011年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市	町						村
史跡 醍醐寺境内 醍醐寺境内	京都府京都市伏見区 醍醐醍醐山8	26100	A1103	34度 56分 39秒	135度 50分 17秒	2010/5/26	60	工作物設置	
京都市指定史跡 法界寺境内	京都府京都市伏見区 日野西大通町14-2	26100	C1108	34度 56分 3秒	135度 48分 52秒	2010/2/3	14	庫裏 防災用道路	
鳥羽離宮跡	京都府京都市伏見区 竹田真樺木町65	26100	1166	34度 37分 19秒	135度 45分 9秒	2010/1/13~ 22	90	共同住宅	
鳥羽離宮跡	京都府京都市伏見区 竹田中内畑町146他	26100	1166	34度 57分 9秒	135度 45分 20秒	2010/1/18	27	共同住宅	
長岡京左京二条 三坊十三町跡	京都府京都市伏見区 久我西出町2-33他	26100	3	34度 56分 29秒	135度 43分 10秒	2010/6/14~ 17	93	造成 工場	
所収遺跡名	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡 醍醐寺境内	史跡	平安時代		石垣		土師器・焼締陶器		保存	
京都市指定史跡法界寺境内	市指定史跡	平安時代後期						保存	
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代後期		竪穴状土坑・溝		弥生土器・石器			
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代後期		礎敷遺構		土師器・灰釉陶器		地中保存	
長岡京左京二条三坊十三町跡	都城跡	平安時代		溝・柱穴		土師器・須恵器・瓦			

图 版

凡 例

- 平成22年1～3月 試掘調査地点
- 平成22年4～12月 試掘調査地点





一条大路

正親町小路

上御門大路

藤司小路

近衛大路

堀解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

冬大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

一条大路

東大橋大路

富少路

万平小路

高倉小路

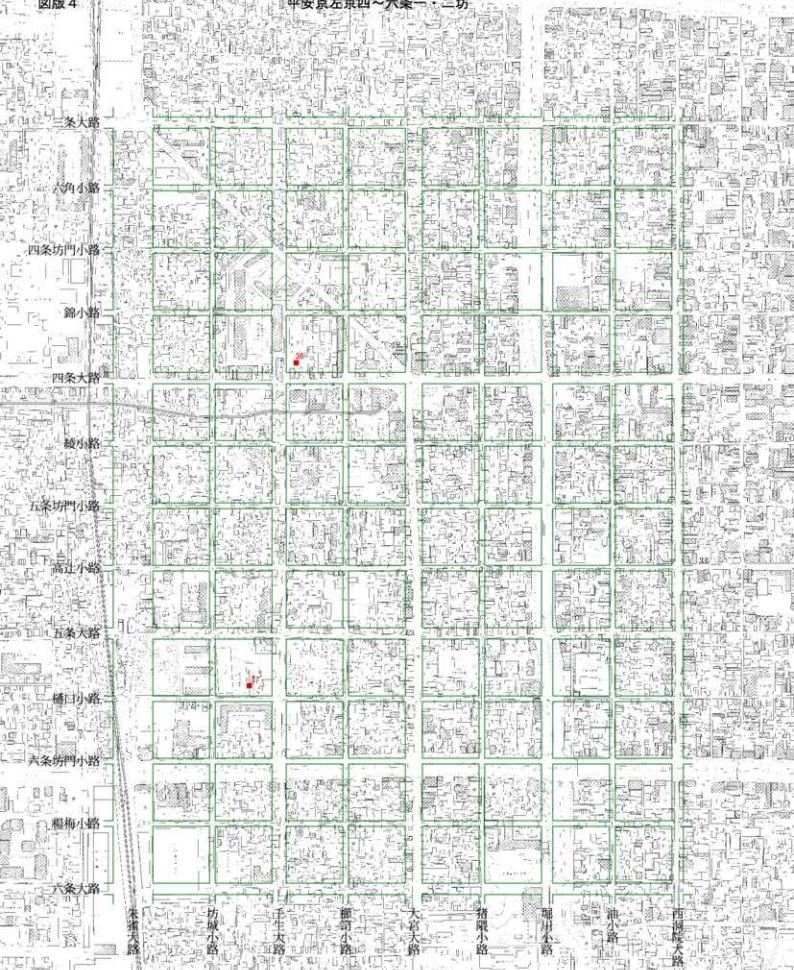
東海院大路

鳥丸小路

寺町大路

町尻小路

酒洲大路



三条大路

三条大路

四角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

橋口小路

六条坊門小路

櫻梅小路

六条大路

坊屋小路

壬生大路

橋頭小路

大岩大路

猪隈小路

飛田小路

油小路

西側院大路



三条大路

六条小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

堀口小路

六条坊門小路

堀梅小路

六条大路

西洞院大路

打戻小路

至町小路

菊丸小路

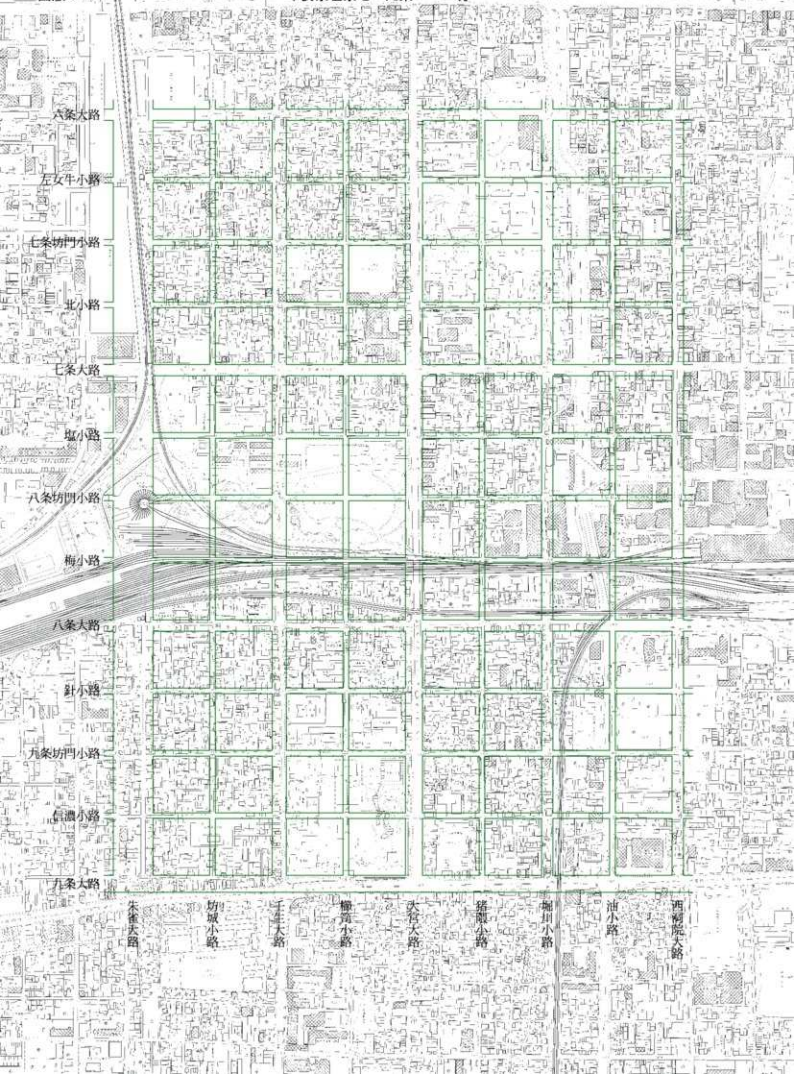
東洞院大路

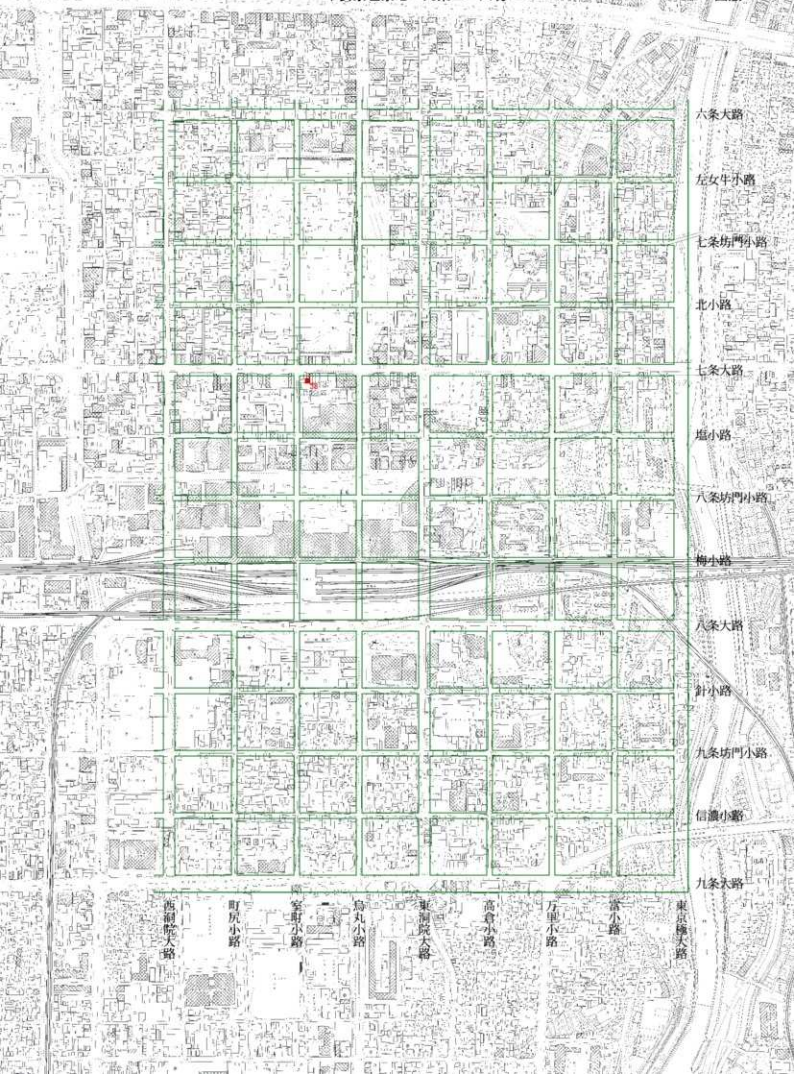
高倉小路

万里小路

富小路

東洞院大路





六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西御院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

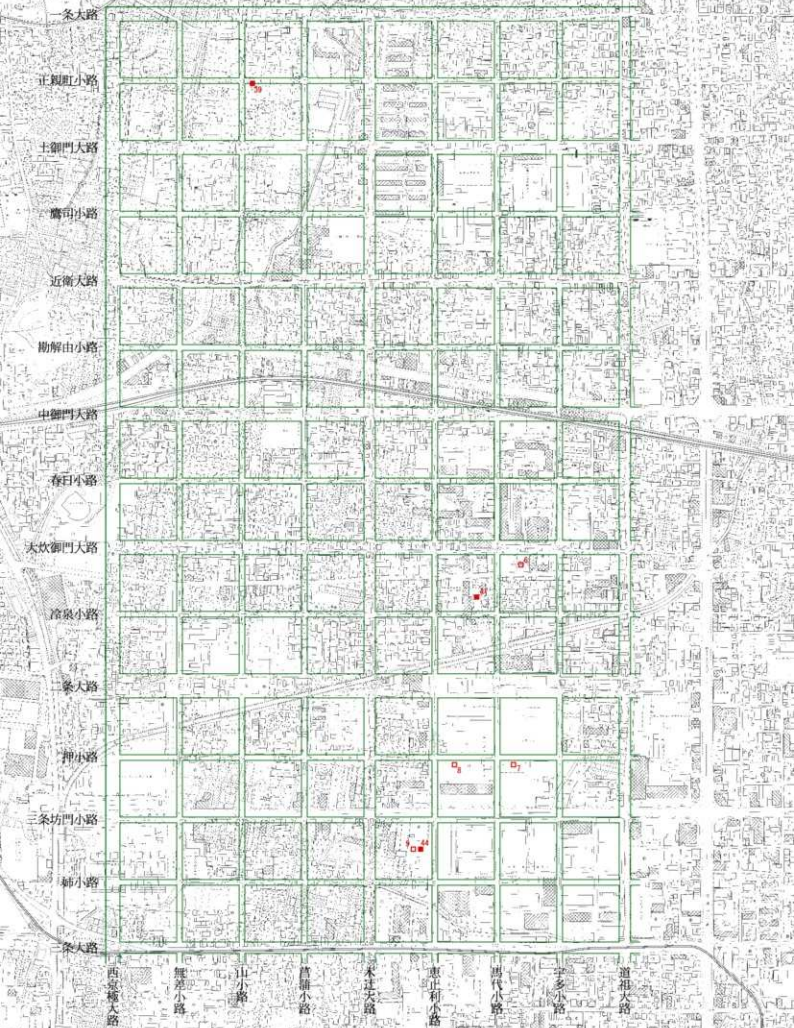
並河院小路

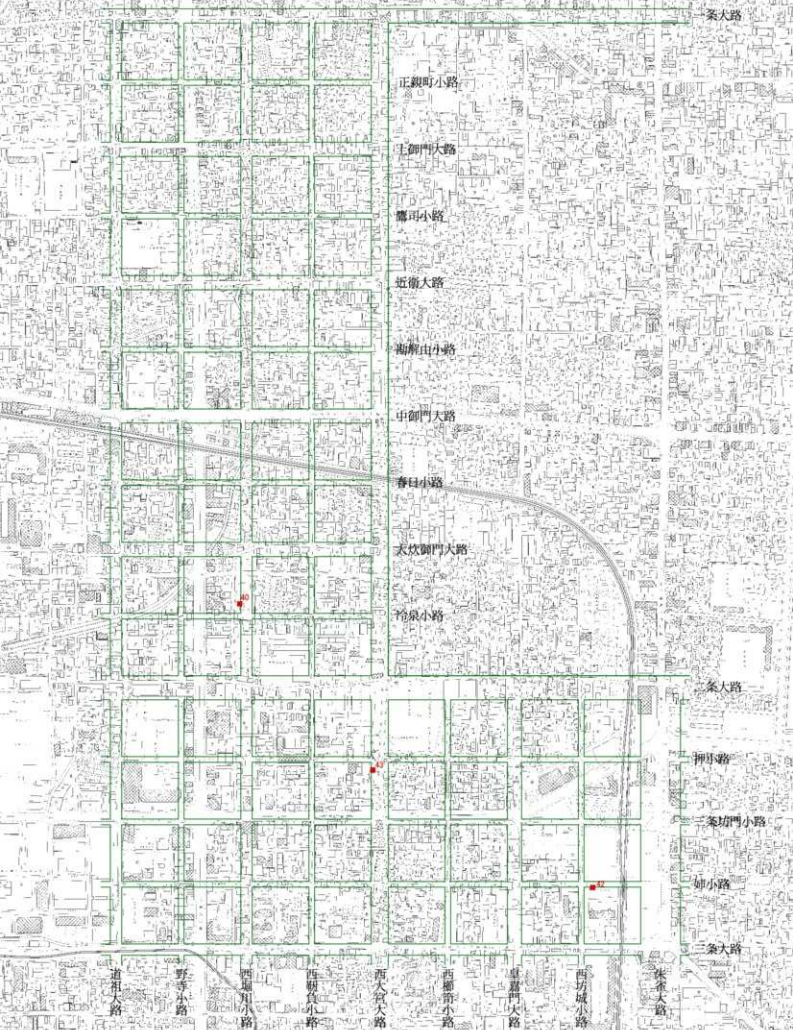
高倉小路

万里小路

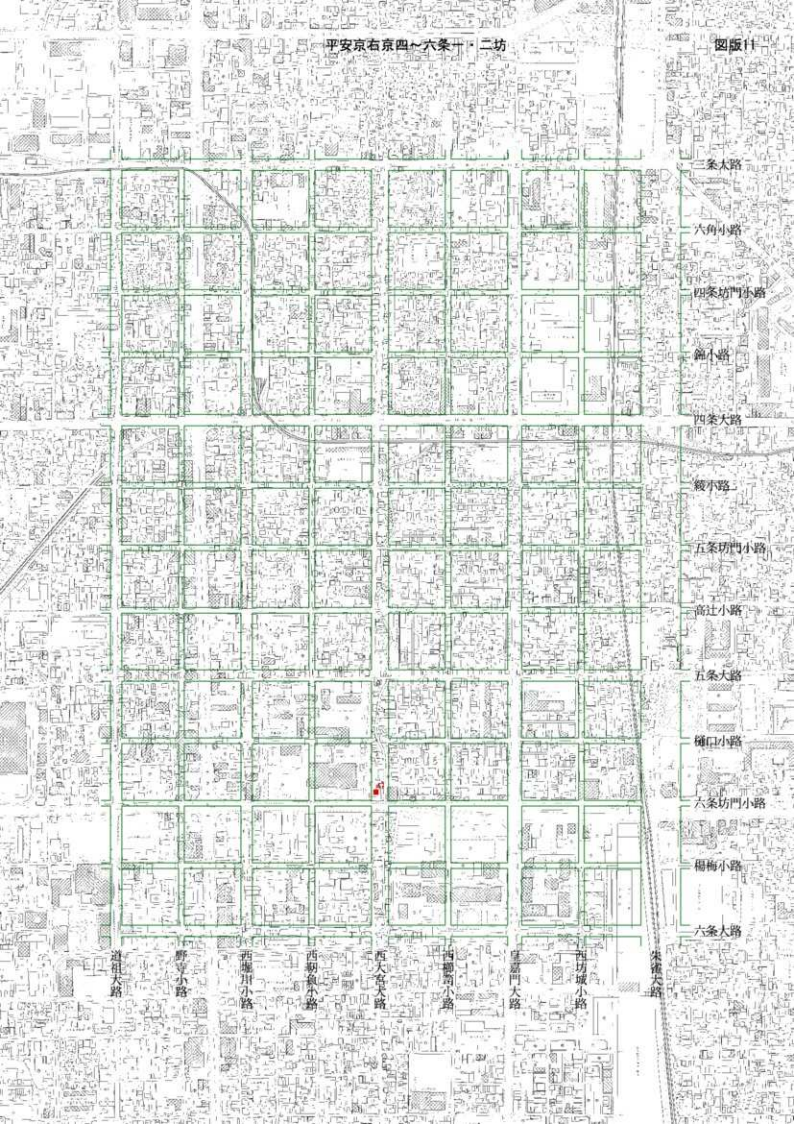
當小路

東山橋大路









三條大路

六角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

鏡小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

樋口小路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

道祖大路

野寺小路

西鷹川小路

西鞠原小路

西大宮大路

西御所小路

厚嘉門大路

西坊城小路

朱雀大路





六条大路

左女内小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

西尾川小路

西粉負小路

西人宮小路

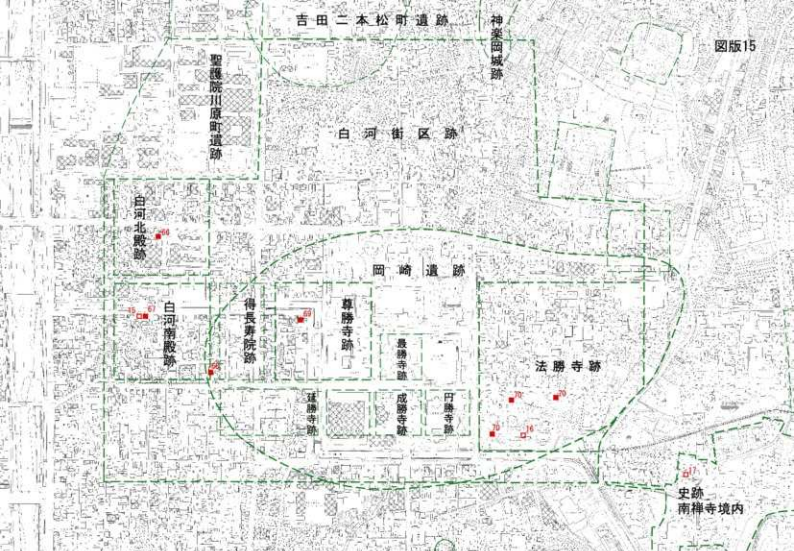
西堀高小路

高麗門大路

西坊城小路

朱雀大路



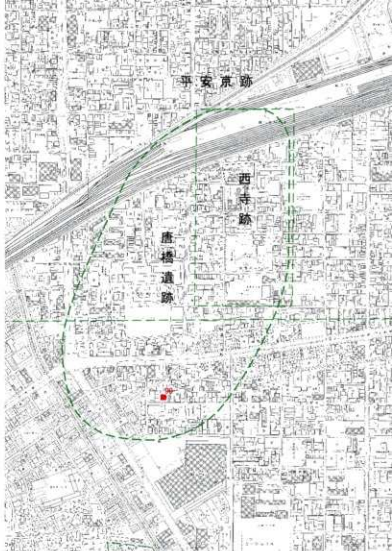


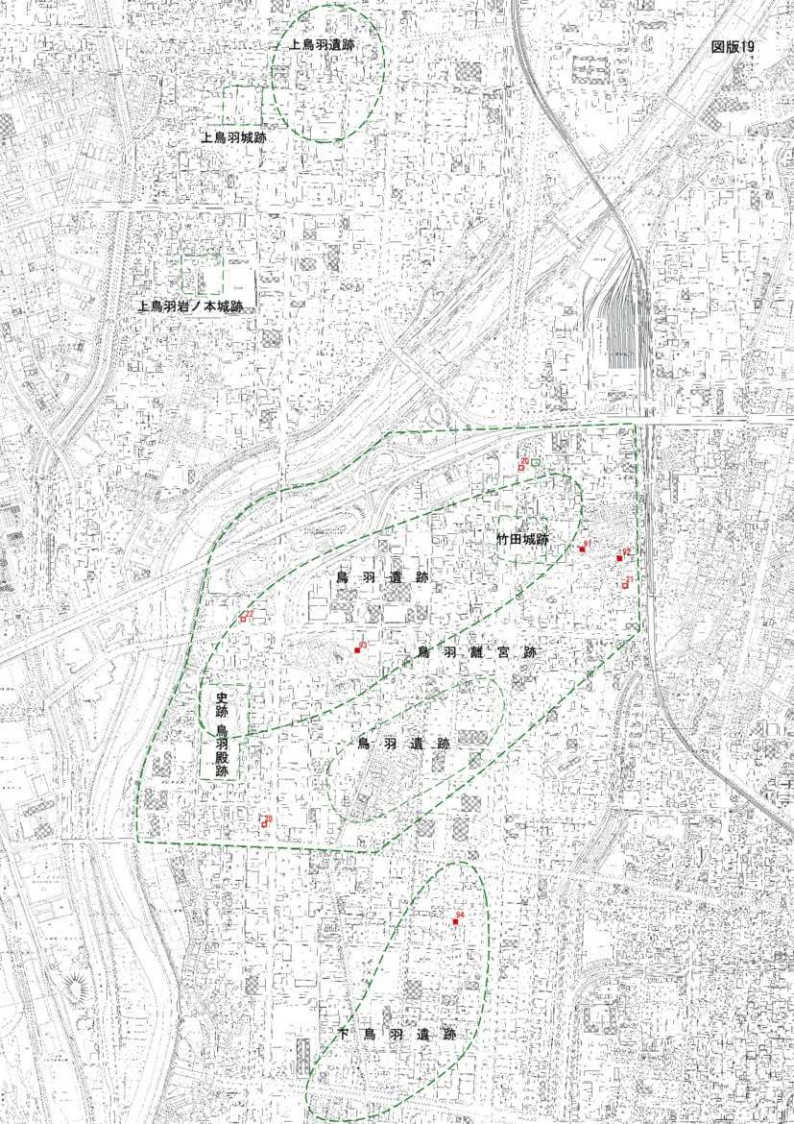
図版16





図版18





上鳥羽遺跡

上鳥羽城跡

上鳥羽岩/本城跡

竹田城跡

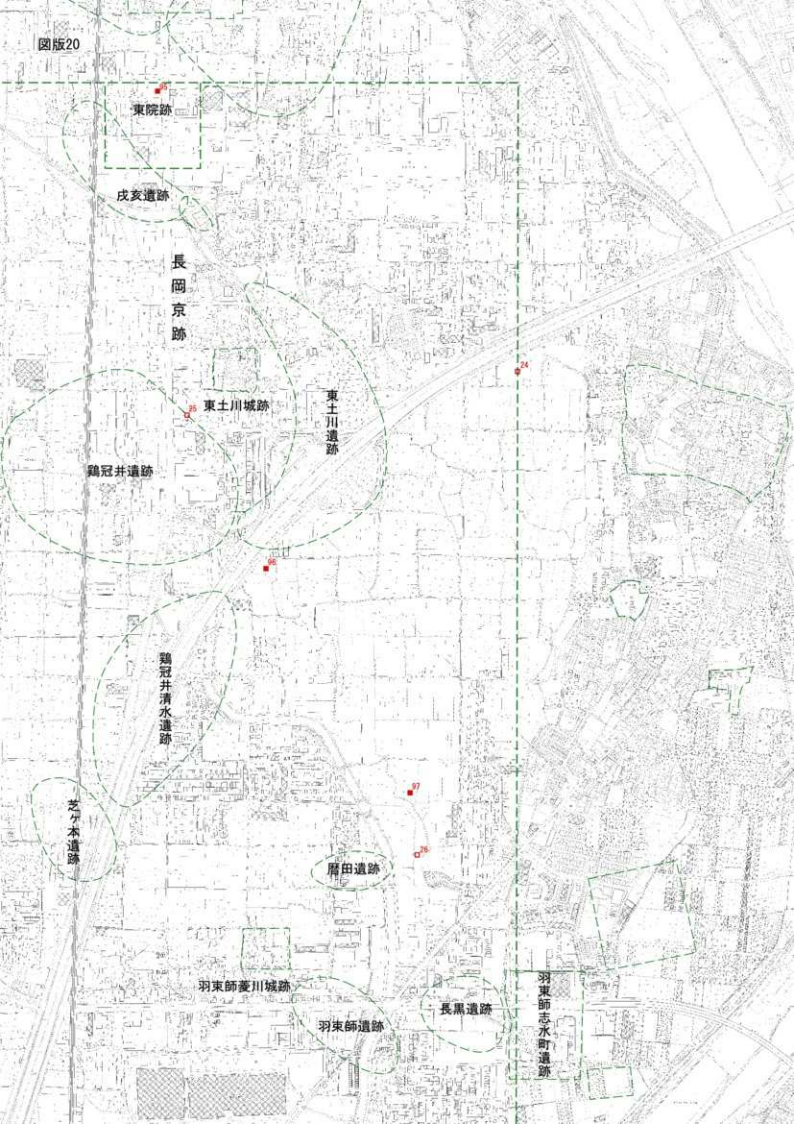
鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡

鳥羽遺跡

史跡
鳥羽殿跡

下鳥羽遺跡



東院跡

戌亥遺跡

長岡京跡

東土川城跡

東土川遺跡

鷄冠井遺跡

鷄冠井清水遺跡

芝之本遺跡

府田遺跡

羽東師菱川城跡

羽東師遺跡

長黒遺跡

羽東師志水町遺跡

京都市内遺跡試掘調査報告

平成22年度

発行日 2011年3月31日
京都市印刷物 第223254号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL.(075)761-7799
印刷 奥田印刷株式会社 TEL.(075)441-7060

